

昭和天皇 三十二の佳話

天気予報と空襲警報下の四方拝

加瀬英明

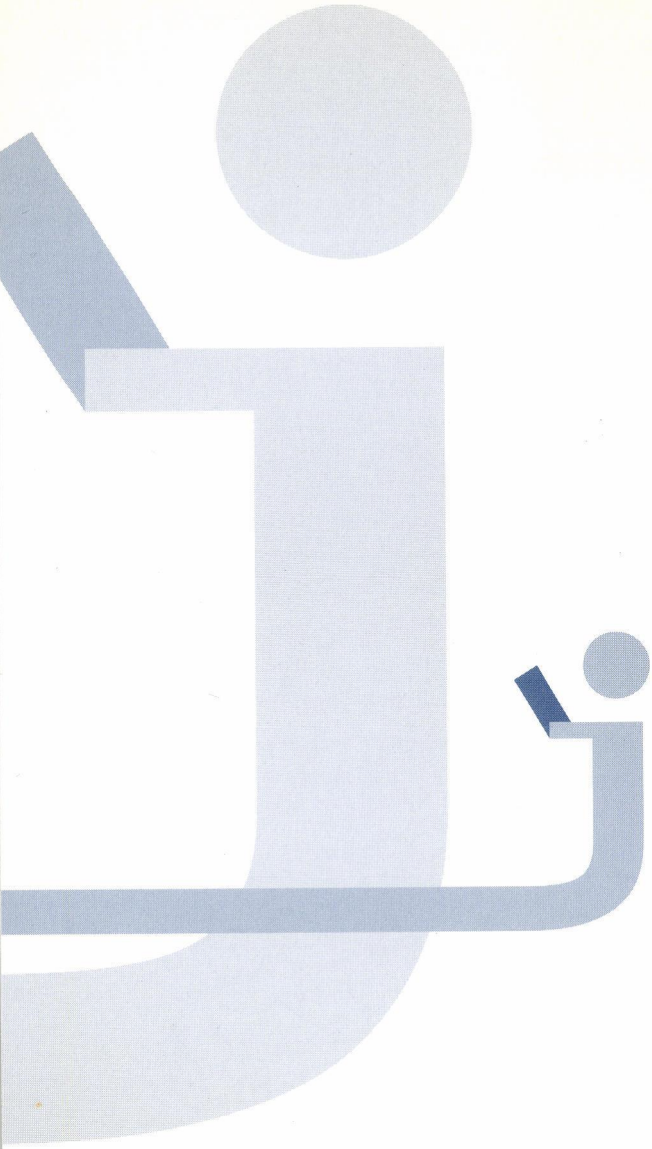
昭和天皇は、平成の日本人が失ってしまった美徳を持っていらした。

十数キロも彼方の岸へご答礼——戦艦「榛名」艦上より

これは病気であるか?——はじめて泥酔者をご覧になって

感動と微笑みのエピソードを収録!

JIPPI Compact



JIPP
Compa

昭和天皇　三十二の佳話（かわ）

―天気予報と空襲警報下の四方拝―

加瀬英明
Hideaki Kase

JIPPI Compact

実業之日本社

はじめに

人に人柄があるように、国には国柄（くにがら）がある。

日本の国柄が、これまで日本人一人ひとりの人柄をつくってきたといってよい。

私たちは日本という国が、この世界のなかで、いったいどのような特徴を備えているものか、日本の国柄についてもっと想うべきである。

今年は明治元（一八六八）年から数えて、百四十年目に当たる。そしてこの三、四十年ほど、「明治は遠くなった」といわれるようになった。

日本にとって幕末から明治は、偉大な時代だった。

日本は十九世紀の後半に、白人が覇権を握る世界において明治維新を成し遂げて、西洋を学んで近代化することに成功し、たちまちのうちに一流国に伍することができた。これはアジアの民のなかで日本だけが行えたことだった。

このような偉業を成し遂げることができたのは、一人ひとりの日本人の質が高かっただけ

ではない。庶民にいたるまで真面目で、我欲を抑え、公を重んじて、和を尊んだからである。つまり、社会の質が優れていたからだといえるだろう。

日本は君主国であってきた。君主のありかたは、どの国でもその国の国柄を表している。中国の歴代の皇帝や朝鮮の国王は、人民の窮状をよそにして、民衆から恣に収奪して贅に耽ることが多かった。

日本の天皇は節度を守った。明治天皇は『五箇条の御誓文』で「上下心ヲ一ニシテ」、『軍人勅諭』で「朕ト一心ニナリテ」、『教育勅語』で「朕爾臣民ト倶ニ……其徳ヲ一ニセン」と呼びかけているが、中国の皇帝や朝鮮の国王だったら、民衆と心や徳を一つにして、ともに心を合わせて国を護ろうと述べるようなことは考えられないことだった。民衆の側も信じなかったはずである。

昭和天皇、皇后が昭和四十六（一九七一）年二月から十月まで、デンマーク、ベルギー、フランス、イギリス、オランダ、スイス、西ドイツのヨーロッパ七ヶ国を行幸啓された。このときにはまだ直航機がなかったので、お召し機がアラスカのアンカレッジ空港に給油のために降りた。

すると、アメリカのニクソン大統領が歓迎のために、ワシントンからわざわざやって来た。天皇は堵列した陸海空、海兵隊四軍の儀仗隊を親閲された。

私はテレビに映ったその場面を、アメリカから来た友人と帝国ホテルのバーで偶然にみた。昭和天皇の歩き方が、おぼつかなかった。友人が私に「あれは〈カブキ・ウォーク〉のようにきめられた〈天皇ウォーク〉なのだろうか」と質問した。私は否定した。

その後に、赤坂見附駅から地下鉄に乗ったところ、入江相政侍従長と会った。侍従長の官舎が赤坂にあった。私と同じく浅草まで行くということだった。昼間だったので空いていた。隣に座った。私は侍従長と親しかった。

私は入江氏ほど優雅にお辞儀をする人を知らない。京都の古い公家の出身である。

私は天皇がアンカレッジで閲兵されたのを、アメリカの友人とテレビでみたことを話して、「もしかすると、陛下のお眼鏡の度が合わないのではないでしょうか」とたずねた。

すると、入江侍従長が背筋を伸ばして「いや、そんなことはございません。お上は東宮様のころから足をお滑らせになられたり、お転びになったことは、一度もございません。あのころの日本ですから、もし摂政宮や天皇がお転びになられたとしたら、日本国民が日本の前途に不吉なものをみたでしょう。だから一歩一歩に全責任を籠めてお歩きになっているうちに、あのようなお歩きかたになられたのです」と、私を窘めるようにいった。

東西を問わず、どの国であっても、皇太子は民族のその時々の男性の理想像に合わせて、

教育されるものである。

昭和天皇は日露戦争の三年前の明治三十四（一九〇一）年に、明治天皇にとって初の皇孫であり、皇太孫（天皇の孫で、皇位を継承すべき者）として生まれた。裕仁親王である。御称号として迪宮と命名された。裕と迪という字には、「広く大きな心で国を治め、人類の幸せのために尽くすように」という意味が籠められている。

昭和天皇の人格は、明治を築いた時代精神による教育によって、つくられたといってよい。

明治天皇は、迪宮が学習院初等科にあがるときに、日露戦争の旅順口攻略の乃木希典大将に学習院院長となるように懇請された。天皇は乃木に迪宮を厳しく訓育するように求めた。

明治天皇が明治四十五年七月に崩御されると、皇太子嘉仁親王が践祚（皇位を承け継ぐ）されて、元号が大正と改められた。

裕仁親王が学習院初等科を修了すると、大正三（一九一四）年に東宮御所に東宮御学問所が設けられた。日露戦争の日本海海戦の英雄であった東郷平八郎元帥が、御学問所が閉じられるまで八年にわたって総裁となった。御学問所には当時の日本の学者の粋が集められ、教育思想家の杉浦重剛をはじめとする、明治を代表する高潔な人物が講義した。

昭和天皇はこのような教育を受けられたために、明治の日本の男性の理想像を体現されていた。

いっぽう、裕仁親王が四歳になられたときから皇孫御殿で女官として、親王の保育に当たった足立たかが、「学習院での学業の御成績は中以上でいらしたんですが、一等ではいらっしゃらないようでございました」と述べているように、ご幼少時から、体操、スポーツ、算数、習字、図画、手工、唱歌などみな不得意で、不器用でいらした。

しかし、何事についても一所懸命に取り組まれた。そして几帳面に努力された。

昭和天皇は「天皇」という職人であられた。いってみれば、江戸時代から明治にかけた職人気質の方だった。男女を問わず、以前は同じような気質の日本人が、下町にも、地方にも、全国の津々浦々までいた。

明治人には、今日の日本人が失ってしまった覚悟があった。昭和天皇もそのお一人だった。

読者諸氏も、昭和天皇の生きかたを鑑（かがみ）としてほしい。

平成二十年九月

加瀬英明

はじめに　3

序　章　「覚悟」と「愛情」と　11

まず、自分を……　12
いまに夜が明けてしまう　18
稲は大丈夫だね　24

第一章　「国民」とともに　29

彼方の岸へご答礼　30
天幕を取り除いてほしい　36
カゴの鳥だった私にとって　42
チチハハはどうしているかい？　49
堪え難きを堪え　55
民をあわれむ心　59

第二章　「天皇」として　65

松と雪　66
伊勢神宮が御怒りになったのではないか？　72
祖国の運命は自分の双肩にかかっている　78
立憲君主であるのが、私の考えの基本だ　84
一視同仁　90
戦争中に会ったことがあるな　97
よくやってくれて、ご苦労である　103
天皇が泣かれた　109
お口癖の独り言　115
陛下の御心はわらじばきの巡礼　121
日本はその轍をふみたくない　127
未ダ嘗テ拝セザル御気色　133
これはわが家の伝統である　139

第三章　「素顔」の天皇　145
そこにいるの誰か　146
皇太子にはこれが手頃だよ　152
おじじさま、これを拝見　158
十二円五十銭の国産品だけども　164
誰もいないよ！　誰もいないよ！　170
これは病気であるか？　175
いうまでもないではないか。国会議事堂だよ　181
ゴルフというものは、落着きをつくるにはまことによい　186
可哀想な事をした　192
良宮にはどうする？　198
あとがきに代えて　204

装丁・ロゴ　杉本欣右

序章　「覚悟」と「愛情」と

まず、自分を……

――昭和二十年九月　マッカーサー元帥との会見

昭和三十二（一九五七）年のある日、私は園田直代議士と一緒に、ニューヨークのウォルドーフ・アストリア・ホテルのエレベーターに乗っていた。

引退したマッカーサー元帥に会いに行くためであった。

後に福田赳夫内閣で外務大臣を務めた園田氏は、当時外務政務次官だったが、私と個人的に親しかった。首相特使として岸信介首相の訪米準備をするためにニューヨークへきていたが、マッカーサーに会いたいというので、私が仲介の労をとった。私は留学生だった。

マッカーサー元帥との面会は、懇意にしていたニューヨーク・タイムズ社幹部にとりもってもらった。

ウォルドーフ・アストリア・ホテルは、二十八階以上がアパートになっている。住人にはマッカーサーのほかにも、コール・ポーターやウィンザー公（元イギリス国王）夫妻など、

錚々たるところがいた。

執事に案内されて、広い応接間に通されると、まず、その豪奢なことに驚いた。部屋のなかは、椅子と絨毯を除けば、すべて日本の古美術品だった。国宝級の金屏風が三、四双並び、金銀の飾物、陶器、美術品がところ狭しと置かれている。公職追放処分を免れようとした財界人や、占領軍に取り入ろうとした日本の有力者から贈られたものに違いなかった。

やがて、マッカーサー元帥が入ってきた。

ダーク・グレイのシングルの背広を着ていた。お濠端の連合国軍総司令部の玄関を颯爽と出てくる姿に慣れている目には、七十七歳の元帥は年老いて、ひとまわり小さくなったようにみえた。当時は、タイプライターで有名だった事務機器の大手、レミントン・ランド社の会長をしていた。

元帥は座ると、シガレット・ボックスをとって、私たちにタバコをすすめた。

昭和天皇は昭和二十年九月二十七日にアメリカ大使館をお訪ねになられて、はじめてマッカーサー元帥と会見された。日本が戦争に敗れてから、天皇が皇居の外へ出られたのもはじめてのことだった。

天皇がお座りになられると、元帥がタバコをすすめた。天皇はお喫いになられないのに一

本とられると、元帥がマッチを擦って火をお点けしたのだった。

私たちがタバコをとると、今回も元帥自らマッチを擦ってくれた。私は元帥の手がひどく震えているのに気がついた。

私が世界でもっとも尊敬する人物は……

元帥は私たちの質問に答えて、話題は憲法第九条から極東の軍事情勢にまでおよんだ。いったん話し出すと止まらなかったので、質問を続ける必要はなかった。

それは話しているというよりも、独白――モノローグだった。遠くをみるような目で語り、熱が入ると時々、かつて三軍を叱咤したような大声を出した。

「その時、幣原（首相）がやってきて、目に涙を浮かべて、日本は平和国家として永久に軍備を放棄すべきだといった。私は今日でも、第九条は世界に誇るべき規定だと思っている。日本は東洋のスイスでなければならない」

私はテーブルの上で灰皿を探したが、目の前に置かれた銀の盃のなかに、先ほど元帥が擦ったマッチの燃えかすがあったので、そこに灰を落とした。

盃の底に十六弁の菊の御紋章があったので、私はとっさに、それが天盃（天皇から賜る盃）

であることがわかった。しかし、テーブルには、シガレット・ボックスともう一つの天盃が置かれているだけで、ほかには何もなかった。私はやむなくこの灰皿を使い続けた。

「私が世界でもっとも尊敬する人物は、天皇陛下だ。私が東京に進駐すると、陛下（ヒズ・マジェスティ）が会いにこられた。

そして、陛下は『大戦の責任は、みな自分一人にある。臣下は自分の命を奉じたに過ぎない』と厳然としていわれ、『連合国が責任を問おうとするなら、まず、自分を処刑してほしい』と述べられた。

私はこのとき、真の君主の姿をみたと思った。あの瞬間から、天皇を深く敬愛するようになった」

これは、マッカーサー元帥が回想記に書いていることだった。

マッカーサーは回想記のなかでこうも述べている。

「天皇の話はこうだった。『私は、国民が戦争遂行にあたって、政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する、全責任を負うものとして、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためにおたずねした』――私は、大きな感動にゆすぶられた。

死を伴うほどの責任、それも私の知り尽くしている諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとする。この勇気に満ちた態度は、私の骨の髄までも揺

り動かした。私はその瞬間、私の前にいる天皇が、個人の資格においても、日本の最上の紳士であることを感じとったのである」

当時、アメリカやイギリス、オーストラリアの新聞は、天皇を国際裁判にかけて死刑に処するべきだと主張していた。

私は突然、人間の脂肪の焼ける臭いをかいだ。ふとみると、横にいる園田氏が掌でタバコを消している。

その表情には何の変化もなかった。まばたきすらしないのだ。特攻隊長として終戦を迎えた園田氏は、剣道、柔道、合気道を合わせて十数段という猛者である。

数秒が過ぎたあとは、何ごともなかったようだった。

マッカーサー元帥は、まったく同じ調子で、遠くをみつめるような目をして話し続けていた。

そのうちに元帥は、ソ連の脅威が募っていると警告した。日本が軍備を拡張し、自由アジアの一大軍事勢力として、極東の平和に寄与しなければならないと熱心に説いた。

副官から許されていた三十分が終わったので、私たちは席を立った。

元帥がドアまで送ってくれた。握手するときに、「日本から友人が訪ねてきてくれること

が、もっとも嬉しい」といった。目が濡れて光ったようにみえた。

元帥は、客がタバコを掌で消したことには気づいていないようであった。それとも、案外知っていたのかもしれない。

帰りのエレベーターの中で、園田氏が私にいった。

「君は、よくあの天盃が使えたなあ」

園田氏の掌には、大きな水ぶくれがあった。私は世代の差をそこに感じた。

翌日、副官が包みを二つ届けてきた。元帥がそれぞれ二人の名に献辞を書いて署名をした写真、いわゆるサイン入りポートレートだった。

いまに夜が明けてしまう

——昭和二十年元旦　空襲警報下の四方拝

昭和天皇は、天照大御神の神勅によってこの国が生まれ、神事を尊ぶことによってこの国の生命を保つことができると信じられた。

天皇はそのお血筋から、二千年以上の時間をあてはめて、日本をご覧になった。

天皇にとって祭祀は重大事だった。先の大戦末期の熾烈な空襲下でも、何としても祭祀を行われなければならなかった。

天皇は元日の日が昇る前に、四方拝と呼ばれる祭祀を野外で行われる。年頭にあたって神々に日本国の安寧と、世界の平和を祈られる祭儀である。

昭和二十（一九四五）年は、戦争の最後の年にあたった。この年の四方拝は空襲を恐れて、宮中三殿ではなく、吹上御苑の御文庫（大本営防空壕）の前庭において催された。

元日零時五分に、B29が東京上空に侵入して、下谷、神田、浅草を攻撃した。敵機が退去し、空襲警報がいったん解除された。

天皇は午前四時に起床され、御文庫の風呂場で潔斎（神事の前に沐浴して、身をきよめること）をすまされた。そして四方拝を行われるために、午前五時に御文庫を出られたが、十分後にまた空襲警報が発せられた。いったんなかへ戻られ、皇后とともに地下二階にある防空室へ降りられた。

天皇は防空室で壁の時計をご覧になり「いまに夜が明けてしまう」と繰り返しいわれて心配された。日本の祭主として、どうしても日の出前に四方拝をすませなければならなかった。

B29が江戸川に投弾し、火災が起こって夜空の雲を赤く染めた。

天皇は空襲警報が解除されると、五時四十分に軍装のまま、御文庫から出御された。気温が零下一度まで落ちた。

すでに宮中三殿から、白い屏風や真薦、薄帖などが運ばれて、形式に従って並べられていた。

懐中電灯が唯一の光

いつもであれば、宮中三殿と隣接する神嘉殿の前庭に白い砂が敷かれ、御帷となる純白の

二双の六面屏風が、カスミグサを織った真薦の上に敷かれた金縁の薄帖を囲むように、両側に置かれる。屏風は南西の伊勢皇大神宮の方向と、天皇が出入りされるために北東があけられている。

まわりには多くの庭燎（かがり火）が焚かれる。そして、平安朝から伝わる黄土色の黄櫨染御袍という束帯に、御立纓と呼ばれる黒い冠をかぶられて、天皇が屏風の囲いのなかに入られる。御袍の長い裾を持つ侍従もなかに入り、天皇が拝礼を行われるあいだ、ずっと平伏している。

南西のあいた口の両側には、衣冠束帯の掌典が真薦の上に一人ずつ、もう一方の北東の口には、やはり華麗な衣冠束帯姿の侍従が一人ずつ、祭儀が終わるまで顔をあげずに平伏している。平安時代の絵が残っているが、壮麗な祭祀なのである。

しかし昭和二十年の四方拝は、灯火管制のために、左右から侍従が脂燭（たいまつ）を掲げて、御帳に向かわれる天皇のお足元を照らすことも、暗闇のなかを炎をさかんにあげて、庭を照らす庭燎もなかった。黒い覆いをかけた懐中電灯が、ただ一つの光だった。

芝生の地面がでこぼこしていたので、屏風が安定しなかった。風が吹いていたので、侍従が倒れないように外から支えた。

天皇は屏風のなかに入られると、三尺四方の厚畳（あつじょう）の御拝座にあがられ、皇大神宮の方角へ体を向けられる。まず立礼をされ、つぎに座礼をされた。もう一度立たれてお辞儀され、また座って平伏された。これを両段再拝という。

天皇は右へ廻って、北西の方角に対して両段再拝され、ついで北東、南東の順で同じことを繰り返された。四方へ向けて両段再拝されることによって、皇大神宮、豊受（とようけ）大神宮、四方の天神地祇（てんしんちぎ）、天皇陵などを拝まれるのである。

時折、遠くから消防車のサイレンの音が聞こえた。

天皇が四方拝を無事に終われるまで、幸いなことに敵機が来襲しなかったので中断されなかった。

体力的に過酷な神事の数々

昭和天皇は八十歳をこえられても、薄暗い、寒風が吹く野外で、四方拝をおつとめになった。

歴代の天皇は、日本でもっとも古い文化の形を、今日まで連綿として守ってこられた。

宮中祭祀には、新嘗祭（にいなめさい）がよい例であるが、日本民族がまだ文字を持たなかった太古の時代から伝わったものがある。

新嘗祭は、天皇が毎年秋に宮中の神嘉殿において、豊かな収穫に感謝され、穀霊に生命を吹き込まれて再生させるために行われる儀式である。

天皇が即位されてはじめて催される新嘗祭を大嘗祭という。国事として行われる世界最古の神事である。大嘗の式も新嘗祭も、民衆が古から広く行ってきた祭祀と、規模の違いこそあっても共通している。

今上天皇も皇位を継がれるため、平成二（一九九〇）年十一月、皇居のなかに太古の建築様式を用いて新造された悠紀殿、主基殿の二つの仮宮に交互に籠られて、大嘗祭の秘儀を執り行われた。

大嘗祭も新嘗祭も、夜を徹して催される。古代人にとって夜は神秘的なものであった。

大嘗祭と新嘗祭において、天皇が神々に新穀をすすめられるときに使われる箸は、箸の原型といわれている。竹を細く削ってピンセット状にしたもので、皿として用いられる緑の柏の葉に盛りつけをされる。

今上天皇が大嘗祭を催されたときに、世論や野党の一部から、政教分離の原則を侵すものとして非難する声があがった。私は、一人の人である天皇が神に近づこうと努められることの何が悪いのかと思った。今日の日本人のなかで、天皇が地上を支配する神であると思う者はいないだろう。天皇が日本最古の祭りを行われることを通じて、崇高な精神を得ようとさ

れるのは有難いことだと思った。

新嘗祭や大嘗祭がどのような手順で行われるのかを解説することは、本書の目的ではない。別の機会に譲りたい。

天皇が野外で四方拝を行っていらっしゃるときに、ほかの皇族がたは何をなさっているのだろうか。私は高松宮宣仁親王殿下に、うかがったことがある。

殿下は「お上が寒い野外で、薄い装束をお着けになって、お祭りをなさっているのに、まさか寝床にいるわけにはいかないでしょう。宮内庁から電話で、お上がお祭りを終えたという連絡があるまで、妃殿下と居間に入って、窓や戸を外気がそのまま入るようにあけ放って、ひたすら身を慎んで待っています。他の皇族がたもみな、そのようにされているはずです」といわれた。

天皇が日の出前の野外の暗く寒いなかで、世界の幸せを祈って祭礼をされる。皇族がたは居間の窓や戸をあけ放ち、終えられるのを身を慎しんで待たれる。

元首が元日の夜明け前に野外で平和を祈る祭儀を行い、そのあいだ、一族がひたすら身を慎しんでいる国は、世界のなかでも日本のほかにない。

稲は大丈夫だね

――昭和二十年八月　お待ちになっていた天気予報

日本は連合国に降伏することによって、建国以来、外国にはじめて敗れた。

宮内省庁舎の二階にあった侍従武官府では、戦争が終わってしまったので、侍従武官たちは仕事もなく、たまに軍と連絡をとったり、通信室の畳の上で昼寝をして過ごしていた。今日でも宮内庁が同じ建物を使っている。

侍従武官は天皇の常時お側にあって、軍との連絡をとるために奉仕する陸海軍将校で、エリートの将校のなかから選ばれた。アメリカ軍が進駐しないあいだは、陸海軍の組織もそのまま存在していた。

軍旗奉焼（天皇から親授された軍旗を敵に渡さないために焼くこと）の問題、皇居を警護するために近衛師団の名称を変えて温存しようという問題などで、陸海軍大臣や陸軍参謀総長、海軍軍令部総長の参内がまだあったが、戦争中にくらべれば侍従武官たちはまったく暇にな

っていた。

軍人は戦争が終わって、それまでは張りつめて勤務していたのに、すっかり気抜けしていた。武官府に「惣花」という清酒がふんだんにあったので、夕方になると酌みかわしていた。「惣花」は灘の生一本で、明治天皇が好まれたことから、宮中で専用の銘柄となっていた。

陸軍侍従武官であった尾形健一大佐は、八月二十九日の日記に「武官府用事モナク武官皆昼寝ノ駄眠貪ルノミ」と記している。

戦争中は、毎朝八時に侍従武官が天皇のもとにあがって、その日ごとの天気予報を報告することになっていた。天候によって空襲や作戦が左右されるからである。報告は、海軍が気象情報を蒐集していたので、その日の当直の海軍侍従武官が行うことになっていた。

そのほかに、毎朝行われていた前日の空襲被害の上奏（天皇に意見や、報告事項を申し上げること）、夕方に行われていた戦況についての上奏があったが、こちらは戦闘が終わったのでもう行われなくなっていた。

しかし、天気予報についての報告だけは、惰性がついたように続けられていた。

お上が天気予報を待たれている

八月三十日夜は、今井秋次郎中佐が海軍側の当直だった。

今井は終戦とともに空襲もなくなったので熟睡し、翌朝七時半ごろになって目が覚めた。もう軍令部から、天気予報について電話もかかってこなかった。それに、終戦の十五日以後も天気予報を報告していたが、天皇はいつも無表情で聞かれていたので、何となく無意味な負担をおかけしているように感じていた。

そこで、今井は深い意図もなく、時間になっても御文庫のほうに出かけなかった。すると八時十五分ごろに侍従から電話がかかってきた。「お上が天気予報を待たれている」とのことだった。

今井は慌てて軍令部に電話をした。そして、天気予報を集めると御文庫へと急いだ。糠雨が降っていた。

御政務室の前の廊下でいつものように待っていると、じきに天皇が背広を着て出御された。天皇に従って部屋に入った。窓の外は変わらず小雨が降っていた。

今井は天気予報について報告しなかったことを詫びてから、「ここ数日は、曇天か小雨になるものと思われます」と申し上げた。

天皇はいつものように、黙って聞いておられた。

そして報告が終わると頷かれた。

それから窓の外に目をやられて、独り言のようにいわれた。

「では、稲は大丈夫だね」

今井は愕然（がくぜん）として、衝撃にうたれたようにたじろいだ。

戦争が終わったので、天気予報にはもう用がないだろうと勝手に思っていたら、天皇は稲作について心配されていたのだった。

武官府に戻ると、今井は泣きながらこのことを、当直の陸軍武官であった吉橋戒三大佐に話した。すると、吉橋も感激して泣きはじめた。

そして今井も吉橋も、天皇が毎朝まず空襲の被害状況について聞かれ、戦況が大きく動かなくても、夕方に戦況についての報告を受けられていた理由がはじめてわかった。天皇は、つねに国民のことを想っていらっしゃったのだった。

翌日も小雨だったが、台風もこず、静かな二百十日だった。

病床でも稲の実りをご心配に……

昭和天皇はいつも農作物の出来具合を心配されていた。天皇は政治権力者であるとともに、日本国民の安寧と繁栄を祈る神官でありつづけてきた。

歴代の天皇はずっと皇祖を祭り、民草（たみくさ）（人民のこと。民が増えるさまを草に見立てた。青人草（あおひとくさ）ともいう）の幸福を祈ってきた。昭和天皇も例外ではなかった。これは、皇室の伝統であ

る。

天皇は昭和六十三（一九八八）年九月十九日に吐血されて病床につかれたが、回復されなかった。翌年一月七日に、帰らぬ人となられた。

昭和六十三年は長雨が続いた。天皇は病床から、白いレースのカーテン越しに小雨が降っているのをご覧になりながら、「長雨にたたられた今年の稲の実りは、どうなっているか」といわれた。

天皇も吹上御苑の東南にある小さな水田で、ゴム長靴を履いて自ら田植えをされ、稲を育てられた。今上天皇も同じ水田で田植えをされて、刈入れをされている。

これは天照大御神が高天原（大御神が支配する天上の国）の斎庭（神を祭るためにけがれを払って浄めた場所）の稲穂をとって皇孫に授け、耕作を命じた神勅にもとづいている。

天皇は日本神話と一体となってこられた。日本神話で天孫降臨といわれるが、天照大御神の孫で、天忍穂耳尊の子である瓊瓊杵尊が、大御神の命によって日本の国土を統治するために、稲穂を持って今の宮崎県の日向の高千穂峰に降りられたのだった。

ちなみに、日本酒「惣花」は、今日でも日本盛株式会社によって醸造され市販もされている。

第一章　「国民」とともに

彼方の岸へご答礼

——昭和六年　戦艦『榛名』艦上にて

愚直とは、正直すぎて気がきかないことをいう。

だが、大きな美徳でもある。

今日の日本では、小利口で弁が立ち、器用に立ちまわれることがよいとされている。愚直な人は時代遅れとなってしまった。

昭和天皇は、まったく愚直でいられた。ここでも、今日の日本人によい手本を示されている。

ご幼少の時代から相撲をとることを好まれた天皇は、相撲にもご性格がよくあらわれていた。

学習院初等科では相撲を奨励した。運動場の隅に砂場があって、土俵があった。生徒たちは学習院の黒い詰襟の制服を着て、編み上げの靴をはいたまま相撲をとった。

学習院初等科当時の御学友が、陛下と過ごした初等科時代を振り返ってこう回想している。

「陛下は、もう真っすぐに押してこられるんです。前にばっかり押されるんですね。引いたり、はたいたりされないです、全然。真一文字に押してこられる。今のお相撲の『前へ出る』というやつ、あれを実行しておられました」

手練手管を用いられることが、いっさいなかったのだ。

昭和六（一九三一）年十一月に熊本県で陸軍大演習が行われ、天皇は東京への帰途に、鹿児島市から戦艦『榛名』に搭乗され横須賀まで向かわれた。

お召し艦は日没とともに出航した。夕闇が迫るなかを、広い鹿児島湾（錦江湾）の中央を南の湾口部へと向かった。鹿児島市から湾口部まで、八十キロほどの距離がある。

天皇の御居室兼食堂として、『榛名』の後甲板の真下にある司令長官室があてられた。お室の入口のすぐ近くに、長官専用の階段が後甲板まで通じていた。

やがて、海が暗闇に包まれた。月も出ていなかった。

木下道雄侍従が後甲板に出たところ、暗い甲板にたった一人、海軍軍装をして立っている後ろ姿がみえた。西のほうへ向かって微動だにせずに、挙手の礼を行っている。

後ろから近づいてみると、天皇だった。敬礼をされている方角は、暗闇に閉ざされていて

肉眼では何もみえなかった。

木下は、甲板に据えつけられた倍率の高い望遠鏡に眼をあてて、天皇が敬礼されている方向を覗いた。

しだいに眼が慣れてくると、遠くに薩摩半島の山々がぼんやりと望めた。

その下の海岸線に沿って、赤い紐のような光の線が認められた。ところどころに点々と光っているのが、かがり火であることもわかった。

赤い光の紐は、お召し艦が沖を通るので、万歳を絶叫しながら奉送している、海岸沿いの町や村の人々の提灯や松明だった。

天皇は望遠鏡でご覧になって、人々が十数キロも彼方の岸で奉送しているのを認められ、それに一心に答礼されていたのだった。

木下は一計を案じると、艦橋にいる艦長のもとへと急いだ。そして、天皇が答礼なさっていることを話して、艦の探照灯をすべて点じるように頼んだ。艦長は感動して、すぐにそのように命じた。

海岸に並んでいた人々は、遠くのお召し艦が何本もの探照灯の光を点じるのをみた。そして、自分たちの誠が通じたのだと思い欣喜雀躍した。

天皇は、お召し艦が湾口部を離れて外洋に出るまで、答礼を続けられた。

主従が走りまわる

私は天皇に側近として仕えた侍従から、戦後の御巡幸の際、宿舎となった旅館に、奉祝の提灯行列が訪れたという話を聞いたことがある。

その旅館は、丘陵の中腹に建っていた。そして、大きな旅館の三方を囲むように道が通っていた。

ところが、陛下のお部屋から真下の道路をみることができなかった。

天皇は奉迎（ほうげい）の列がみえなくても、違った方角から万歳の歓声が起こるたびに、その場所を求めて、旅館のなかを小走りになって向かわれた。そのつど、侍従たちもおあとを追った。

今度はお部屋のほうから歓声があがると、急いで戻られて、人々の姿はみえないのに歓声があがる方角へ向かって、ほがらかなご表情でお手を振って会釈された。

昭和天皇について、同じような逸話は多い。

天皇は裏表（うらおもて）がまったくない、誠（まこと）の人だった。

序章でも述べた、昭和二十年九月に敵将マッカーサー元帥をアメリカ大使館にはじめてご訪問されたときもそうであった。

ご生涯を通してこのときほど、深い屈辱を味わわれたり、個人的に大きな試練をお受けになったことはなかっただろう。

大使館へ向かわれる天皇をお見送りするため、御文庫の御車寄せの前に、側近者である侍従や侍従武官、侍医たちが並んだ。

全員が緊張して、不安に駆られていた。小出英経侍従によれば、天皇が正直な方であるだけに何を喋ってこられるか、その結果によっては「国際裁判」にお出になられるようなことにならないかとか、もしかすると、お身柄を拘束されてお戻りになられないのではないかという不吉な想いに、お見送りする全員がとらわれていた。

明治二十四（一八九一）年、訪日中のロシアのニコライ皇太子が巡査に斬られて負傷した（大津事件）。明治天皇が神戸港外に停泊中のロシア巡洋艦に詫びに行かれたとき、やはり側近者が見送った。当時も側近者たちは、天皇が帰ってこられないのではないかと心配した。

やがて、天皇がモーニングをお召しになって、皇后とともに奥から出てこられた。皇后はシルクハットを持たれていた。皇后が玄関で天皇に靴ベラをお取りして、お靴を履かれると、シルクハットを手渡された。

そして、皇后がおやさしい声でひと言だけ、「ごきげんよう」といわれた。

天皇が黒塗りの御料車（天皇の車）にお乗りになられると、皇后と側近者が万感をこめてお辞儀をしてお見送りした。

天皇はマッカーサー元帥に会われると、「戦争の責任は私にすべてある」といわれて、「連合国によって、処刑されてもよい。そのかわりに、国民を救ってほしい」と申し出られた。

天皇は侵しがたい威厳を備えられていた。はじめマッカーサーは天皇が命乞いをするものと思っていたから、その瞬間から天皇に深い敬意を払うようになった。

昭和天皇は生涯を通じて、一度も嘘をいわれたことがなかっただろう。ご自身を飾られることがいっさいなく、愚直なまでに正直でいらしたことが、マッカーサーを圧倒したのだった。

天幕を取り除いてほしい

——昭和三年　大礼奉祝諸団体御親閲

昭和天皇の即位式である即位大礼は、大正天皇の諒闇（天子が父母の喪に服する期間）が明けた昭和三（一九二八）年十一月に京都で催された。天皇は二十七歳でいらした。

翌月の十五日、東京の皇居前広場（当時は二重橋前広場と呼ばれた）において、東京、千葉、埼玉、山梨、神奈川の諸団体から、青年男女約八万人が参加する大礼奉祝の式典が行われ、天皇が御親閲されることになった。

天皇は大会の開催に同意されるとともに、天候を心配された。

「もしも当日、雨が降ることがあったら、青年たちに雨具を着用させるようにしてほしい。また、いかような大雨になっても、わたしが立つ場所に天幕を張ってはならない」とお命じになった。お立ち台は二重橋前のゆるやかな傾斜に設けられた。

当日は早朝から稀な大雨となった。そこで、天皇の思召しにもかかわらず、御座所の位置

の上に天幕が張られた。

雨足は開会の時間が近づいても、弱まるどころかむしろ強まるばかりだった。すでに青年男女は、広場周辺に集まって隊伍を組んで待機していた。

天皇が御出座になる前に、一木喜徳郎宮内大臣が「今日は非常に荒天でございますから、どうか天幕のなかで御親閲を願いとう存じます」と申し上げたが、お聞き入れにならなかった。

一木は天皇のご健康を思いやって重ねて言上した。

「軍にたとえますならば、一軍の司令官と申すものは、たとえ部下の兵たちが弾雨のもとに立つからといって、司令官自身が一線に立つものではございません。

司令官には全軍を指揮する大きな任務がありますので、後方で指揮をとります。

陛下は長い間、大礼（即位大礼）のもろもろの行事でお疲れの御身でありますから、今日、青年たちが雨に打たれるからといって、御自身も雨の中に立たれることは、間違っております。ぜひ、天幕の中にお入りいただきたく存じます」

天皇はそれでも天幕を撤去するようにいわれた。

「天幕を取り除いてほしい。司令官もときと場合によっては第一線に立つことがある。今日はわたしのいうことに従ってほしい」と要望された。

菊の御紋章がついた天幕が撤去されると、参加者のなかには、激しい雨のために行事が中止されたと思った者がいた。しかし、聖旨（当時は天皇の思召しのことをいった）が伝わると、青年男女たちはざわめき、いっせいに姿勢を正した。

冷雨のなかの御挙手の礼

午後二時、天皇は雨のなかを二重橋正門から自動車で式場に到着された。

天皇が下車されると、侍従がすぐにうしろから雨用のマントをおかけした。

天皇は雨のなかを、四段あまりの高さのお立ち台におのぼりになったが、台上でマントをお脱ぎ捨てになった。下にいた侍従武官長が慌ててお拾いした。

天皇はお立ち台から、広場を埋めた青年たちが篠突く雨のなかを雨具もつけずに全身を濡らしているのを、ご覧になったからだった。侍従武官長は、台の上にあがってマントをお着せするわけにもいかなかった。

軍楽隊が雨のなか、『君が代』の吹奏をはじめた。

やがて、青年たちが御前で分列行進を開始した。

冷たい風や降りしきる雨をいとわれず、天皇はずぶ濡れになられながらも繰り返し、挙手の礼をもって答礼された。

多くの青年たちは感動して、涙が雨にまじって顔を濡らした。
天皇は式典が終わるまで一時間二十分のあいだ、軍帽や軍服から水をしたたらせながら、お立ち台に立ち続けられた。
徳富蘇峰は奉祝大会が催された翌日の「國民新聞」に、つぎのように寄稿した。
蘇峰といえば、明治から昭和にかけて活躍した日本の代表的なジャーナリスト、出版人、歴史家である。昭和十八年には文化勲章も受章している。

「御大典の名残りとして、十二月十五日、宮城（皇居のこと）の前に於て、東京府（当時、東京は府だった）を首とし、其の附近四県の青年団、学生、女学生等、約九万人（実際は約八万人）を御親閲あらせられた。此事それ自身が、既に我が青年の血を湧かしめ、肉を躍らしむ可き一大盛事である。
然るに当日は冷雨其濛たり、寒威頓に加わる。此れが為めに、至尊（天皇のこと）の玉体（天子の体）に恙あらしめざる可く、相応の設備を為すは、固より至当の事であり、且つ然かあらねばならぬ。
然るに天皇陛下には、我が幾万の青年等が、雨曝しになりて、各自其列に就きつつあるをみそなわし給い、先ず予め御座所周囲の幕の除去を命じ給い、更らに其の上被いの除却を命

じ給い、親しく御座所に出で給うや、側近の侍従が、御かけ申上げたる外套をも、一度玉体にめされたる上、直ちに之を脱し給い、青年男女が御前を経行する際、凡そ一時間二十分に亘りて、冷雨の中に起立遊ばされ、集団毎に御挙手の礼を給うた。寔に感涙が溢るる」（カッコ内は著者注）

それにしても、この八十年のあいだに日本語が何と大きく変わったことだろうか。世界の先進諸国の言語のなかでも、このような短期間にこれほど大きく表現が変わった言葉はあるまい。それとともに、日本人の意識の流れが変わって、多くの大切なものを見失ったのではなかろうか。

その五年後の昭和八年八月、南方の洋上で連合艦隊を挙げての海軍大演習が催された。天皇は戦艦『比叡』艦上で、炎暑のなか甲板に立たれて演習を統裁された。

気温は摂氏四十度に達した。このような酷暑が予想されていたので、事前に御休所として風通しのよい一室が準備されていた。

侍従武官は天皇に、御休所に移られるように奏請した。

しかし、天皇は御休所に移られることを拒まれた。

「将兵はみな、この炎暑のなかで働いている。自分一人だけがどうして、そのようなところに入ることができようか」

大演習が終了するまで、天皇はその場から動かれなかった。

カゴの鳥だった私にとって

——大正十年　ヨーロッパ歴訪

国民は戦後になって、天皇の生の言葉をはじめて聞けるようになった。

昭和天皇は昭和四十五（一九七〇）年九月に那須御用邸で宮内庁記者団に会われたときに、記者から「これまでもっとも印象深く思われた」ことが何だったかと質問されて、「それはヨーロッパ旅行だ」と答えられた。

そのうえで、「カゴの鳥だった私にとって、あの旅行ではじめて自由な生活というものを体験した」と述懐されている。

皇太子として、大正十（一九二一）年に二十歳でヨーロッパを訪れたことを振り返られたのだった。

ヨーロッパをご旅行中は、自由に街を散策されたり、庶民と触れ合うこともされたが、これらははじめてのご体験だった。〈黄金のカゴ〉から解放されたことが、よほどお嬉しかっ

たのだろう。

ヨーロッパから帰国されて敗戦までは、ずっと国内においでになった。百官に囲まれて、雲の上に祭りあげられていたため、一般国民と親しく接されることもなく「カゴの鳥」であられ続けた。

昭和二十一（一九四六）年二月から地方御巡幸がはじまると、天皇は「カゴの鳥」から解放されて、国民にじかに接することがおできになるようになった。

天皇は戦前戦後を通じて、つねに国民とともにありたいと願われていた。

初の囲み記者会見

天皇は昭和二十二年六月に、皇居内の吹上御苑にある紅葉山（もみじやま）の御養蚕所を見学していた宮内府記者団に会われた。会われたと表記したのは、当時まだ天皇の記者会見は前例がなかったので、宮内府が記者団と偶然に行きあったように演出したからだ。天皇は記者たちと三十分ほど立ち話された。

敗戦前までは、天皇が記者団に対して自由に話されるようなことは、考えることもできなかった。その前月に、新憲法が施行されて、宮内省が宮内府となっていた。

この会見を報じた当時の朝日新聞の記事から引用（一部略）しよう。

――ことしは稲の成績が悪いといわれておりますが、お作りになっている稲田のご成績は？

陛下『まだ苗代の途中でよく知らない、わたくしは田植えと稲刈りをしているだけで……多少農民の苦労を知ろうとしているのです』

――食糧事情が悪いので国民は代用食を食べておりますが、陛下はどんな代用食を召しあがっておりますか？

陛下『ウドン、スイトン、いもなど種々雑多な代用食を食べている』

――どれがお好きですか？

陛下『ウドンとソバが好きです、パンも食べている、混雑物を入れた代用パンをね……』

――お住居の御文庫は手ぜまな御様子ですが？

陛下『公の仕事をするには手ぜまなところはあるが、私生活には不自由ない。引揚者や戦災者を思うと、そんなものを別に造るときではないと思います』

――お子さま方との別居でおさびしくはございませんか？

陛下『私情としては忍びないが、わたくしも良宮（皇后さまのこと）も公の仕事が忙しいので教育に不行届があってはと思って、傅育係にまかしている次第です』

――お歌についてなにか？

陛下『ありのままに、わたくしの気持ちを率直に表したいと思っています。水戸での歌も、復興の早いのを愉快に感じ詠んだのですが、下手なのでよく詠めなかったのです』

――メモはおとりになりますか？　もう何首ぐらいよまれましたか？

陛下『メモをとると記憶力がおちると思いなるべく頭の中に入れております。さあ、どのぐらい今まで作ったか覚えていません』

――新聞をいつごろから？　またどんな記事に興味をおもちになりますか？

陛下『わたくしは古くから読んでいる。一番興味のあるのは外国の電報で社会、政治も読んでいる』

――社説や人物評は？

陛下『もちろん読んでいる』

――新聞に対するご批評を？

陛下『わたくしの希望をいえば、新聞は世論に大きい影響を持っているから迅速正確な報道で十分世論を指導してもらいたいと思う』

――書籍類は？

陛下『やっぱり生物学の本、つづいて歴史の本を読んでいる』

――本を注文なさいますか？

陛下『新聞広告を見て注文している。しかしいまは余り広告がないのでね、読書新聞も取っている』（朝日新聞、昭和二十二年六月四日）

新聞に「世論を指導」してほしいと述べられたのは、まだ戦前戦中の発想がのこっていたからだ。

敗戦後、食糧事情が悪化したために、国民は米のかわりに「代用食」と呼ばれたスイトンや雑穀、粗末な代用パンなどを食べていた。

天皇が「水戸の歌」といわれたのは、この年の歌会始に詠進（えいしん）された御歌の「たのもしく夜はあけそめぬ水戸の町　うつ槌の音も高くきこえて」のことである。

戦災を被った水戸に、前年十一月に巡幸されたが、復興が力強く進んでいるのをご覧になって、喜ばれてそのお気持ちを託されたのだった。昭和二十二年の歌会始の御題は、日本が再出発する願いをこめて「あけぼの」をお選びになっていた。

わたしのパンだけ白いのは困る

このころ、天皇は大金益次郎（おおがねますじろう）侍従長に「皇太子以下食べ盛りの子どもたちは、そうもゆく

まいが、わたしの食事だけは国民と同じ配給量にしてくれ」「わたしの食べているパンは普通のより白いようだ。わたしのパンだけ白いのは困る。国民の配給と同じにしてくれ」といわれた。

大膳課では、天皇のご指示に従って配給の粉を使って焼いてお出しした。

大膳課につとめていた渡辺藤吉氏は、「お上も国民と同じ配給生活に甘んじておられたのです。私が大膳に入りたてのころ、お上の召し上がる麦入りのご飯には驚きました。やがて国民の配給にも（麦などが）混ざるようになるころ、お上は半つき米に、外米、丸麦を混ぜたものを召し上がるようになられました」と述べている。

秋山徳蔵主厨長によれば、「たまには白いご飯を差し上げたい」と思ったが、天皇はお許しにならなかった。

昭和二十一年には、神奈川、東京、埼玉、千葉を巡幸された。

千葉県では、戦災のために宿泊所がなかったので、銚子駅の引き込み線にお召し列車を停めて車内に泊まられた。

毎日新聞が「今後も行なわれる地方巡幸に適当な御泊所のない時はこの様式で車中で休まれるという。『戦災の国民を考えれば私は平気だ、十日間位風呂に入らなくても構わない』

と語られている」（昭和二十一年六月七日）と報じている。

昭和二十二年夏には東北を巡幸されたが、その前に、入江相政（いりえすけまさ）侍従が「アメリカ人なんかも見ていますから」といって、背広を新調されることをお勧めした。

天皇は「アメリカは勝ったんだし金持ちなんだから、いい物を着たって当たり前だが、日本は負けて、みんな着る物もなくて困っているじゃないか。洋服なんかつくる気になれない」と語気を強めていわれた。

チチハハはどうしているかい？

――昭和二十一年　地方御巡幸

昭和天皇は昭和二十一（一九四六）年二月の凍るような日に、皇居を出て川崎へ向かわれた。

戦後の地方御巡幸のはじまりである。神奈川県から昭和二十九年の北海道にいたるまで、アメリカの軍政下にあった沖縄を除いて全都道府県を巡られた。

御巡幸はのべ百六十五日にわたり、距離にして三万三千キロ以上に及んだ。

天皇が背広を着て皇居の外へ出られたのは、これがはじめてのことだった。

敗戦までは、沿道に出ている人々は御料車が近づくと、通過して遠ざかるまで敬礼するか、そのあいだ土下座をして頭を下げていなければならなかった。そして、警官か憲兵が数メートル間隔で並んだ。もちろん誰であれ、高いところから見おろすようなことは許されなかった。

この日の御巡幸からこのようなことはなくなった。国民のなかへ入っていくという新しい形の御巡幸は、連合国軍総司令部の示唆によってはじめられたものだった。

総司令部は「人間宣言」や皇室財産凍結をはじめとする一連の措置をとることを通じて、天皇の権力を弱めて〈神棚〉からひきずり降ろすことを図っていた。ある総司令部幹部は「眼鏡をかけ、近眼で、猫背の小男を近くから見れば、国民の天皇に対する信仰も崩れるだろう」と語っている。

天皇の最初の御巡幸に随行して取材したイギリス記者は、「寒い朝、午前十時、この日本の〈統治者〉はダブダブの背広を着て、つぶれたようなソフトをかぶり、自動車に乗って古い皇居の城門からでてきた。車の列は約九十キロの予定されたコースへ出発した」と書いている。

はじめて国民とお話をされる

天皇は川崎で二つの工場を視察された。工員や女子事務員の前で立ち止まられて、「生活状態はどうかな?」とか、「食べ物は大丈夫か?」「家はあるのか?」と質問された。返答があるとそのつど、「あっ、そう。あ、そう」と答えられた。

お声をかけられた者のなかには感極(きわ)まって、立ったまま泣く者も多かった。

天皇は俄か造りの粗末な木造建ての共同住宅に入られて、戦禍の被災者を見舞われた。「どこで戦災にあったの？」「冬は寒くないかね？」「生活はひどくないかね？」とおたずねになった。

小学生には「学校の道具は燃えなかったの？」と聞かれた。「はい、焼けませんでした」とお答えすると、「それはよかったなあ」と頷かれた。

ある部屋には、表に『御下賜』と書かれた義足の箱があった。天皇は「ご主人はどうしたの？」とたずねられた。「フィリピンで……」と感動して泣きながら婦人がお答えすると、「夫をなくして、困っていることはないか？」と聞かれた。「いえ、負傷しただけで、今日も工場へ参っております」という返答に、「ずいぶん働いてくれたんだね。それはご苦労だったね」とねぎらわれた。

天皇が行幸されているというニュースがひろまると、多くの近隣の住民が集まってきた。天皇の車が近づくと、沿道に並んだ市民は帽子や外套を脱ぎ、襟巻をはずした。天皇が車のなかから会釈されると、合掌する者、「勿体ない、勿体ない」とつぶやきながら啜り泣く者、「申し訳ございません！」と絶叫して最敬礼する者、土下座する者など、はじめて天皇を間近にみて反応はさまざまだった。

天皇の車が目の前から去ると、どこからともなく、『君が代』の合唱が起こった。みんな

が泣いていた。

昭和二十二年八月に宮城県に行幸されたときには、古川の県立高等女学校の教室に布団を敷いて休まれた。入浴の設備はなかったので、盥の水でお体をお拭きになった。カーテンもなかったので、朝四時ごろに明るくなって、お起きになってしまった。

全国どこを巡られても、まったく同じような光景が繰り返された。

新聞やラジオによって御巡幸が報じられていたから、占領軍によって日の丸や『君が代』が禁じられていたにもかかわらず、数万人の人々が日の丸の大旗や小旗をうち振ってお迎えし、『君が代』を歌った。

各県が編纂した行幸記を読むと、「県民がおしよせ」「なだれをうつ」「嗚咽の声」「万歳の嵐」「ちぎれるばかりに日の丸の小旗を振り」という、同じような記述がされている。

天皇ははじめのころは、国民と口をきかれるのにまだお慣れになっていなかった。

ある県では、小学生に「チチハハはどうしているかい?」と質されが、少年が父母のことだと理解できなかったので、侍従がとっさに「お父さんとお母さん」といいかえなければならなかった。しかし、しだいにお慣れになった。

外国人記者がみた昭和天皇

このころ、天皇は「自分は言葉が下手だ」としばしば述懐されている。

アメリカの著名なジャーナリストのマーク・ゲインは御巡幸を取材して、天皇を「自分の意のままにならない声音や顔面や四肢を、何とかして動かそうと絶望的にもがいている男」と描写している。

連合国の記者たちは、天皇が動き話すたび、その滑稽さに不謹慎にも大声をたてて笑った。そして、天皇のこのような姿を見た日本の民衆が、どうして感激して泣いたり拝んだりするのか、彼らは理解することがまったくできなかった。

先のイギリス記者は、昭和二十二年十二月の広島の御巡幸も取材し、つぎのように報じた。

「広島市庁の屋上に立った天皇は、戦慄すべき荒廃をみた。みわたすかぎり焼け野原で、建物といえばビルの残骸を十五数えるだけだった。

だが、外国人特派員たちはこの原子戦争の戦慄とは別に、新たな発見をしたのである。

それは天皇崇拝の新しい高まりだった。天皇が神性を否定し、また大衆が彼を生身の人間としてみることに慣れてきたにもかかわらず、天皇崇拝はいささかも衰えていなかった」

私は、序章にも書いたように晩年のマッカーサー元帥をはじめとして、日本占領に携わっ

た総司令部の多くの幹部にインタビューした。ほとんど全員が、天皇があのように惨憺(さんたん)たる敗戦を招いたというのに、日本国民によってあれほどまで尊敬されているのが理解できなかったようだった。

総司令部のある民政局員はこう述べている。

「民衆が天皇に対していだく感じは、新憲法に定められた〈象徴〉としての新しいものになっているように見受けられた。だが、天皇と間近に接しえた人々も、天皇の服装とか顔色などという細部をみる前に、『天皇は有難い』という感じに包みこまれてしまっている。

この点が、アメリカの大統領と大変違うところで、アメリカでは大統領を迎える民衆は、彼の手腕や才能を考えたり個人の姿をみて、それ相応の敬意を払う」

西洋人は個人であることを尊ぶために、無私や滅私の概念がないから、とうてい理解することができなかった。

堪え難きを堪え

——昭和二十年　終戦の御詔勅

終戦の御詔勅に、「朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」という一節がある。

これは、天皇が終戦の御聖断を下された御前会議で述べられた切々とした言葉を、そのまま記したものだった。

この御詔勅には、それまでの勅語と違って、天皇の肉声と生の感情が書き込まれている。「戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内（五臓、五つの内臓）為ニ裂ク」という一節で、天皇の胸中が察せられたものだった。

天皇が地方御巡幸で、最初の地として神奈川県川崎を訪れられたときに、連合国の新聞、通信社のカメラマンや、カメラを手にしたアメリカ兵が群がり、天皇に向かって、「こっちを向け」「あちらを向け」と大声で煩く叫び、しばしば天皇のお体に触って、押したり引っ

ぱったりした。連合国が勝ったので、天皇を何とも思っていなかったからだ。

天皇は何回もこづかれ、こっちが引っぱると、あっちも引っぱるというように、まるで玩具のようにもみくちゃにされたが、まったく意に介されなかった。陛下は嫌な顔一つされずに、一方を向かせられればそのままそのほうを向かれた。

警護の内舎人の金子堅次は、「何と雄々しいことだろうか。（天皇は）日本の再建のために、今、国民のために堪え難きを堪えておられるのだ」と思った。そして、アメリカの記者から袖を引っぱられて少しよろめかれたときに、天皇がお怒りにならなかったのをみて、「じつはご性格がお弱いのではなかろうか」と疑ったことを恥じた。

すると涙が溢れ、いくら手の甲で拭っても頬が濡れた。

天皇は終戦に踏み切られることによって、日本を滅亡から救うことができた。このころの天皇の精神的な苦しみが大きかったことはいうまでもない。ひたすら堪え難きを堪えておられたのだった。

昭和天皇が泣かれた

昭和天皇は昭和二十二（一九四七）年六月に兵庫県を巡幸された。

酒造組合や武庫川高女を廻られた日は、神戸女学院で昼食をおとりになった。

このあとの出来事は、兵庫県が編纂した『兵庫県行幸誌』から引用しよう。

「昼食後、陛下が御休所を出られると、校庭には職員、生徒、卒業生、父兄等五千人が待機していた。突然前方に並んでいた七百人の専門部の学生が、『讃美歌第四百十二番〈祖国〉』を二部合唱で歌いはじめた。

一、わが大和の　国をまもり　あらぶる　風をしずめ
　代々やすけく　おさめ給え　わが神（つづいて二番、三番と歌う）

合唱のメロディは薫風に乗って岡田山を静かに流れる。

陛下は、次へとお促し申し上げても、そこに釘づけにされたかのように動こうともされない。歌が進むにつれて、歌う女学生みんなが泣きながら合唱を繰り返す。

歌は、ときどき涙にとぎれる。みると陛下もまた泣いておられる。お目は涙に濡れて光り、何度もしばたたかれる。侍従長をはじめお付きの人々もみんな泣き、数千の奉迎者また涙を流す。嗚咽のうちにつづく歌声をあとに、陛下は静かに玄関を離れられたのである」

天皇が地方御巡幸のあいだ、しばしば涙を流されたと側近者が証言している。

神戸女学院（今日の神戸女学院大学）は明治六（一八七三）年に、アメリカのキリスト教宣教師によって創立されている。今日でも、大学のキャンパスから岡田山が望める。『讃美歌四百十二番』は戦時体制にあわせて、愛国的な歌詞にかえられていた。

天皇は昭和二十二年十二月に、原爆の地・広島に巡幸された。ここでも天皇が泣かれた。市の境の近くで、八十四人の戦災孤児が並んでお迎えした。天皇はお車を停めて降りられると、子どもたちのそばまで行かれ、慰めの言葉をかけられた。

原爆によって髪の毛が抜けた男の子の頭をかかえこむようにして抱かれると、溢れる涙を指先で拭われ、しばしば目頭を押さえられた。

群衆は天皇が泣かれるのをみて、そろって嗚咽した。

天皇はこのあとで、「ああ広島平和の鐘も鳴りはじめ　たちなほる見えてうれしかりけり」と歌われた。多くの御製（天皇のつくった詩文、和歌）のなかで、地名のうえに「ああ」と感動詞を冠して詠まれているのは、この一首だけである。

昭和三十六年に還暦を迎えられたが、『六十の賀』の御題の三首のなかで、「ゆかりよりむそぢの祝ひうけたれど　われかへりみて恥多きかな」と歌われている。

また、その十年後の昭和四十六年に三十年前を振り返られて、「戦をとどめえざりしくちをしさ　ななそぢになる今もなほおもふ」と詠まれた。ななそぢは「七十路」である。

「かえりみて恥多きかな」「くちをしさ（悔しさ）」と歌われて、自らをお責めになった。

民をあわれむ心

――一万首を超える御製のなかから

詩は人の心に、もっとも近い言葉であるといわれる。人の喜怒哀楽を託した芸術と同じほど古い創作活動であって、感動や胸の奥底にある願望や夢を表している。詩には人の生命が充溢（じゅういつ）している。

歌は歴代の天皇の言葉であってきた。明治天皇は生涯で、じつに十万首以上にのぼる御製をのこされている。大正天皇も歌人であられたが、とくに漢詩を多く創作され、文芸専門家によって高く評価されている。

昭和天皇も歌人であられた。東宮（とうぐう）（皇太子）時代から歌の修業をはじめられたが、一万首以上も詠まれている。

御製は昭和天皇が三十一文字に託された心の声である。御製のなかから、ごく一部だけを取りあげたい。

耳を傾けてみよう。

世のなかもかくあらまほしきおだやかに　朝日にほへる大海の原　（大正十一年）

昭和天皇はこの前年の大正十（一九二一）年十一月に、父・大正天皇のご病気のために、天皇を代行する摂政に就任されている。摂政宮となられて、はじめての新年歌会始の御歌だった。ヨーロッパを往復された艦上から、大海原を望まれてつくられたものと思われる。二十歳の青年であられたが、日本を預かることになった決意が漲っている。

あらたまの年をむかへていやますは　民をあはれむこころなりけり　（大正十三年）

立山の空に聳ゆるをしさに　ならへとぞ思ふみよのすがたも　（大正十四年）

広き野をながれゆけども最上川　海に入るまでにごらざりけり　（大正十五年）

あとの二つの歌は、摂政宮殿下として大正十四年と翌年に富山県と山形県を訪れられたと

きに、立山と最上川をご覧になって詠まれたものである。御世（天皇の治世）と、ご自分がこのようにあってほしいという願いを籠められたものである。後者は今日でも山形県の県民歌となっている。

ふる雪にこころきよめて安らけき　世をこそいのれ神のひろまえ　（昭和六年）

ゆめさめてわが世を思ふあかつきに　長なきどりの声ぞきこゆる　（昭和七年）

天地の神にぞいのる朝なぎの　海のごとくに波たたぬ世を　（昭和八年）

静かなる神のみそのの朝ぼらけ　世のありさまもかかれとぞ思ふ　（昭和十三年）

この前の年に日中戦争がはじまり、朝日新聞をはじめとする大新聞が戦争熱を煽った。十二月には、中華民国の首都南京が陥落した。

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ　世をこそ祈れとしのはじめに　（昭和十五年）

峰つづきおほふむら雲ふく風の　はやくはらへとただいのるなり　（昭和十七年）

天皇家は、民のために祈る家系である。

京都の東山文庫には、百十九代天皇の光格天皇（在位一七七九～一八一七年）が二十九歳のときに、百十七代天皇の女帝・後桜町上皇（在位一七六二～七〇年）に宛ててしたためられた書簡が収められている。

そのなかには、「仰せの通り身の欲なく、天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候事、人君なるものの第一のおしえ」と書かれている。

爆撃に倒(たふ)れゆく民の上をおもひ　いくさとめけり身はいかならむとも　（昭和二十年）

身はいかになるともいくさとどめけり　ただたふれゆく民をおもひて　（昭和二十年）

わざはひをわすれてわれを出むかふる　民の心をうれしとぞ思ふ　（昭和二十年）

戦ひのわざはひ受けし国民（くにたみ）を　おもふこころにいでたちてきぬ　（昭和二十年）

天皇は敗戦の翌年の昭和二十一（一九四六）年から全国巡幸をはじめられた。天皇がどこへ御幸されても、民衆が熱狂したようにお迎えした。天皇はこのような民衆の姿に触れられて、君臣が一体であるという自信をいだかれ、大いにお励まされになったことだった。

国をおこすもとゐとみえてなりはひに　いそしむ民の姿たのもし　（昭和二十一年）

たのもしく夜はあけそめぬ水戸の町　うつ槌の音も高くきこえて　（昭和二十二年）

あつさつよき磐城の里の炭山に　はたらく人ををしとぞ見し　（昭和二十二年）

たふとしと見てこそ思へ美しき　陶器（すゑもの）つくりいそしむ人を　（昭和二十三年）

かくのごと荒野が原に鋤（すき）をとる　引揚びとをわれはわすれじ　（昭和二十四年）

よるべなき幼児どももうれしげに　遊ぶ声きこゆ松の木の間に　（昭和二十四年）

みほとけの教まもりてすくすくと　生ひ育つべき子らにさちあれ　（昭和二十四年）

あとの二首はそれぞれ、福岡県和白村（現在の福岡市東区）にあった孤児院の青松園と、佐賀県因通寺（現在の三養基郡基山町）で洗心寮を訪れられたときの御製である。

さしのぼる朝日の光へだてなく　世を照らさむぞわがねがひなる　（昭和三十五年）

昭和天皇の御製主題は、四季、自然、全国各地、外国への御幸から、折々のご感懐、個人に賜わったものまで、多岐にわたっている。

第二章　「天皇」として

松と雪

——昭和二十一年　新年歌会始

昭和天皇の八十七年八ヶ月のご生涯は、そのまま日本のドラマだった。

天皇は外国による占領という、日本の長い歴史のうえではじめての屈辱に、よくお堪えになった。

天皇は昭和二十（一九四五）年九月に皇居を出られて、マッカーサー元帥をアメリカ大使館に訪ねられた。

このとき、マッカーサーは天皇を辱めるために、開襟シャツの略装で迎えた。

陛下は日本を代表されていたから、モーニングの礼装をお召しになっていた。

マッカーサー元帥は天皇を玄関で迎えるべきだったのに、そうしなかった。そのうえ、天皇の肩に手を置くという非礼も働いた。

モーニング姿の天皇と、略装で腰に手をあてがったマッカーサー元帥が並んだ例の写真が、

総司令部の命令によって新聞に掲載され、日本国民に戦争に敗れた実感を味わわせ、衝撃を与えた。

しかし、栃木県の奥日光に疎開していた皇太子・明仁(あきひと)親王と御学友たちは、まったく違ったように反応をした。

皇太子と同級生たちは、天皇とマッカーサーが並んだ写真が新聞に載ると、「日本が勝った」「マッカーサーはネクタイもしないで礼儀を知らない」「成り上がりの田舎っぺ」「アメリカはあんな程度の国か」「日本は礼節の国だぞ」と口々に叫んだ。

私は昭和三十二年に、序章に書いたとおり、晩年のマッカーサー元帥の私邸をたずねて日本占領時代の話を聞いた。元帥は「天皇が私をはじめて訪れたときに、私に深々とお辞儀をした……」と回想をはじめた。

もっとも、昭和天皇は理髪師にも、仮縫いのために御前にあがった洋服屋にも、深々とお辞儀をされた。マッカーサーは洋服屋と同じように扱われたことに気がつかなかった。

アメリカ大使館に行幸され、敵将と会見されたことは、終生にわたって表に出されることがなかったが、ご生涯におけるもっとも大きな屈辱であったはずである。天皇はよくお堪えになってくださった。

もう周知のことであるが、天皇はマッカーサーとの会見中、雄々しく振る舞われた。

天皇は崩御されるまで、このときのマッカーサーとのご会見を、苦々しく思われていたのだったろう。

昭和五十一（一九七六）年十一月に宮内庁記者団と会見されたとき、「マッカーサー元帥が、陛下に会われてお話になったことを非常に感激して回想記に書いていますが、陛下はご覧になりましたか」という質問が出た。

天皇は「私はその回想記はあまり読んでいないけれど、その回想記に書かれていることや、その後、マッカーサー元帥に直接に会った人たちから、その話は聞いています」と、述べられた。占領時代とマッカーサーを不快に思われていたから、その回想記も読まれなかったに違いない。

その翌年八月の宮内庁記者団とのご会見のときは、「マッカーサー元帥との初のご会見の内容についてお話していただけませんか」という質問に対して、「マッカーサー司令官と当時、内容は外にもらさないと約束しました。男子の一言のごときものであり、それでは世界に信頼を失うことにもなるので話せません」と答えられている。

最後の軍服

天皇は昭和二十年十二月一日に最後の軍服を着られた。帝国陸海軍は前日をもって廃止さ

れていた。

天皇は皇后とともに、宮内省庁舎の三階に設けられた仮宮殿の表拝謁の間に立たれて、今日かぎりで辞めてゆく陸海軍侍従武官にお別れの言葉を賜った。

最初に陸軍から先任順に単独で拝謁した。天皇はそのつど陸海軍の軍服を召された。胸に略綬をつけられていたが、軍刀は吊っておられなかった。皇后は洋装だった。武官も丸腰だった。佩刀は総司令部によって九月に禁止されていたからだ。

両陛下は金屏風を背にして立たれていた。天皇は一人ひとりに「永々とご苦労であった」といわれた。そして、皇后がそのあとをすぐとるように、「永いあいだ、側近に奉仕してご苦労でした。このうえも、なお、いっそうお国のために尽くされますように」といわれた。

陸軍侍従武官であった吉橋戒三大佐は日記にこう記した。「十三時半、赤坂離宮ニ於テ、皇太子殿下ニ奉リ、拝謁ヲ賜ル。皇后陛下ニヨクオ似マシテ、体格モ御立派ニ、御聡明ニワタラセラレル御様子ヲ拝シ、真ニ有難ヲ極メ……『永イ間、側近奉仕誠ニ御苦労デアツタ。殊ニ終戦時ハ大変デアツタト思フ。今後トモ御国ノ為ニ尽ス様ニ』トノ御言葉ヲ賜ル」

同じく陸軍侍従武官の尾形健一大佐は、日記にこう書き込んでいる。

「本日側近奉仕ヲ終リ軍服ヲ脱スル日ヲ以テ此ノ記録ヲ止ム……我公的生涯ノ主流ハ此ニ終リヲ告ゲタリ。後ハ望ナキ余生ノミ」

しかし、天皇は「後は望みなき余生のみ」などと世をはかなんで隠遁するなど、許されなかった。日本を再建するために、忍び難きを忍ばれなければならない毎日が待っていた。

叡旨の原点、五箇条の御誓文

敗戦の翌年の元日に、天皇の名において、いわゆる「人間宣言」詔書が発せられた。「朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯ハ（略）天皇ヲ以テ現御神トシ（略）架空ナル観念ニ基クモノニモ非ズ」と天皇の神格を否定するものだった。だが、この勅令のなかに「朕ハ朕ノ信頼スル国民ガ朕ト其ノ心ヲ」と朕が連続する文があるように、まるで英語の学習参考書のような翻訳調であったから、総司令部が英語で原文を書いて、日本政府に強要したものであることが明らかだった。

天皇はこの詔勅の総司令部の原案を前年十二月にご覧になると、冒頭に明治天皇が明治元年に示された『五箇条の御誓文』を書き込むことを要望された。総司令部は反対しなかった。詔書はつぎのようにはじまっている。

「茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク、

一、広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ
一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
一、旧来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。
朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス」

「又何ヲカ加ヘン」というのは痛快である。占領軍に精一杯抵抗されたのだった。

天皇は先の昭和五十二年のご会見で、この「人間宣言」について記者団からの質問に対して、「それ（五箇条の御誓文の引用）が実は、あの詔書の一番の目的であって、神格とかそういうことは二の問題でした」と回想されている。「神格とか」とあえて仰言っている。

昭和二十一年の新年歌会始の御題は「松上雪」だった。御題は毎年、天皇が選ばれる。天皇は「ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ　松そををしき人もかくあれ」と歌われた。アメリカが降り積もる雪であり、雄々しい松が日本だった。

伊勢神宮が御怒りになったのではないか？

――昭和二十年　伊勢神宮御親拝

天皇を天皇たらしめていることが二つある。

天皇は、国会の開会式に臨まれなくても、外国の元首や使節を接見されなくても、批准書などを認証されなくても、天皇である。このようなことは、その時代ごとの制度でしかない。天皇の本質にかかわることではない。

天皇は二つのことをなさらなければ、天皇ではなくなってしまう。

それは神々を祀ることと、歌の伝統を継いでいかれることである。

天皇家は日本の歴史ほど古い。太古の時代の神話のなかから発祥して今日に至っている。宮中では古来から、「先神事、後他事」といわれてきたように、宮中祭祀が何よりも優先されてきた。神事は神を祀る儀礼であり、「神事を先にして、他事を後にする」という意味である。

今日、世界の先進国のなかで神話を持っている国といえば、日本とギリシアの二つの国しかない。しかし、ギリシア神話は現代生活にかかわるものではなく、アテネの丘にたつ壮麗な遺跡と同じように、過去に属しているものとなっている。

イタリアのローマ神話はギリシア神話を借りて、焼き直したものである。イギリス王家が北欧神話の最高神オーディンの血をひいていると称したことがあったが、誰もが虚構であることを知っている。

ところが、日本では超近代都市である東京の真ん中に、緑の小島のように浮かぶ皇居のなかで、日本神話が息づいている。

祭祀に格別ご熱心だった昭和天皇

皇居の構内に、宮中三殿と呼ばれる神聖な空間がある。日本神話の最高神といわれる天照大御神を祀る賢所（かしこどころ）、歴代の天皇の御霊を祀る皇霊殿（こうれいでん）、全国の神々を祀る神殿の三つの社（やしろ）である。

天皇は日本古来の信仰である神道の最高神官であるが、ここで年間二十数回、親しく祭祀を執り行われる。これを宮中祭祀という。

宮中祭祀は戦後の日本国憲法のもとで、天皇家の私事となってしまったが、日本の長い歴史を通じて天皇の正統性は、天つ神である天照大御神の血筋をひいていることから発してきた。

歴代の天皇の御製は古代から「大御歌」と呼ばれて、臣下の歌と区別されてきた。日本では古くから言霊というが、よき言葉を発すると現実がそのように変わるという信仰があった。新年歌会始では歌に霊力が籠っていることから、独特の抑揚をつけて朗詠する。天皇の役割はまず祈ることである。歌は祈りである。神事も歌も祈ることで共通している。昭和天皇は皇太子時代から、祭祀に真剣に取り組まれたが、即位されてからいっそう熱心に行われるようになった。

大祭である新嘗祭をとれば、「夕の儀」と「暁の儀」からなるが、夕方から未明にまでおよぶ長いものである。

天皇が神嘉殿の本殿で祭を執り行われるあいだ、皇太子は本殿周辺で正座し続けなければならない。これは肉体的苦痛が伴うものである。

昭和天皇は高齢になられても、親しく祭祀を行われることを強く望まれた。

卜部亮吾侍従によれば、天皇は八十二歳になられてから、その年の新嘗祭のために「お

坐りのご練習」をなさったが、「お立ちになるのが大変。前へお倒れそうで抱きかかえられた」とのことである。

天皇は、ご自分が神であると思われていたのだろうか？

天皇は皇太子としてヨーロッパを巡遊されて帰国された直後に、東宮武官長だった奈良武次陸軍中将にこう述懐されている。

「皇室の祖先が真に神であり、現在の天皇が現人神（人の姿となって、この世に現われた神）であると信じられているように、国体は国体として維持するべきであるが、天皇が神として国民とまったく遊離しているのは、過ぎたることだと思う。

皇室は英国の皇室の程度にして、国家国民との関係は〈君臨すれど、統治せず〉という程度がよいと考える」

日本の国体は、日本神話から発する天皇を中心にして維持されてきた。世界に比類のない万世一系の皇統が、建国以来二千六百年あまりにわたって保たれてきたのは、奇蹟のようなことである。日本の国体を支えている天皇としては、天皇が神性を帯びていることを信じなければならないだろう。

もっとも日本の神は、ユダヤ・キリスト・イスラム教の全知全能で無謬の神と違って、

神と人とのあいだの境界が曖昧であってきた。明治二十三（一八九〇）年に来日して、帰化したイギリスの作家ラフカディオ・ハーン（日本名・小泉八雲）が、『生神』という作品のなかで日本の神々を考察しているが、日本では誰でも神になる例として、紀州有田郡の農民だった浜口五兵衛（濱口梧陵がモデル）を、存命中に祀った神社が建てられたことをあげている。

昭和天皇は敗戦直後の昭和二十（一九四五）年九月の旬祭（元日の歳旦祭を除く毎月一、十一、二十一日に行われる祭祀）に当たって、十一ヶ月ぶりに宮中三殿を平服で親拝された。その二日後に、平安朝から伝わる衣冠束帯である黄櫨染御袍を着用されて、再び宮中三殿を訪れられ、皇祖皇宗（天照大御神から歴代の天皇）に戦争終結を報告された。

この日のお告げ文（神に告げ奉る文）には、「国民とともに再建に歩む」ことが誓われていたが、自らの敗戦責任に触れることはなかった。

天皇は強く希望されて、この年十一月に伊勢神宮に御親拝された。事前に何も知らせなかったが、側近者によれば、民衆の沿道の奉迎は「戦争の責任云々などの理屈を超越して、皇室と国民とのつながりは何か目にみえないものがある」と感じられるほどだった。

天皇の伊勢神宮御親拝は、昭和十七年十二月の戦勝祈願から三年ぶりのことだった。このときのお告げ文には、木下道雄侍従次長によれば、「神の御力によって国家の再建と世界平和確立に尽くす」という言葉があった。

天皇は帰京された後に、木下侍従次長に「戦時後半天候常に我れに幸いせざりしは、非科学的の考えかたながら、伊勢神宮の御援けなかったためだったと思う。神宮は軍の神ではなく、平和の神である。それなのに戦勝祈願をしたり何かしたので、御怒りになったのではないか」といわれた。

天皇は伊勢神宮から帰京されたその月のうちに、靖国神社を親拝された（臨時大招魂祭）。体調をお崩しになられていたのにもかかわらず、その前日には側近者に「明日は大切だからぜひ行く。たとえ少々病気になっても、差しつかえない」といわれた。

さらに三日後には、宮中三殿において新嘗祭を行われた。

天皇は今上天皇が結婚されたときに、『皇太子の結婚』と題されて、「あなうれし神のみ前に日の御子の　いもせの契りむすぶこの朝」と詠まれた。

「日の御子」とは、日神である天照大御神の御子という意味である。「いもせ」は古語で愛し合う女と男を指している。

祖国の運命は自分の双肩にかかっている

——昭和六年　満州事変後

昭和天皇は二十五歳で、百二十四代目の皇位を継がれた。

天皇は優れた戦略家だったといってよい。

国の進路を見極めるためには、状況を知的に把握する直観力に富んでいることが必要である。

天皇は正しいことを尊ばれた。

ものごとを定められた手続きに従って処理することを望まれ、謀略や過激な手段を斥けられた。後に生物学研究者として優れた業績を残されたが、政治にも同じ態度をもって臨まれた。

また、立憲君主として全体主義を嫌われた。そして、英米（当時はその順序だった）と協調することを願われた。

首相を一喝される

天皇は関東軍が満州を支配しようと企てたことを、快く思われなかった。

昭和三（一九二八）年に満州で関東軍参謀・河本大作大佐が、満州軍閥の張作霖元帥を爆殺する謀略事件が起こった。政府、軍内部で軍の関与が囁かれ、議会で野党が〈満州某重大事件〉として内閣を攻撃した。

天皇は表情を曇らせて奈良武次侍従武官長に、「張作霖がいかような者であろうとも、満州における東三省の支配者である。これに対して、陸軍が手を下して暗殺するのはよくない」といわれた。

首相だった田中義一陸軍大将が、調査したうえで犯人を厳しく罰すると申し上げた。

ところが軍は真相を知りながら、認めれば軍だけではなく国家の威信を傷つけることになると考えて、有耶無耶にしようとした。

翌年に、田中首相がその後の処理について報告するために拝謁した。

二十八歳の天皇は、六十四歳の首相が上奏文を読みあげるのを聞かれるうちに、顔色を変えて、怒気を含んだ声で「お前の最初にいったことと、違うじゃないか」と叱責された。

首相が「そのことについて御説明申し上げます」と申し上げると、天皇は「そのことは聴

く必要がない」と憤られ、立ちあがられて奥へお入りになられた。

田中首相は天皇の信頼を失ったために、辞職した。

陸軍は河本大佐などの関係者について、軽い行政処分ですまそうとした。阿部信行陸軍省軍務局長が参内して、処分についてお許しを願ったところ、天皇はご不満であったが、「将来、陸軍軍人はかかる過ちをふたたびなさざるように」と、仕方なくお許しになった。

昭和六年に、関東軍が独断で張軍閥の本拠地奉天を武力占領すると、満州事変が始まった。天皇はその前月、若槻礼次郎首相に「満州問題は日支親善を基調にしてゆくのだな」と念を押されていた。

満州事変は若槻内閣の不拡大方針にもかかわらず、関東軍の手によって拡大していった。

天皇は側近の岡本愛祐侍従兼内大臣府御用掛に、こう語られた。

「自分は国際信義を重んじ、世界の恒久平和のために努力している。それがわが国運の発展をもたらし、国民に真の幸福を約束するものと信じている。

しかるに軍の出先は、自分の命令をきかず、無謀にも事件を拡大し、武力をもって中華民国を圧倒せんとするのは、いかにも残念である。ひいて列国の干渉を招き、国と国民を破滅に陥れることとなってはまことに相済まぬ。

九千万の国民と皇祖皇宗から受け継いだ祖国の運命は、今自分の双肩にかかっている。それを思い、これを考えると、夜も眠れない」

その後も、天皇はことあるごとに戦火を拡大せずに、国際条約を遵守するように要望された。それとともに、軍紀の紊乱を正すように、再三にわたって求められた。

同じく昭和六年には、陸軍の橋本欣五郎中佐ら一部将校が、国家改造のためにクーデターを企てた三月事件が起こっていた。

天皇は南次郎陸軍大臣に「いつかもいった通り、軍紀は厳重に守るようにせねばならない。明治天皇が創設された軍隊に間違いがあっては、自分として申し訳ないことだ」といわれた。

それにもかかわらず、翌年に海軍青年将校と陸軍士官学校生徒が、犬養毅首相を首相官邸に襲って射殺する五・一五事件が起こった。

これらの青年将校は革新将校として知られ、非合法な手段で国家を改造することを企てていた。新聞などの大マスコミは満州事変以後、戦争を販売部数拡大の好機としてとらえて、戦争熱を煽りたてるかたわら、五・一五事件の犯人の青年将校を擁護した。

犬養首相の暗殺をうけて、天皇は後継首班を指名するのに当たって、元老の西園寺公望に「陸海軍の軍紀を振粛するよう。ファッショに近い者は絶対に不可である。外交は国際平和を基礎とせよ」と指示された。

忠臣・白川大将の死

天皇は昭和七年に上海事変が起こると、出先の軍が中央の方針に従って、雛祭りに停戦して撤兵したのを喜ばれた。天皇のご意向を汲んで尽力したのは、上海派遣軍司令官の白川義則（しらかわよしのり）大将だったが、同年、上海での爆弾テロが原因で死亡してしまった。惜しまれた天皇は、翌年の雛祭りの日に「をとめらの雛まつる日に戦をば　とどめしいさを思い出でにけり」と詠まれて、遺族に短冊を贈られた。

昭和八年、国際連盟が満州国建国を非難したのを不満として、日本はこれを脱退した。天皇はその直前に、政府が脱退を決めていたのにもかかわらず、牧野伸顕（のぶあき）内大臣に、「強いて脱退しなくてもよいのではないか」といわれたが、牧野が「仰せ御尤（ごもっと）もには存じますが、すでにこの方針にて決まっております」と奉答したので、黙られた。

どのような名分があったにせよ、軍が暴走して満州を支配下に収め、その後中国側から挑発されたにせよ、満州で留まることなく中国大陸における泥沼戦争を拡大させ、ひいては対米戦争を招いてしまったのは、愚かなことだった。

昭和十二年に入ると、盧溝橋（ろこうきょう）事件を何とか収拾したが、中国側から仕掛けられて第二次

上海事変が起こった。中央は不拡大方針をとったが、日本軍の進攻が止まらず、果てしない戦争にのめり込んでいった。

天皇は一貫して戦火を拡大することがないように希望された。

昭和十四年、ヨーロッパで第二次世界大戦がはじまり、ドイツ軍がヨーロッパを席巻（せっけん）すると、翌年、日独伊三国同盟条約が締結された。

条約締結前、天皇は近衛文麿（このえふみまろ）首相に「日独軍事協定が対米戦争を招くのではないか。自分はこの時局がまことに心配であるが、万一、日本が敗戦国となったときに、一体どうだろうか」「独伊のごとき国家とそのような緊密な同盟を結ばねばならぬようなことで、この国の前途はどうなるか。私の代はよろしいが、私の子孫の代が思いやられる」と再三懸念された。

その後も天皇の意志に反して事態が進み、軍が昭和十六年に南部仏印（フランス領インドシナ、現在のベトナム付近）進駐を強行したことが、アメリカとの衝突を避けがたいものとした。

天皇の直観力を、もし軍人や言論人が分かち合っていたとすれば、昭和二十年の未曾有（みぞう）の敗戦の屈辱を招くことはなかった。

満州事変後に岡本侍従に漏らされたご懸念が、現実のものとなってしまった。

立憲君主であるのが、私の考えの基本だ

——昭和五十四年　宮内庁記者団会見ほか

天皇は立憲君主に徹していらっしゃった。

近代日本を築かれた明治天皇を誰よりも深く尊敬されておいでだったので、明治天皇が制定された大日本帝国憲法を尊ばれた。そのために、天皇の上に憲法があると考えられて、立憲君主であろうと努められた。

とくに大正十（一九二一）年、皇太子としてイギリスを訪問されたときに、イギリス王室から立憲君主制について学ばれた。

昭和五十四（一九七九）年に宮内庁記者団と会見されたおりに、イギリスにおける体験をなつかしがられた。

「それは何といっても、イギリスの王室を訪問したことで、ちょうど私の年ごろ前後の人が多く、（家族同様のもてなしを受けて）じつに私の第二の家庭というべき状況でした。

イギリスのジョージ五世から、イギリスのいわゆる立憲君主のありかたというものについて、親切な話をうかがいましたが、つねに立憲君主はどうすべきか、私の頭にありました。立憲君主であることが、私の終生の考えの根本です」

昭和三十六年四月、長崎県の雲仙観光ホテルで宮内庁記者団と会見されたときにも、「還暦をお迎えになるのですが、六十年を振り返って、楽しかったことの思い出は、どんなことがおありですか」との質問に、「何といっても、一番楽しく感銘が深かったのはヨーロッパ旅行です。なかでもイギリスでバッキンガム宮殿に三日泊まって、ジョージ五世陛下と親しくお会いし、イギリスの政治について直接知ることができて参考になりました」と同じように答えられている。

天皇主権下のジレンマ

天皇は明治憲法下で、絶対君主ではなかった。したがって「天皇親政」などはあり得なかった。どのような憲法であっても、天皇、国王、独裁者による〈親政憲法〉は存在し得ない。天皇は憲法があるかぎり万能ではなかった。そうだったからこそ、革新将校たちは「憲法停止、天皇親政」を求めたのだった。

関東軍が満州事変をひき起すと、天皇は戦火が拡大しないように願われ、近衛内閣が不拡

大方針を決定したのにもかかわらず、軍が昭和八年に万里の長城の北方の熱河（現在では河北省、遼寧省、内モンゴルにまたがる地域）に侵攻した。

天皇は中国と軍事衝突するのではないかと憂えられた。

天皇は奈良侍従武官長に、「（大元帥の）統帥最高命令によって、これを中止させることはできないか」と御下問された。

明治憲法では政府が国務を担当し、天皇を軍の最高指揮官である大元帥として、軍の用兵を決める統帥大権を政府から独立したものとしていた。

奈良は「国策上に害があることであれば、閣議によって熱河作戦を中止させることができます。国策の決定は内閣の仕事でありまして、閣外の者がこれを指導することはできません」とお答えした。

近衛内閣が不拡大方針を決めたのだから、内閣がそれを実行するべきであった。天皇は閣議決定に対して拒否権を持っていなかった。

明治憲法のもとでは、天皇は国務についてであれ、軍の統帥事項についてであれ、それぞれ政府と軍が決定したことを承認せざるを得なかった。天皇は憲法の囚人だった。天皇は立憲君主として当局者に助言することしかできなかった。

機関説は少しも不都合がないではないか

昭和十（一九三五）年に、美濃部達吉東京帝国大学教授が学説として発表していた「天皇機関説」を巡って、日本が大きく揺れた。美濃部博士は天皇が国家の機関の一つであると唱えた。天皇も憲法が定めた役割を担っていたから、穏当な法理論であった。

それにもかかわらず、右翼団体や軍は、天皇機関説が天皇を軽んじ国体を破壊するものとしてとりあげて、議会で政府を攻撃するなどして〈国体明徴運動〉を展開した。このために、政府は「国体明徴」声明を二度にわたって行い、軍の強硬派と右翼勢力が力を増した。

これは、一学者に対する攻撃ではなく、立憲制度を破壊しようとするものだった。

天皇は鈴木貫太郎侍従長に対して、天皇機関説についてご自分の考えを述べられた。

「主権が君主にあるか国家にあるか、ということを論ずるならばまだ事が判っているが、ただ機関説がよいとか悪いとかという議論をすることは、すこぶる無茶な話である。自分からいえば、君主主権説よりも、むしろ国家主権のほうがよいと思う。

君主主権説は、ややもすれば専制に陥り易い。ああいう学者（美濃部）を葬ることは、すこぶる惜しい」

また、広幡忠隆侍従次長に「憲法学説として、機関説は少しも不都合がないではないか」

ともいわれた。

さらに、奈良侍従武官長にこう語られた。

「いったい、軍が機関説を悪くいうのは矛盾じゃないか。軍人勅諭のなかにも〈朕は汝等の頭首なるぞ〉という言葉があるが、頭首といい、憲法に天皇が国の元首というのは、とりもなおさず機関ということだ」

「憲法第四条の〈天皇ハ国ノ元首云々〉は、即ち機関説である。これを改正することを要求するとすれば、憲法を改正するほかない」

天皇は終戦の翌年の昭和二十一年に、藤田尚徳侍従長にこう述懐された。

「申すまでもないが、我国には厳として憲法があって、天皇はこの憲法の条項によって行動しなければならない。またこの憲法によって、国務上にちゃんと権限をゆだねられ、責任を負わされた国務大臣がある。

この憲法上明記してある国務各大臣の責任の範囲内には、天皇はその意志によって勝手に容喙し干渉し、これを掣肘することは許されない。だから内治にしろ、外交にしろ、憲法上の責任者が慎重に審議をつくして、ある方策をたて、これを規定にしたがって提出して、裁可を請われた場合には、私はそれが意に満ちていても、意に満たなくても、よろしいと裁可する以外にとるべき道はない。

もしそうせずに、私がその時の気持次第で、ある時は裁可し、ある時は却下したとすれば、その後責任者はいかにベストを尽しても、天皇の心持によって何となるか分からないことになり、責任者として国政につき責任をとることが出来なくなる。

これは明白に天皇が、憲法を破壊するものである。専制国家ならばいざ知らず、立憲国の君主として、そんなことは出来ない。

だが、戦争をやめた時の事は、開戦の時と事情が異なっている。あの時には終戦か、戦争継続か、両論に分かれて対立し、議論が果てしもないので、鈴木（首相）が最高戦争指導会議でどちらに決すべきかと、私に聞いた。

ここに、私はだれの責任にも触れず、権限も侵さないで、自由に私見を述べ得る機会を初めて与えられた。だから私はかねて考えていた所信を述べて、戦争をやめさせた」

一視同仁

――昭和四十六年　ヨーロッパ諸国御訪問

昭和天皇は昭和四十六（一九七一）年に、皇后陛下とご一緒にヨーロッパを訪問された。ロンドンのビクトリア駅で列車から降りられると、エリザベス女王と握手を交わされた。私はそのときに、二人の微笑みかたに日本と西洋の違いをみたと思った。

エリザベス女王は鋭い視線を相手に一瞬注ぎ、のちに微笑んだ。あなたに対して微笑んでいるが、他の人に対しては微笑んでいないという意思表示にとれた。狙い撃ちする、個人対個人の微笑だった。

これに対して、昭和天皇の微笑は曖昧で、焦点が定まらず、一体誰に対して微笑んでいるのかわからないものだった。その微笑みは、エリザベス女王に対してのみ向けられているのではなく、全世界に対してのものだった。

いうなれば、一視同仁（すべての人を平等にみて仁愛を施す）の微笑である。

エリザベス女王の微笑は、西洋人のものだった。それに対して、昭和天皇の微笑は和を重んじる日本の生活文化に根ざしたものだった。

イギリス王家が、権力闘争のなかから成立した王家なのだからだろう。味方と敵とをはっきりと分けなければならないのだ。

このような笑いかたには、宗教もかかわっている。西洋のユダヤ・キリスト教の神は聖書に書かれているように〈怒りの神〉である。また、自分以外の神を認めず異端を許さないという、嫉妬心が強い〈妬みの神〉である。

だから、神だけではなく信者のほうも怒りっぽい。神の命令は絶対に守らなければならないという、上から下への垂直な宗教である。イスラム教も、ユダヤ・キリスト教の根から生まれたから同じだ。

そこへゆくと、日本の神々は天照大御神が天の岩戸からお姿を現されると、いっせいに笑ったというように、明るい神々である。多くの神々が横並びになっている。

七世紀の宮廷歌人の柿本人麻呂が「ひさかたの　天の河原に　八百万　千万神の　神集い　集いいまして　神分り　分りし時に……」（万葉集）と歌ったように、日本の神々は神議（合議）される。日本は太古の時代から、和を重んじてきたのである。

天皇が記者会見で、「お好きなテレビ番組はおありでしょうか」と質問されたとき、「テレビはいろいろみてはいますが、放送会社の競争がはなはだ烈しいので、どういう番組をみているのかということは、答えられません」といわれたことはよく知られている。

また、大相撲を好まれたが、ご贔屓の力士について質問を受けられて、同じようにお答えになられたこともよく知られている。

天皇がご陪食を賜るときにも、招かれた人々に均しく声を掛けられた。

対象が何であれ、昭和天皇が好き嫌いを仰言ることはなかった。

天皇が崩御されるまで二十六年にわたって、〈天皇の料理番〉として大膳課で腕を揮った谷部金次郎氏は、「陛下といえども人間なのですから、今日は何が食べたいと思われることは、絶対におありだったはずです。ただ、それをもらしては、そのつどまわりが大変な思いをするのではと配慮されたのでしょう。いっさい、お言葉にはなりませんでした」と述懐している。

谷部氏は、天皇が食事を「残されるようなことはなく」「お作りした者にとっては、それは気持ちのよいものでした」と加えている。

もっとも、江戸時代を通じて武家階級は粗食を旨として、食事について好き嫌いをいってはならず、供されたものを残してはならなかった。終戦後まで、日本国民の大多数がそのよ

うな家庭教育を受けて育った。

皇室や公卿たちも粗食だった。世界のなかで、支配階級が粗食を旨としたのは、なぜか日本だけである。

天に私照なし

東宮御学問所では、倫理の講義を担当した杉浦重剛から「天に私照なし」という言葉を教えられた。太陽は地上を分け隔てなく照らし、天は依怙贔屓をしないという意味である。「天皇」とはそれ以上の地位も名誉も存在しない。したがって、財産を増やそうともされないから、個人として損得を計算されることがない。歴代の天皇には、無私の精神が伝わっているのである。

東宮で奉仕した木下道雄侍従は、京都御所内にある東山文庫を訪れたときに、光格天皇（在位一七七九～一八一七年）が二十九歳の折、御先々代の後桜町上皇に対してしたためられた書簡を拝見した。

東山文庫は土蔵であるが、歴代天皇の直筆の書簡や記録が収められている。

「仰せの通り身の欲なく、天下万民をのみ慈悲仁恵に存じ候事、人君なるものの第一のおしえ」と記されていた。当時はまだ徳川幕府の力のほうが強く、皇室は無力だった。皇室衰微

といわれているように、天皇が日々の遣り繰りにさえ窮されて、お酒を入手されるのにも困られていたほどだった。

天皇は私を持つことなく、つねに万民の幸せを願わなくてはならないのだ。

感動した木下侍従は光格天皇の書簡を写して戻り、先輩の御用掛（宮中の用務を取り扱う職）を通して皇太子に言上した。

しばらく後に、裕仁親王から「よいことをしてくれて、ありがとう」という言葉を頂戴した。

雑草ということはない

昭和天皇は草木にも愛情を注がれた。田中直侍従がその役に就いたばかりのころ、天皇、皇后が那須の御用邸でお過ごしになっていた留守中に、吹上御苑の裏庭の雑草を庭園係に刈り取らせてしまった。

天皇が那須から戻ってこられると、すぐにお召しがあった。

御政務室まで出向くと、「どうして庭を刈ったのかね」という御下問があった。

「雑草が生い茂っておりましたので、一部お刈りいたしました」とお答えした。

天皇は「雑草ということはない」といわれた。田中侍従には天皇が仰言った意味が、とっ

さにはわからなかった。

すると天皇が、「どんな植物でもみな名前があって、それぞれ自分の好きな場所で生を営んでいる。人間の一方的な考え方で、これを雑草としてきめつけてしまうのはいけない。注意するように」と戒められた。

やがて天皇が「雑草」という言葉を好まれないということが、関係者のあいだで知られるようになった。

昭和五十九年に宮内庁記者会とのご会見のときに、「雑草という草はないとおっしゃられていますが、その意味は」とおたずねした。

天皇は「どうも雑草という名前は、少し侮辱的な感じがして好まないのです。道端に雑然と生えている植物をさすのではないかと考えています。どうも、おもしろくないのです」と、答えられている。

天皇は自然のままの吹上御苑を、草木を観察されながら歩かれるのを楽しみとされていた。雑草一本を抜くのも禁じられていた。

一視同仁を裏返せば、天皇は孤独なご存在である。親しい友人を持つことができない。御学友として、ご幼少のころに皇太孫のために設けられた特設幼稚園に五人、学習院初等

科時代に十二人、東宮御学問所時代に五人が選ばれた。しかし、お立場から特定の者と親しくなられてはならず、等距離をおいてお付き合いをされなければならなかった。

戦争中に会ったことがあるな

——昭和五十五年　宮中お茶会

昭和天皇は緻密でいらっしゃった。

東宮御学問所では、裕仁親王に漢文、国文、倫理、歴史、地理、数学、博物、フランス語、習字、武課、馬術、体操、軍事講話が教えられた。そのなかで、裕仁親王がもっとも好まれたのは博物と馬術だった。

博物とは博物学のことで、生物学や植物学などの分類が生まれる以前の呼称である。生物学に関心をもたれるきっかけとなったのだろう。また当時は、英語ではなくフランス語が国際語であり、外交用語だった。

長じられてからは海洋生物学に打ち込まれたが、細やかな観察力と、分類するに当たっての忍耐強い整理能力が求められる学問であった。

秩父宮は陛下よりも一歳下でいらっしゃったが、兄宮についてこうご懐旧されている。

「陛下がおとう（十歳）ぐらいの時です。

夏休みに山に行った時、蝶や虫やたくさん採ったものですが、僕などは最初のうちこそ熱心にいちいち名を調べもしますが、数が多くなると面倒になり、いい加減にしてしまいます。ところが、陛下はけっしてそのようなことはなく、どのような小さい虫でもいちいち名をお調べにならないとお気がすまない。

また、標本を整理するにしても、僕などが多少図案的に見た眼に綺麗なように配置するのに、陛下はかならずいちいち種類によって分類をしてお並べになるのですから、容易のことではありません」

東宮御学問所で歴史を担当した白鳥庫吉博士が、「仁徳天皇が、竈から立ち昇る煙が少なくて嘆かれたといわれるが、いったい、その原因はなんでありましたでしょうか」と質問した。

御学友たちはそれぞれ、洪水とか飢饉などと答えた。

すると、裕仁親王が「もっとも大きな原因は、神功皇后の三韓征伐が国家の疲弊をもたらしたことでした」と述べられて、白鳥を感心させた。そのころから、ものごとの本質を見透かす能力を備えられていた。

天皇は機転に富まれていた。

大正十（一九二一）年のヨーロッパ巡遊でイギリスを訪れられたときに、空軍大臣の案内で飛行場を見学された。

新型機をご覧になり、空軍自慢のパイロットを紹介された。大臣が「先の大戦においてヨーロッパ戦線で戦功をたてた名パイロットです。彼に操縦させますから、ぜひ、英国一の飛行機にご試乗いただけませんか」とお誘いした。

珍田捨巳（ちんだすてみ）訪欧供奉長以下、随行者全員が息をのんだ。殿下が空軍大臣の好意的な申し出を受けられて搭乗され、万一、乗機が事故を起こしたらと考えた。

裕仁親王はとっさに「ありがとう。英国一の飛行機に乗ることは、まことに愉快である。しかし、今日は予定していないので残念である」と切り返された。一同、深く安堵した。

天皇は驚異的な記憶力をお持ちだった。

ご幼少のころから記憶力がずばぬけて優れておられたと、当時の側近者がそろって証言している。

檜垣徳太郎代議士が、昭和五十五（一九八〇）年の宮中お茶会に招かれて出席したときに、天皇にご挨拶すると、「檜垣は戦争中に会ったことがあるな」と仰言られた。

檜垣は舌を巻いた。

三十六年前の昭和十九年、マニラにあった第三南遣艦隊司令長官を退任した岡新中将が、天皇に拝謁した。退任する司令官が、天皇に軍情を内奏するのが慣例になっていたからであった。そのとき、若い大尉の副官として末席に随行していたのが檜垣だったのである。

ヒドロゾアをご研究された理由

天皇はつねにそのお立場を考えて発言された。

帝王学の基本は、細やかな配慮である。

昭和二十一年に松平慶民宮内大臣が、「どうして生物学のなかでも、ヒドロゾアをご研究されているのでしょうか」とうかがったことがあった。

天皇は「日本には分類学を研究している者が少なかった。これ（ヒドロゾア）なら競争もせず、迷惑をかけることも少ないだろうと思ってはじめたのだ」と述べられた。

昭和二十九年、占領下ではじまった約九年にわたる地方巡幸を、北海道で終えられた。ニセコ観光ホテルで記者団と会見されたときに、「本土と北海道では歓迎の方法にも違いがあるように思いますが、どのように感じられましたか」と質問された。

天皇は「地方地方で、いろいろと特色はあるように思いましたが、根本の精神は同じだと

思っています」と答えられた。

昭和五十年十月、アメリカご訪問から帰られて、新宮殿で日本記者クラブと会見されたときに、「陛下が十五日間、アメリカにお出でになったあいだで、非常に印象深かったことをお聞かせください」と求められた。

天皇はこう仰言った。「訪問中、いろいろ深い印象を受けました。おのおの特徴があって、(選ぶのは)むずかしいことです」

昭和五十二年に那須御用邸で記者団と会見されたときにも、「陛下はヨーロッパ、アメリカと外国へ旅行されたわけですが、どこかとくに行かれたいところはございませんか」という質問がでた。

天皇は「各国おのおの特徴があり、また長所も短所もあるので、そういうことを見たいとつねに思っていますが、どこの国ということになると、それぞれの国の誇りがあることですから、どこの国がいいとか、どこに行きたいということを、はっきり言うことはよくないと私は思います」とはぐらかされている。

富田朝彦(ともひこ)宮内庁長官も、天皇のご健康法についてたずねられたとき、「いろいろご自分にあうように気をつけておられるが、陛下が『健康のためにこうしている』というと、国民が

それを真似して効果があがらなかったということになる恐れがあるから、絶対にいわれないんじゃないですか」と述べている。

よくやってくれて、ご苦労である

——昭和二十年　みくに奉仕団

日本は国として敗れたが、昭和天皇は屈しなかった。

昭和二十（一九四五）年十二月に連合軍は、木戸幸一内大臣をはじめとする人々に戦犯容疑者として逮捕命令を出した。

内大臣は平安時代から、天皇を側近として補佐する員外の大臣であってきた。明治以降は天皇の政治秘書に相当したが、この官職は昭和二十年に廃止された。

天皇は藤田尚徳侍従長に、逮捕をひかえている木戸を慰めるために、夕食のご相伴（陪席）に召されたいといい出された。

とっさに藤田は、木戸が「戦争犯罪容疑者となりましたからには、おそらくご遠慮申し上げるのではございませぬか」とお答えした。

連合軍を不必要に刺激することがあっては得策ではないと考えたのだった。

だが、天皇は珍しく語調を強められていわれた。

「たしかに米国よりみれば、犯罪人かもしれないが、わが国にとっては功労者である。もし木戸が遠慮するようであれば、料理を家まで届けるようにしてほしい」

もっとも、天皇が連合国から戦争犯罪人として指定された者にご陪食を賜わったのは、これがはじめてのことではなかった。

十月には、梅津美治郎元参謀総長と豊田副武元軍令部総長などの軍幹部を、午餐に招かれて慰労されている。

このときには、もう参謀本部と軍令部は廃止になっていたが、まだ軍が法制上存在していたので、天皇は大元帥の軍服を着ておられた。

木戸の送別会の日、午後六時から、御文庫の御食堂でご陪食が始まった。

木戸のほかに、藤田侍従長、蓮沼蕃元侍従武官長、甘露寺受長元侍従次長や侍医たちが、天皇と皇后を囲んだ。甘露寺は天皇がご幼少のころの御学友だった。

木戸は帰りがけに、皇后のお手製のドーナツを土産として賜った。

送別会に先立ち、木戸が御政務室に入ると、天皇は椅子をすすめていわれた。

昭和十五年から五年にわたって、苦楽をともにされた天皇の側近中の側近が、占領軍によって辱しめられるのだ。

「今回は、まことに気の毒である。どうか身体に気をつけて、かねてお互いに話し合っているように、わたしの気持ちはすっかりわかっていると思うから、十分に（連合国に）説明して貰いたい」

木戸は天皇から「お互いに」といわれて感激して、眼鏡の底で小さな細い目をしばたたかせた。日本人として、天皇に「お互いに」といわれるほど大きな名誉はあるまい。

「誓って聖旨（天子の思召し）に副い奉り、御聖徳を顕揚いたしてまいります」と木戸が言上した。

主従は二人きりで、三十分も話し合った。

木戸が退出しようとすると、天皇は机のうえから硯を取った。

「これは、わたしが政務室で使ってきた硯だよ。永く記念としてつかわそう」

木戸は硯を手にすると、声をおさえて泣いた。

木戸はもう天皇に拝謁することもないだろうと思って、思い切って申し上げた。

「陛下、どうか最後まで新日本の建設のためにご努力ください。それが陛下のお立場です。しかし、万に一つ、ご退位ということがあるかもしれません。その折のことも十分お考え遊

ばされますように」

天皇は、ただ、「ウン、ウン」と頷かれた。

みくに奉仕団は栗原市がルーツ

木戸が皇后にお別れするために拝謁しているあいだ、天皇は外套をお召しになられて、歩いて外へ出られた。

吹上御苑の通用門の前の道路には、「農民みくに奉仕団」の六十人の青年男女が二列になって、玉砂利の上に並んでいた。平均年齢は二十二、三歳だった。

天皇は侍従を連れて立たれると、「遠いところから来てくれて、まことにありがとう。よくやってくれて、ご苦労である」と声高にいわれた。

そのうえで、「郷里の農作の具合は、どんなか」「地下足袋（じかたび）は満足に手に入るか」「肥料の配給はどうか」「何が一番不自由か」と、つぎつぎに御下問になった。団員は奉答するうちに感動して、泣きじゃくりながら言葉を接いでいった。

天皇は深く満足された。お立ち去りになろうとして、踵（きびす）をめぐらされたときに、占領軍からは日の丸と国歌が禁じられていたにもかかわらず、誰が歌いはじめたのか、団員から『君が代』の合唱が起こった。

調子外れだった。誰も彼もが頬を濡らし、泣きながら歌った。

この青年男女たちも、日本が国として敗れていたのにもかかわらず、屈していなかった。

その前にも、宮城県栗原郡築館町（現在の栗原市）から有志が上京して皇居を訪れ、焼跡の整理やお庭の手入れ、草むしりなどの清掃奉仕に当たりたいと申し出ていた。

この宮城県からきた「みくに奉仕団」が、戦後の皇居の勤労清掃奉仕団の嚆矢となって、今日に至っている。

「みくに奉仕団」の話はたちまちのうちに全国に伝わり、各地から勤労奉仕の申し込みが殺到した。

天皇は大いに喜ばれて、「戦にやぶれしあとのいまもなほ　民のよりきてここに草とる」と詠われた。

皇居の各門には、占領軍のＭＰ（憲兵）が立哨して出入りを監視していた。

総司令部は多くの青年男女が皇居に勤労奉仕といって集まってくるのを、天皇復権へ向けた策謀なのかと疑い、いくつかの奉仕団を拘束して取り調べた。

しかし、全員が手弁当で上京しており、謝礼もいっさいないにもかかわらず、天皇を崇敬する純粋な心から喜んで働いていることを知って、干渉することができなかった。

天皇はまた、清掃奉仕団について、「をちこちの民のまゐきてうれしくぞ　宮居のうちにけふもまたあふ」と詠まれた。

翌年一月に参内した幣原喜重郎首相は、「アメリカとて、永遠に日本に占領政治を布くわけにはまいりません。いましばらくの御辛抱でございます」と申し上げた。天皇は強く頷かれた。

天皇が泣かれた

——昭和二十年　終戦直前の御前会議

昭和天皇がはじめて臣下の前で泣かれた。

終戦六日前の昭和二十（一九四五）年八月九日の深夜、和戦を決定する御前会議が、御文庫と坑道でつながれた地下壕の大本営付属室（参謀本部付属会議室）で催された。十五坪ほどの会議室である。

天皇は大元帥の陸軍軍装を召されて、金屏風の前に座られ、玉座に向かって右に鈴木貫太郎首相、阿南惟幾陸相、梅津美治郎参謀総長、向かい合って平沼騏一郎枢密院議長、米内光政海相、東郷茂徳外相、豊田副武軍令部総長が座った。後列に迫水久常内閣書記官長などが座った。

鈴木が迫水にポツダム宣言の全文を朗読するように命じた。迫水は立って読みあげはじめたが、とめどもなく涙が溢れて泣き声になった。宣言の苛酷な文句を天皇に聞かせるのがあ

まりにも忍びなく、ところどころで泣きじゃくった。宣言は「これ以外の日本国の選択は、迅速かつ完全なる壊滅しかない」と結ばれていた。

鈴木はそのうえで、東郷を指名した。東郷は「天皇陛下の地位に変化がない（国体護持）」ことを前提に無条件受諾を主張した。次に阿南が「私は外務大臣の意見には反対であります」と前置きして、まだ本土決戦において「徹底的打撃」を与えることができるといった。続いて、米内と平沼が東郷を支持した。梅津、豊田の意見は、阿南と同じだった。会議は三対三に分かれた。

老首相は「本日は一同、熱心に意見を開陳いたしましたが、いまに至るまで意見はまとまりません」とゆっくりと話しだした。「これ以上は遷延を許されないので、まことに畏れ多いことではございますが、ここで天皇陛下の思召しをおうかがいして、会議の結論といたしたく存じます」といった。

鈴木は席を離れ、天皇の前まで進んで最敬礼して、「何とぞ、思召しをおきかせください」といった。

老首相は耳が遠かったので、天皇は体を乗りだすようにして、高い声で二回「座ってほしい」といわれた。

「それならば、わたしの意見をいおう。わたしは外務大臣の意見に賛成である」

天皇は、大東亜戦争がはじまってから「陸海軍とも、予定と結果とがどうもちがう」「本土決戦には勝つ自信があるというが、報告とちがって、九十九里浜の防備すらほとんどできていない」「兵士に銃剣すら行き渡っていない」「本土決戦に突入したらどうなるか」と問われ、「どうして、この日本という国を子孫に伝えられようか」といわれた。

迫水が梅津を見ると、涙が頬を伝い、前に置かれた文書に次々と落ちた。やがて全員が、啜り泣きはじめた。

「堪え難いこと、忍び難いことであるが、わたしはこの戦争をやめる決心をした」

天皇は白手袋をはめた右手で、はじめ眼鏡を拭っていたが、手は頬を走る涙の線をおさえようとしていた。

「自分のことや、皇室のことなど心配しなくてもよい」

もう部屋のなかの啜り泣きは号泣にかわっていた。何人か、ワーッワーッと、子どものように大声をあげて泣きはじめた。

鈴木が立って涙をこぼしながら、「会議は終りました。ただいまの思召しを拝しまして、会議の結論といたします」といった。

もう十日の午前二時二十分になっていた。

どうか、わたしをわかってほしい

国体護持という条件付きで受諾の意向を連合国に打診したが、連合国に「隷属する」とも訳せる回答があった。軍部は再び抗戦を唱えた。

八月十四日午前十時五十分、天皇が最初の聖断を下した同じ大本営付属室で、さらに全閣僚を加えて二回目の御前会議が行われた。閣僚のなかで久しぶりに天皇をみた者は、天皇がひどく痩せられたのに驚いた。

鈴木は先の御前会議後に催された閣議の経過を、手短に言上した。「閣議では、約八分が連合国からの回答を受諾することに賛成しておりますが、まだ全員一致をみるに至っておりません。重ねて叡慮を煩わし奉るのは、臣下としてたいへん罪深いことと存じ、お詫び奉ります。しかし、ことはすこぶる重大で緊急を要しますので、あらためて反対の意見ある者よりお聞きとりのうえ、重ねて御聖断を仰ぎたいと存じます」

老首相はまず阿南を指名した。阿南は話しはじめると涙声になった。

天皇はいちいち強く頷かれた。そのうちに、阿南が泣くのをみて、天皇の頬にも涙が伝わりはじめた。阿南が座ると、鈴木はまた立って一礼し、梅津を指名した。梅津も阿南と同じようなことを、泣きじゃくりながらいった。

もう会議室には啜り泣く声が満ちていた。天皇の涙をみて、泣かない日本人はいなかった。

梅津が着席すると、豊田もこのままでは「国体護持」ができないので戦うべきであるといった。鈴木が「反対の意見を述べるのは、これだけでございます」と申し上げた。

「ほかに意見がないようだから、わたしの意見を述べる。みなの者は、わたしの意見に賛成してほしい」

天皇の声は、抑揚や区切りかたが常人と違った。天皇はまた泣かれていた。時々、白手袋をした右手を頬にあてられた。

「三人が反対する趣旨もわかる。しかし、わたしは国内と世界の現状を十分に考えたうえで、これ以上、戦争を続けるのは無理だと思っている」

「みなは国体護持の問題について、それぞれおそれているようだが、先方からきた回答文をよく読んでみると、悪意をもって書かれたものとは思えない。要は、国民全体の信念と覚悟ができておるかどうかに問題があると思う。わたし自身は、自分の身はどうなってもよい。国民の生命を助けたい」

天皇は、日本と国民が生き抜く道が残っているならば、復興という光明をつかむこともできる、その道は険しく長いだろう、死した者や内地で亡くなった者やその遺族を思うと悲嘆に堪えないが、私も国民とともに努力しようと語られた。そして突然、叫ぶようにいわれた。

「阿南、阿南、お前の気持ちはよくわかる。しかし、わたしは国体を護れる確信がある」

天皇は十数年前、自分の侍従武官をつとめたこの陸軍軍人に、悲痛な調子で訴えた。

「もし、わたしが直接国民に呼びかけることがよければ、マイクの前にも立とう。国民は何も知らないのだからきっと動揺しよう。陸海軍将兵はさらに動揺しよう。どうか、わたしをわかってほしい。わたしは何でもいとわない。何でもする」

もう椅子から落ちて、床に蹲(うずくま)って泣いている者もある。嗚咽する声が、競うようにたかまっていった。

天皇は正午に御政務室で木戸と会って、会議の模様を話された。そのときも、天皇は涙をこぼされ続けた。

九月二日、東京湾に浮かぶアメリカ戦艦『ミズーリ』艦上において、降伏文書調印式が行われた。重光葵(まもる)外相が政府全権として調印した。余談だが、私の父の加瀬俊一も内閣情報局第三部長として全権団に随行している。

天皇は、降伏調印式の首尾についての報告を受けるため、重光の参内を皇居で待たれていた。そして、重光が式典の一部始終について言上するあいだ、天皇の頬に涙が伝わって、指でしきりに拭われた。

お口癖の独り言

――昭和十二年　盧溝橋事件以降

昭和天皇はしばしば独り言をいわれた。

私は、宮中で天皇を囲んでいた多くの人々に、インタビューを行っている。歴代の侍従長、後にお側でお仕えした御幼年時代の御学友、侍医、侍従武官、宮中祭祀に奉仕する掌典（しょうてん）、内掌典（ないしょうてん）（巫女（みこ））、お側で雑役や警衛をつとめる内舎人、宮内省（戦後は宮内庁）職員などに、それぞれ長い時間を割いてもらった。

これらの人たちの多くが、天皇が独り言を癖のようにいわれたことを証言している。

昭和二十（一九四五）年に入って、戦況が急速に悪化し、空襲が激しくなると、天皇は独り言をさかんにいわれるようになった。

天皇が一人でおられるときに、侍従が御政務室に入っていったり、吹上の庭を散歩されて

いるときなどに、あたかも答を探しておられるように、繰り返し大きな声でいわれるのが聞こえた。

「どうも、その……どうも、その……」

天皇の苦悩は深かった。日本の敗北は、明治以来、日本が営々と築きあげてきた地位を、一挙に失うことを意味していた。軍がいうように、一度でも勝利をあげれば、条件をつけて講和を交渉できるかもしれなかったが、このまま抗戦を続ければ、アメリカが天皇制の廃止まで要求するようになる可能性もあった。

天皇はその地位によって日本の頂点に立たれていたから、誰の責任も問うことができなかった。

といって敗勢が強まってから、独り言をいわれるようになったのではなかった。

侍従の岡部長章（ながあき）氏によれば、天皇はそれまでも独り言をいわれたが、昭和十二年に盧溝橋事件が起こった後に多くなったと語っている。

岡部氏は侍従として昭和十一年の二・二六事件直後から、戦後までお仕えした。盧溝橋事件は北京郊外の盧溝橋付近で、日本軍が夜間演習をしていたときに、中国側から発砲されたのがきっかけとなって、日中の本格的な衝突をもたらした。

明治宮殿の御政務室は和風建築で、ガラス戸によって廊下と仕切られ、いつもあけはなた

れていた。そのため、戸口に立った側近者は天皇が独り言をいわれると耳に入った。

明治宮殿は表宮殿に居住区域である御常御殿（おつねごてん）と呼ばれる奥宮殿が連なっていたが、昭和二十年五月の空襲によって焼失した。その前から、天皇皇后は空襲に備えて吹上御苑につくられた防空舎である狭い御文庫に住まわれていた。

村井長正侍従は、天皇の独り言のお声が、昭和二十一年五月に戦勝国が東京裁判を開廷してから、ことさら激しいものになったと回想している。

村井氏によれば、「陛下の独り言は内臓からほとばしるようなすさまじいもので、しかも畏れ多いことに檻（おり）の中を歩き回る猛虎のような激しいお声だった。側近に奉仕する者として、陛下のあまりのお苦しみを目のあたりにして、私はむしろ辞職したいという気持ちに駆られた」のだった。

昭和二十年九月にアメリカ軍が進駐すると、東條英機元首相をはじめとする、いわゆる「A級戦犯」の逮捕がはじまった。天皇は裁判を受ける木戸幸一内大臣について「米国よりみれば犯罪人ならんも、我国にとりては功労者なり」と不満を述べられた。

外国要人を驚嘆させた堂々たる答辞

もっとも、天皇がお一人のときに発せられる言葉は、すべてが独り言に当たるものでなか

った。

天皇はお言葉が淀んではならなかった。

天皇はお手元に提出された勅語の案を、お声に出して朗読されることによって内容を確かめられたり、拝謁者や外国使臣と会われる前に、あらかじめご発言を稽古された。側近者によると、いつも十回ほど稽古された。

大正十（一九二一）年、天皇は皇太子として六ヶ月にわたりイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、イタリアなどのヨーロッパ諸国を外遊された。そしてヨーロッパへ向かうお召し艦『香取』艦上で、二十歳の誕生日を迎えられた。

イギリスが最初の訪問国だった。バッキンガム宮殿において歓迎晩餐会が催された。この席上、イギリス国王のジョージ五世が歓迎の挨拶をした後に、皇太子が答辞を述べたが、堂々たるものだった。

歓迎宴に列席したイギリス大使館付海軍武官の小林躋三大佐は井出謙治海軍次官に、「殿下は途中練習の効もみえまして実に英本国では御立派でした。五月九日倫敦御着当夜（バッキンガムパレス）で御宴がありましたが、百数十の皇族名士の間に雑られ些の臆気もなく御演説の如き、あの広い食堂を圧する程の高声で、私の隣に居った（イギリスの）警視総監の如き『実に立派な者だ、二十そこらであんなしっかりした声が出るのは余程優れた人でなく

ては出来ない、貴国の為に祝福する』といって盃を挙げた位でした」と報告している。

当時日本大使館員だった吉田茂（戦後の首相）も、盛宴の末席に連なっていた。吉田は宮内大臣だった義父の牧野伸顕に私信を送り、皇太子の「御声の朗々たるは皆一般に感得、かつ草稿も御持なく御演説ありしことも、御記憶のよきには余程驚嘆致し居り候」と書いている。

答辞は日本語でされ、珍田捨巳前駐英大使が通訳に当たったが、珍田のほうが声が小さく聞きにくかったと記録されている。

今日、このときのご答辞の原稿が残っているが、「英国皇帝陛下」からはじまって字数にして二百字あまりのものである。

綸言汗の如し

天皇はご自分が発せられる一言一言が、大きな重みを持っていることを承知されていた。「綸言汗の如し」という有名な中国の格言があるが、天子が発した言葉は汗が再び体内に戻らないように、取り消すことができないという意味である。また、『平家物語』には「天子には戯の詞なし。綸言汗の如しとこそ承れ」という一節がある。

大日本帝国憲法は、天皇を「国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ」と定めていた。総攬とは一

手に掌握することである。

裕仁親王は大正天皇がご病気を患われたために、ヨーロッパから帰国された二ヶ月後に、摂政の地位に就かれた。

二十歳の青年である。天皇を代行されることを、きわめて重い責任として受け止められたことは容易に想像できる。

そして、大正天皇が崩御されると、二十五歳で即位された。

天皇はその後、先に述べたように、岡本愛祐侍従兼内大臣府御用掛に「九千万の国民と、皇祖皇宗から受け継いだ祖国の運命は、いま自分の双肩にかかっている」といわれた。

天皇には当然なことであるが、対等な者が一人としていない。とくに明治憲法のもとではそうだった。お言葉を練習しようにも、ふさわしい相手がいなかった。だからお独り言が多かったのである。

陛下の御心はわらじばきの巡礼

——昭和二十四年　永井隆博士談

昭和天皇は長崎を巡幸されたときに、原爆投下によって被爆し、病床にあった永井隆博士を見舞われた。昭和二十四（一九四九）年五月のことであった。

長崎医科大学の助教授だった博士は、その三年九ヶ月前に爆心地から七百メートルの同医大診療室で被爆した。右側頭動脈切断という重傷を負いながら、頭に布を巻いて、被爆者の看護と救援に当たった。

天皇は枕頭に立たれると、「どうです、ご病気は」といわれた。

そして、わきにいた十四歳の長男の誠一君と、九歳の長女茅乃ちゃんをいたわられた。

博士は妻を原爆で失っていた。

永井博士は陛下とお別れした後に、「今日の日本人は分離していますが、陛下がお歩きになると万葉の古い時代がありました。なごやかな愛情の一致が甦って、再び結びつく。今日

はじつに嬉しかった。天皇陛下は巡礼ですね。陛下の御心はわらじばきの巡礼、一人寂しいお姿の巡礼だと思いました」と感想を語った。

そして博士は、「天皇（すめろぎ）は神にまさねばわたくしに　病（やま）いいやせとぢかにのたまふ」と詠んだ。

永井博士は二十六歳で洗礼を受けた熱心なカトリック教徒だった。それなのに、天皇が病床に見舞われた感動を、「天皇は神にまさねば」と詠んでいる。

キリスト教と神道の神の概念が違っていることを知っていたのだ。

「すめろぎ」は「すめらき、すめらぎ、すべらぎ」ともいうが、古語で神や、天皇をいう。日本は「すめらみくに」と呼ばれた。

天皇と博士は、古代から伝わる五七五七七の三十一（みそひと）の音数律をもった歌を通じて、心を通い合わせた。

もっとも古い和歌とされる、素戔嗚尊（すさのおのみこと）（日本神話で天照大御神の弟）の歌をはじめとする百首あまりが、わが国最古の歴史書の一つである『日本書紀』に集録されている。まだ日本人が文字を知らなかったときに詠まれ、口伝えられた歌を、漢字を用いて記したものである。

永井博士は『長崎の鐘』、『この子を残して』などの多くの著書を残し、昭和二十六年に四

十三歳で死亡した。

長崎市の公葬によって、博士の葬儀が営まれた。その三年前に博士は廃墟となった浦上の地に、桜の苗木千本を寄贈した。これらの桜は、「永井千本桜」と呼ばれている。長崎市には永井隆記念館がある。

皇室とヨーロッパ王室の違い

昭和二十年十二月に、衆院予算委員会で「天皇陛下は神であるか、人であるか、神格であるか、人格であるか承りたい」という質問が行われた。

それに対して、前田多門文部大臣が「観念次第によりまして神でもあらせられ、人でもあらせられる。こういうふうに申せるであろうと思います」と答弁している。

昭和天皇は昭和五十二年に那須御用邸で宮内庁記者団と会見されたときに、「日本の皇室とヨーロッパの王室の基本的な違いといいましょうか、それはどこら辺にあると思われますか」という質問に対して、こう答えられている。

「国体というものですが、日本の皇室は昔から国民の信頼によって、万世一系（永久に同じ皇統が続いていること）を保っているのです。

戦国のあの皇室の衰微の時代において、時の戦国の武将、毛利元就や、あるいは織田信長

にしても、みな皇室を尊敬して、ご衰微でお気の毒というので、莫大な財産を献上したという歴史が示しているように、日本の国民は皇室を非常に尊敬したのです。

その原因というものは、天皇もまた国民を赤子（天皇を親に見立てた人民のこと）と考えられて、非常に国民を大事にされた。その代々の天皇の伝統的な思召しが今日をなしたと、私は信じています」

「その（日本の皇室と西洋の王室の）違いというものは、基本的なことは歴史です。歴史と文化、歴史の相違と国民性の違いというものがあって、それがもとでいろいろ制度その他について相違が生じたと私は思っていますが、しかしながら、国民が尊敬している皇室は長く続きます。そういうことは、東西ちっとも変わらないと思います」

「昔の古いことも、明治憲法にしても、そのもっと前にしても、とにかく日本の皇室ではつねに世界の平和と、それから国民の幸福を祈っているということについては、昔も今も変わっていないということを一言したいのです」

悠久の歴史を超えて、皇室は変わっていないと考えられていたのだ。

敗戦後、日本国憲法のもとで宮中祭祀は、国家から切り離されてしまった。しかし、神事は天皇の属性――それなしには考えられない本質的な性質である。

戦後、憲法によって天皇は象徴であると規定されるようになったが、神話から発した出自を思うことなしに、日本における今日までの天皇家の存在感を説明することはできまい。

天皇が宮中三殿で祭祀を行われるというと、物知り顔をして時代遅れではないかとか、非科学的だといった批判をする者がいる。今上天皇が即位されたときにも、宮中三殿において大嘗祭が催された。一部の政党と学者が政教分離に反するといって批判した。

しかし、近代都市の中心に浮かぶ皇居のなかで、一人の人である天皇が神に近づこうとつとめられたというのは、素晴らしいことではないだろうかと思う。

天皇は神の前で過ちがないか、罪穢れがないか畏れて、精進されている。

天皇は神と一体になられようとする宮中祭祀を、親しく真面目に行っておられる。そうすることによって、天皇は神々しさを得られ、日本という国に品格をもたらしている。

今日の日本で、今日的な意味で天皇が神であると思っている人はいまい。

イギリスの劇作家ジェームス・マシュー・バリーの作品に、今日でも子どもたちに人気が高い『ピーターパン』がある。その劇のなかで、妖精のティンカーベルが海賊に襲われる場面がある。

すると、舞台のうえから観客の子どもたちへ向かって、「ティンカーベルが妖精だと信じ

ているなら、拍手してくれ！　それでなければ、ティンカーベルは死んでしまう！」と声が飛ぶ。満場の子どもたちが喝采する。

日本の皇室も、日本に麗しい国柄をもたらしている魔法である。日本神話からの出自を重んじなければ、美しい魔法が解けてしまおう。

日本はその轍をふみたくない

——昭和八年　国際連盟脱退後

昭和十九（一九四四）年十一月、天皇、皇后はそれまで皇居にあった明治宮殿にお住いになられていたが、空襲が激しくなったために、皇居の吹上御苑のなかに用意されていた防空舎である御文庫へと移られた。

軍部は、昭和十六年春から日米関係が険悪化するなかで、万一の場合に備えて堅固な防空舎を建造していた。防空舎は大型爆弾にも耐えられるように、屋根を厚さ一メートルのコンクリートで覆ったうえに、砂を一メートル重ね、さらに一メートルのコンクリートの層で覆っていた。この防空舎は極秘にされたために「御文庫」と呼ばれた。

御文庫には小さな謁見室と御政務室、侍従や、侍医のための常侍官候所（こうしょ）や、女官候所もあった。

天皇は政府の幹部や、軍の首脳を謁見室で引見されたが、側近者である侍従長、侍従、侍

医や侍従武官長や侍従武官には御政務室において会われた。

天皇は御文庫にお住いを移されたときに、明治宮殿の御政務室にあったリンカーンとダーウィンの胸像も御文庫の御政務室へ移された。リンカーンとダーウィンの青銅製の像は、ともに高さが三十センチほどのもので、本棚に貝類の標本とともに飾られていた。

リンカーン大統領の胸像は、お馴染みの容貌から誰であるのかすぐにわかった。新任のある武官はもう一つの胸像も英米の政治家ではないかと訝って、当惑しながら同僚にたずねた。

戦時下の日本では、英語からの借用語も敵性語として使用を禁じられていたが、ましてや敵国人の絵や写真、像を飾ることなどは、歴史上の人物であっても許されなかった。

天皇は人種解放のために生命を捧げた民主政治家のリンカーン大統領と、傑出した生物学者としてダーウィンを尊敬されていた。ダーウィンはイギリス人だった。いま、英米と戦っているにせよ、リンカーンもダーウィンも十九世紀の人であり、この戦争とはかかわりがないはずだった。

昭和六十（一九八五）年まで侍従、侍従長として、半世紀にわたってお側に奉仕した入江相政氏によれば、天皇は神武天皇が詔勅によって命じた八紘一宇（あめのしたをおおひて、一つの宇となさむ――世界を一つの家族となす）の精神を重んじられ、安直な国粋主義を忌ま

われた。

しかし、昭和の日本は偏狭な国粋主義にとらわれて、国民の大多数が大御心（天皇の心）を理解することができなかった。

昭和八年に日本は国際連盟を脱退したが、天皇はご不満だった。天皇はつねに国際協調を願われた。

奈良武次侍従武官長が「脱退は遺憾では御座居ましたが、国民の世論でありました」と、申し上げた。

すると、天皇はこう反論された。

「世論というも、現今のように軍人が個人の意見を圧迫するようでは、真の世論はわからぬではないか」

天皇はさらに「日本精神」という言葉がさかんに用いられていることを懸念された。

「この日本精神というのは、いわゆる日本精神のことで、排他的なものではあるまいね」

天皇はこのころ、鈴木貫太郎侍従長にこう語られた。

「ナポレオンの前半生は本当によくフランスにつくしたが、後半生は自己の名誉のためにのみ働き、この結果はフランスのためにも世界のためにもならなかった。

帝政ロシアの滅亡は、ロシア皇帝が自分の栄華のためを計って、その国民のためを思わな

かったところに原因がある。
ドイツ帝国の滅亡は、ドイツのみのことを考えて、世界のためを思わなかったことによる。
私はそのようにみている。そして、日本はその轍をふみたくない」

私信に滲み出る悔恨の念

天皇は敗戦から二十五日後に、皇太子明仁親王へ手紙をしたためられた。皇太子はまだ日光に疎開されていた。

「手紙ありがとう　しっかりした精神をもって　元気で居ることを聞いて　喜んで居ます
国家は多事であるが　私は丈夫で居るから安心してください　今度のような決心をしなければならない事情を早く話せばよかったけれど　先生とあまりちがったことをいうことになるので　ひかえて居ったことをゆるしてくれ
敗因について一言いわしてくれ
我が国人が　あまり皇国を信じ過ぎて　英米をあなどったことである
我が軍人は　精神に重きをおきすぎて　科学を忘れたことである
明治天皇の時には　山縣（有朋）　大山（巌）　山本（権兵衛）等の如き陸海軍の名将があ

ったが　今度の時は　あたかも第一次世界大戦の独国の如く　軍人がバッコして大局を考えず　進むを知って　退くことを知らなかったからです
戦争をつづければ　三種神器を守ることも出来ず　国民をも殺さなければならなくなったので　涙をのんで　国民の種をのこすべくつとめたのである
穂積大夫（穂積重遠東宮大夫）は常識の高い人であるから　わからない所があったら　きいてくれ
寒くなるから　心体を大切に勉強なさい
父より
九月九日
明仁へ」（カッコ内は著者注）

天皇は昭和二十一年に、木下道雄侍従に「これまで（先の）戦争の原因とその防止の不可能なりし所以を縷々述べてきたが、結論として私の感想を話そう」と前置きして、こう述懐された。

「わが国の国民性について思うことは、付和雷同性が多いことで、これは大いに改善の要があると考える。

戦前、戦時中のことを回顧してみても、今の首相の吉田（茂）のように、自分の主義を固

守した人もいるが、多くは平和論ないし親英米論を肝に持っておっても、それを口にすると不忠呼ばわりされたり、非愛国者の扱いをされるものだから、沈黙を守るか、また自分の主義を捨てて、軍部に付和雷同して戦争論をふり廻す。

かのように、国民性に落ち着きがないことが、戦争防止の困難であった一つの原因であった。

将来この欠点を矯正するには、国民の教養を高め、また宗教心を培って、確固不動の信念を養う必要があると思う。また、このことが日本民族の向上ともなり、世界に向かって人種平等を要求する大きな力となることと思う」

大新聞が扇情的な報道を行って、軍国主義熱と戦争熱を煽りたて、国民が付和雷同したことも、無謀な戦争を導いた大きな原因となった。

天皇はここでもまた人種平等について言及されている。

未ダ嘗テ拝セザル御気色

——昭和十一年　二・二六事件

日本を無謀な戦争に突入させたのは、軍の規律が乱れて出先の軍が独断専行したことと、新聞が軍国熱を煽ったことによったといえよう。

青年将校たちが思いあがって「国家改造」を夢想してテロを行ったことも、国の歯車を大きく狂わせた。

昭和天皇は敗戦翌年の昭和二十一（一九四六）年に、木下道雄侍従に青年将校たちがテロ事件を繰り返し起こしたのを振り返られて、こう嘆かれた。

「私はこれら無謀な行動が招来すべき結果に付て、非常に憂慮したが故に、機会ある毎に軍の首脳者に諭すところがあったが、下克上の風潮が流行し、首脳者の訓戒も部下に徹底しない、さればといって私自身直接に下級将校と面論することは軍の指揮統率の上からいって許されることではなかった」

天皇はこれらの不法な青年将校たちを憎まれた。

青年将校たちによる大規模な反乱事件が、昭和十一年二月二十六日に起こった。いわゆる二・二六事件である。

この日早朝に、陸軍青年将校が部隊を率いて、首相官邸を占拠したのをはじめ、齋藤實（まこと）内大臣、高橋是清（これきよ）大蔵大臣、渡辺錠太郎陸軍教育総監を殺戮（さつりく）し、鈴木貫太郎侍従長に重傷を負わせた。

天皇が二・二六事件の第一報をお聞きになったのは、発生後ほどなくしてである。

甘露寺受長侍従は天皇がつぎのように反応されたと回想している。

「『とうとうやったか……』とおっしゃった。『まったくわたしの不徳のいたすところだ……』と、一言、お口のなかでおっしゃった。

そして、しばらくはお言葉もなく、お立ちになっていらっしゃった」

天皇はしばらく沈黙されていたが、はっきりとこういわれた。

「あの者たちは暴徒だ」

天皇はご自分の考えで、誰にも相談されることなしに、すぐに「反乱軍」であると断定された。

ところが、陸軍上層部は反乱将校に同情的であって、中立派、日和見派などに分かれて、右顧左眄して時間を空費した。軍幹部の多くの者が、この事件を利用して権力を握ろうとしていた。

そのために、はじめ反乱部隊と呼ぶことを躊躇して、「行動部隊」「占拠部隊」「維新部隊」と、呼び名を曖昧に濁して呼んだ。

しかし、天皇の意志が固かったことから、二転三転したうえで、「反抗部隊」「反乱部隊」と変わっていった。

天皇は、慌てて参内した侍従武官長の本庄繁大将に対し、「早く事件を終熄せしめて、禍を転じて福と為せ」と述べられた。

さらに、川島義之陸軍大臣が遅れて参内すると、「今回のことは精神の如何を問わず、不本意である。速やかに事件を鎮定するように」といわれた。

川島は、現内閣の施政が国民の不満を招いていることが事件を招いてしまったとか、国民生活を安定させ国防力を強化するために、新しい内閣を組織することが望まれると言上した。

すると、天皇は憤然とされて、「陸軍大臣はそのようなことに口を出さなくてよい。それより反乱軍を速やかに鎮圧する方法を講じることが、先決要件ではないか」と叱責された。

といっても、この一連のご発言は天皇が個人的な意見を表されたものだった。国務大臣の

副署がある勅令ではなかったから、法的な効力はなかった。

陸軍の独断専行に心を痛められる

翌日、本庄が「（青年将校が）陛下の軍隊を勝手に動かしたのは許すことができないものですが、その精神におきましては、君国を思う至情から出たもので、かならずしも咎むべきではないと思います」と申し上げた。

天皇は「朕ガ股肱ノ老臣ヲ殺戮ス、此ノ如キ兇暴ノ将校等、其精神ニ於テモ何ノ恕スベキモノアリヤ」「朕ガ最モ信頼セル老臣ヲ悉ク倒スハ、真綿ニテ朕ガ首ヲ絞ムルニ等シキ行為ナリ」と仰言った。

この時点では、まだ岡田啓介首相が首相官邸で殺害されたものと信じられていた。

天皇は後藤文夫首相代行に、「速やかに暴徒を鎮圧せよ。秩序を回復するまで、職務に励精するように」とお命じになった。

その日、天皇は軍首脳が反乱部隊の鎮圧を躊っているのに焦慮され、また本庄侍従武官長を召されると語気を強めていわれた。

「わたしが自ら、近衛師団を率いて鎮圧に当たろう」

軍は天皇が激怒され、ご意志があまりにも固かったために、ようやく二十八日の早朝になって、反抗部隊を討伐する作戦命令を発した。このときから、天皇が「暴徒」ときめつけられた反乱軍は、はじめて「反乱部隊」となった。

午後に入ってから、軍は決起将校らを自刃させて、兵を原隊に復帰させることに決定した。川島陸相と山下奉文陸軍少将は、本庄に未練がましく、「ついては勅使を賜り、死出の光栄を与えてもらえないか」と懇請した。

天皇は本庄から軍の要望を聞かれると、怒気を含んだお声でいわれた。

「自殺スルナラバ勝手ニ為スベク、此ノ如キモノニ勅使抔、以テノ外ナリ」

天皇は「自刃」でも「自決」でもなく「自殺」という言葉を使われた。本庄は日記に「未ダ嘗テ拝セザル御気色」でそう仰言ったと記している。

天皇は昭和の陸軍に心を痛められていた。昭和七年に陸軍が強引に満州国を建国すると、国際連盟がリットン調査団を現地に派遣して調査をはじめた。

天皇は元老の西園寺公望公爵に「いったい陸軍が馬鹿なことをするから、こんな面倒なことになった」と嘆かれた。

昭和十年に陸軍が〈国体明徴運動〉を仕掛けると、本庄に「軍部に対して安心できぬ。世

がファッショを高調するとき、軍部もこれに雷同するということにならないか」と仰言った。

軍は天皇を絶対視して、神格化していたのにもかかわらず、天皇と軍のあいだには大きな溝（みぞ）があった。天皇と軍が一体でなかったことが、昭和の悲劇を招いた。

これはわが家の伝統である

——昭和二十四年　東宮御教育常時参与へのご発言

昭和天皇は生涯にわたって、ご自分が行われたことを自慢されたことなど、一度もなかった。また、終生にわたって名誉や栄誉を求められることも、まったくなかった。ご自分についてはじつに無欲な方だった。

天皇は敗戦の年の昭和二十（一九四五）年十二月に、松村謙三農林大臣を皇居に呼ばれた。松村に椅子を賜るとこういわれた。

「戦争で塗炭の苦しみを受けた国民に、このうえ餓死者を出すことは自分には耐え難い。政府が要請をしたのにもかかわらず、アメリカは食糧を与えてくれないという。だが考えれば、当方に代償として提供すべき何物もないのだから、いたしかたがあるまい。それで聞けば、皇室の御物（ぎょぶつ）（天子の所有物、あるいは皇室の所蔵品）のなかには、国際的に価値のあるものが相当にあるとのことだから、これを代償としてアメリカに渡して食糧に代

えて、国民が飢餓を一日でもしのぐようにしたい」

そのうえで、天皇は帝室博物館の館長に命じてつくらせてあった皇室御物の目録を、農相に渡された。

松村はすぐに幣原首相に報告した。幣原も急いでマッカーサー元帥にその旨を伝えた。この天皇の言葉は松村の回顧録に載っている。

マッカーサーは幣原が持参した目録をみることもせずに、「それは皇室の人気取りだ。そのようなものは必要ない。私が責任を持って、かならず本国から食糧を輸入する方法を講じよう」といって、緊急食糧を日本にあてて放出するようワシントンに求めた。

昭和五十四年八月に、宮内庁記者団とのご会見のときに、記者団からつぎのような質問が出た。

「このほど公表されたアメリカの外交文書で、終戦直後の食糧危機の際、マッカーサー元帥が『食糧か軍隊を送れ』と本国に要請したことが明らかになりましたが、これには陛下が『皇室の御物を代償としてアメリカに渡し、食糧に代えて国民の飢えをしのぐようにしたい』と申し出られたことが大きかったといわれています」

天皇は「そういうことがあったのは事実です。しかし、自分のしたことですから、あまり公にはしたくありません」とお答えになった。

昭和天皇は日本の伝統文化が生んだ最高の人だったといえよう。イギリスのエリザベス女王をはじめとして、西洋の王者は個人主義の社会であるから、王も個人として欲望をもっている。そして、それが当然のこととされている。

それに対して日本は、誰であっても無私であることを最高の美徳としてきた。とくに「天皇に私なし」といわれてきた。このように、西洋と日本では理想のありかたが異なっている。

西洋では、歴代の王はそれぞれの個性が語られ記憶される。ところが日本では、歴代の天皇についてお一人おひとりの個性に関心を向けることをしなかった。

昭和天皇という人をつくったのは、天皇が幼少のころから受けられたご教育によるものだけではなかった。そのお人柄は二千年以上にわたる天皇家の長い歴史によってつくられたといってよい。

天皇が国民のために、皇室御物を食糧と交換したいといわれた翌月の昭和二十一年の年頭に、占領軍が強要したいわゆる〈人間宣言〉勅諭が発表された。

そのなかに「朕ハ爾等（なんじら）国民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚（きゅうせき）（喜びと悲しみ、よいことと悪いこと）ヲ分タント欲ス」という一節がある。

だが、戦争に敗れたから、皇室にそのような発想がはじめて生まれたのではなかった。民

を慈しむ心は、歴代の天皇から天皇へ伝えられてきたものであった。

国民の幸福を祈る家系

歴代の天皇は例外なく歌人であってきた。どのお歌にも、国の安寧を願われ、民を慈しむ心がこめられてきた。

いくつか、歴代天皇の御製をあげてみよう。

亀山天皇

よもの海浪(なみ)をさまりて長閑(のどか)なる　我が日の本に春は来にけり

桜町天皇

身の上はなにか思はむ朝な朝な　国やすかれといのるこころに

光格天皇

天つ神くにつやしろのめぐみもて　とよあしはらの風ぞ正しき

国つ社は国土を守護する国つ神を祀った神社であり、豊葦原は「豊葦原の瑞穂の国」といって、日本神話のなかにでてくる日本の美称である。

明治天皇
照るにつけくもるにつけて思ふかな　わが民草のうへはいかにと

大正天皇
としどしにわが日の本のさかゆくも　いそしむ民のあればなりけり

昭和天皇
天地の神にぞいのる朝なぎの　海のごとくに波たたぬ世を

亀山天皇は鎌倉時代、桜町天皇、光格天皇は徳川時代に在位された。皇室が幕府によって実権をすべて奪われていた時代であったのにもかかわらず、国民の幸せを想う心をつねに持ち続けられた。そのような家系に生まれられたのだった。

小泉信三博士は慶應義塾塾長を辞任した後に、請われて昭和二十四年から東宮御教育常時参与となった。小泉は皇太子殿下の教育掛を引き受けるのに当たって、昭和天皇に拝謁した。

そのときに、「陛下の御態度は、侍臣のおすすめ参らせた結果によるものでしょうか、あるいは古の聖人の書や明哲の伝記などをお読みになって、そういう習慣を御身につけられたのでしょうか」とうかがった。

すると、天皇がいとも簡単に「それは人のすすめによったのでもなく、読書の結果でもない。これはわが家の伝統である」とお答えになった。

第三章　「素顔」の天皇

そこにいるの誰か

——明治四十年　日露戦争論功行賞

ご性格が素直、真面目であられ、少しもお威張りになることがなかったと、昭和天皇の幼年時代にお側にあった者は証言している。

皇孫時代に御用掛をつとめた足立たか女官（後に鈴木貫太郎と結婚し鈴木孝となる）は、迪宮（昭和天皇の御称号）は幼少のころから、堂々としておられたと回想している。

日露戦争が終わって、明治天皇が伊藤博文、山縣有朋、松方正義、井上馨の元老などに論功行賞を行われたときに、たかは、迪宮、淳宮（後の秩父宮）、光宮（後の高松宮）のお供をして宮中にあがった。

「そこへぞろぞろっと七元老（後に元老となる大山巌、西園寺公望、桂太郎を含む）がみんな金ピカの盛装に勲章をつけて入っていらっしゃいました。あんまり立派な様子で出てこられ

たものですから、ちょっと私どもびっくりしまして、向こうの方へ参ろうかと思っていました。（略）お上（迪宮）だけはちょっと立ち止って、ごらんになっておられました。

すると、伊藤さんが側に来られて、『皇孫殿下にいらっしゃいますか』といわれました。『さようです』（と足立がこたえると）そこでごあいさつを遊ばしたんですよ。殿下は『誰か？』ってお尋ねになられました。

『私は伊藤でございます。きょうはおじじさまから結構な頂戴物をいたしましたのでお礼に参りました』『そこにいるの誰か』っておっしゃるので、つぎつぎに山縣元帥からずっと七元老の名前を、伊藤さんが申し上げたんです。

殿下は『そうか』っておっしゃって、いちいちごらんになっておいでになりました。みんな大きな方の中に、水兵服を召した小さな殿下なのに、やっぱりプリンスとしての態度がご立派なものですから、伊藤さんが非常に喜ばれまして、『ああ、きょうは良い折にお目にかかりました』と喜んで、『あとのお二方様もどうぞこちらへいらっしゃって頂きとうございます』といわれましたので、それからお二方をお連れしまして、七元老がごあいさつなさいました。

ちょうど皇后さまに御拝謁まで、ちょっと間がありましたので、迪宮さまが『勲章がたくさんあるが、きょうはどれを頂いたのか』とおっしゃる。

伊藤さんが『これを頂きました。まことに有難いことで』と申されますと、『そのほかについてる勲章は何か』ってお尋ねになる。たくさんついておりましたのですよ。『これは外国の勲章でございます』とかいちいち申し上げまして、山縣さんなどはびっくりしていらっしゃるんです。

やっぱり将来のおありになるお方は違うと思われたのでございましょう。私どももお側で拝見していて、涙がこぼれるようでございました。それが、まだ六つぐらいの時ですから、ちょっと普通の子供ではおどおどしていて出来ませんが、すでにお生まれ遊ばした時から、王者の御風格が備わっていたんでございましょう」（カッコ内は著者注）

二千余年の特異な御血統

劇作家の長與善郎は、幼年時代の昭和天皇と会ったときの印象をつぎのように回顧している。迪宮は四歳か五歳だった。

「御幼少ながら、子供らしい呑気さとか、軽佻な位の朗らかさとか、がむしゃらさといったものとは対蹠的に縁の遠い、どこかお内気なという程の荘重な威が既に具わっていらっしゃる。

それならお可愛いという感じはしなかったかというと、反対に、実はお可愛いのだ。一般

の子供のように、ただ無邪気に子供らしくお騒ぎになったり、駄々を捏ねたりなさって、ほほ笑ましいというのとはちがう。しかも実におっとりして、お品高く、お可愛いのだ。

一と口にいえば、いくらか病身の子供が時々そういう風であるように、お聞きわけがよく、おとなしい。お顔の色はお着物の色との対照のせいか、ややお黒い方に見えたこともその感を強めるものだった。といって、お弱いかといえば、御健康ではあるらしい」

そして、もし迪宮が庶民のなかに雑って街中にいたとしたら、「決して思いなしの故でなく、どう見ても一般庶民の子と異なることは、誰の眼にも一目瞭然だったことと思われる。それこそ二千余年と称される全く特異な御血統の伝統がそうしたのだから当然で、不思議はないといえる」と述べている。

昭和天皇の書も、筆運びが慎重で、真面目なお人柄がよくあらわれていた。天皇は書についてもご造詣が深かった。

著名な古筆学者の小松茂美は、天皇が勲記にご署名されたところをテレビ番組で拝して、つぎのような感想を述べている。

「落筆の瞬間を、私は凝視し続けた。（略）天皇の運筆を面前にしたのである。ぐいぐいと、紙に喰い入るばかりの重い筆運び。穂先停滞に近づく限界と思うばかりの入念沈着の遅筆。

時折り傍観する、書家の席上揮毫は一気呵成、眼にも留まらぬ疾さ。果てはみずからの日常の早筆を省みる。今眼前に、昭和天皇のご性格を、さまざまに連想する。かつて『書』と『人』とのかかわりを、これほど密接に実感したことはない」

明治天皇も大正天皇も、迪宮に皇太孫、あるいは皇太子だからといって、甘やかすような教育を施されることがなかった。日露戦争の旅順攻防戦で有名な乃木希典大将が、学習院院長としてご訓育に心を砕いたが、きわめて厳格なものだった。

東宮御学問所で、明治の代表的な教育家であった杉浦重剛が倫理の講義を担当したが、明治天皇を手本として皇太子を指導した。

杉浦は皇太子への講義録のなかで、つぎのように述べている。

「次に挙動につきて注意を要す。坐作進退皆慎みて其の節を誤ることなく、些事にも軽挙妄動することなく、言語を少なくして且つ明晰ならしむべし。若し能く此の如くならば、必ず威容を高雅ならしむべきなり」（第一学年）

「明治天皇の御事は申すも可畏けれども生平謹厳にして喜怒を苟もし給はず。曾て大演習の際、其の地にて群臣に拝謁を賜はりしに、一文官鞠躬如（身を屈めてかしこまる）として御前に進み、拝礼の後、背進して退席せしが、恐懼の余り度を失ひ縁側より逆さまに落ちたり。

侍臣等覚えず失笑せしも、天皇は泰然として御顔の色だに変へさせ給はりざりき」（第二学年）

迪宮には、明治の最良の教育が施されたのだった。

皇太子にはこれが手頃だよ

——昭和二十一年　皇太子学習院初等科ご卒業時

昭和天皇は昭和二十一（一九四六）年三月に、皇太子が学習院初等科を卒業されたので、お祝いに写真機を贈ることを思いつかれた。

侍従に「市場にあるものは、闇値で高いことだろう。（宮内省）写真部に中古はないか」とたずねられた。

写真部から中古品を一つ取り寄せてお見せすると、手に取られて「これでよろしい。皇太子にはこれが手頃だよ。あまり立派なものや、高いものを与えては、将来のためにならない」といわれた。

天皇は皇太孫でいらしたときに、父・皇太子（後の大正天皇）から、学習院初等科入学のお祝いとして、やはり写真機を贈られていた。

昭和初年に木下道雄侍従は、天皇に書類の決裁をお願いするために御政務室にあがってご裁可いただいた後に、お机の上をみると小さな仏和辞典が置かれていた。もうボロボロに傷んでいた。

この時代までは、フランス語が外交用語となっていたから、御学問所時代からフランス語を学ばれていた。

木下が「陛下、その仏和辞典を新しいものにおかえしましょうか」とおたずねした。すると、天皇が「金はあるだろうか」と聞かれたので、「御座居ますとも」とお答えした。当時の皇室財産といえば膨大なものがあった。しかし、天皇はご自分のものの出費については几帳面であられた。

質素にお育て申し上ぐべきこと

昭和天皇は日常のご生活について質素であるべきことを旨とされていた。

昭和四十六年四月に宮内庁記者団と会見された際に、「幼少時代の思い出についてお聞かせください」という質問が出た。

天皇は学習院院長だった乃木大将から教えられたことを回想された。そして「大将は武人といわれているが、私たちに二回にわたって講演してくれた。一言の士であり、贅沢はいけ

ないことを教わり、質実剛健を学んだ」と述べられた。

乃木大将は、あの時代のほとんどの日本人がそうだったように、謹厳実直の人だった。

また、天皇は昭和五十七（一九八二）年九月に、那須御用邸で宮内庁記者団と会見されたときにも、乃木大将に教えられたことを振り返られた。

「乃木大将がつねにわたくしに言っていたことは、贅沢をしないようにということでありました。

その例を一つ申しますと、乃木院長が『どういうふうにして、初等科に通っているのですか』と訊きましたので、もう、当たりまえのことだと思って、『天気のよいときには、歩いて通っているけれども、雨のときは馬車で通う』と答えたのであります。

そうすると乃木院長は『雨のときでも、コートを着て、歩いて通うようにしなくちゃいけない』と、非常に強くいいました」

乃木大将は裕仁親王が学習院初等科に入学するのに当たって、明治天皇に請われて学習院院長に就任した。

乃木は院長として就任すると、皇太孫教育の六項目にわたる方針を定め、教員を集めてつぎのように指示した。

一、健康を第一と心得べきこと。

二、よろしからざる行状のあったとき、これを矯正申し上ぐるのに遠慮あるまじきこと。
三、成績については斟酌あるべからざること。
四、幼少より勤勉の習慣をつけ申すべきこと。
五、質素にお育て申し上ぐべきこと。
六、軍務につかせらるべきにつき、その指導に注意すること。

天皇は幼少時代に「院長閣下が、院長閣下が」とさかんにいわれて、乃木大将を尊敬された。

裕仁親王は相撲をとられるのを好まれたので、ズボンの膝や靴下によく穴があいた。そこで、そのつど新しいものとお取り替えした。

ところがある日、学校から帰られると、「院長閣下が、着物に穴のあいてるのを着ちゃいけないが、つぎのあたったのを着るのはちっとも恥じゃない、とおっしゃるから、穴の開いているのにつぎをあてろ」といわれた。つぎを当てると、「これでいいんだ」と満足して頷かれた。

熱海に避寒されていたときのこと。ある雪の降る日に、乃木大将がご機嫌伺いにやってきた。裕仁親王は火鉢にあたっていた。

すると乃木大将が「殿下、お寒いんでございますか。このようにお寒いときは火鉢にあた

るより、あの御運動場に行って駆けだしていらっしゃったらいかがですか。御運動場を二、三回走ってお周りになったら暖かくなります」と申し上げた。親王はその通りにした。

昭和二十八、九年に、天皇の外套の襟が破れていたので、女官長がそう申し上げると、「外に出るときは別だが、ふだんうちで往き来するときは、つぎをあてておけばよい」といわれた。襟につぎをおあてすると、天皇は皇居内をお歩きになるときに召されていた。

天皇が住居観について述べられたことがある。

昭和八年に、荒木貞夫陸軍大臣が「資本家が大きな家を建てるのは、その人の趣味の問題だから、かならずしも非難すべきことではない」と申し上げたのに対して、天皇はご自分の考えを述べられた。

「わたしは彼ら資本家が趣味のみによって、大きな家に住むというのは酷だと思う。あのフランスのルイ十六世は広大なベルサイユ宮殿があったのにもかかわらず、別に小さな宮殿をつくって、かえってそこを愛して住んだという。

わたしもこのような大きな宮殿に沢山の人を使って居住するよりも、簡素なところにあることを望む。しかし、明治大帝が造営遊ばされたこの宮殿以外に移るようなことは、無論できることではない。宗祖（明治天皇のこと）が建てられた宮殿が現存しているという事実、

その他の諸種の慣習ということによって制約されざるをえない。

要するに、他者の心理はわからないが、わたしの気持ちから推して、大きな邸宅に住むことを趣味とする者もいるかもしれないが、なかには質素なる生活を希望しながら、諸般の事情のために、父祖が設けた広大な家屋に留まらざるを得ない者もあろう」

おじじさま、これを拝見

——御皇孫時代

昭和天皇がもっとも尊敬されていた人物は、明治天皇と乃木希典大将の二人だった。

天皇は幼少時に迪宮（みちのみや）といわれたが、祖父・明治天皇にことさらに可愛がられた。明治天皇は無口な方だったが、迪宮に会われるといつもニコニコされて喜ばれた。

明治天皇はアユを好まれたが、アユの時期になると迪宮のもとにも届けさせた。木馬や、玩具をご自分で選ばれ、外国から取り寄せられたこともあったが、「これを皇孫へ」といわれて贈られた。

ほとんどの人が、明治天皇の御前に出ると緊張して何も申し上げられなくなったが、迪宮は物怖じすることがなかった。平気で「おじじさま、これを拝見」といわれて、置いてある物などを手にとったという。

昭和天皇が明治天皇を尊敬されておられたのは、何といっても、明治天皇が近代国家とし

て日本の礎を築かれたからだった。

昭和天皇は晩年にいたるまで、明治天皇が話題となると居住まいを正された。

天皇にとって明治天皇は絶対的な存在であり、鑑であった。

昭和六（一九三一）年に満州事変が起った。国内情勢が騒然となると、秩父宮雍仁親王は、憲法を停止して「親政」を施かれるよう天皇に対して言上した。

すると天皇は憤然とされて、「憲法の停止のごときは、明治大帝の創成せられたるところのものを破壊するものにして、断じて許されないことである」と、弟宮をたしなめられて強く反対された。

当時、秩父宮は陸軍大尉として、東京・麻布の歩兵三連隊で中隊長として勤務されていた。その後に歩兵三連隊の青年将校たちが反乱して、二・二六事件をひき起こした。

昭和二十年八月十四日の、終戦への最後の御聖断を下された御前会議で、天皇は「私は三国干渉の時の明治大帝の御決断に倣って、戦争をやめることを決意した」と述べられている。終戦の御聖断は、昭和天皇のご生涯におけるもっとも大きな決断だった。

三国干渉は、日本が日清戦争に勝って、清国の遼東半島を領有することになったのにもかかわらず、ロシア、フランス、ドイツが日本を威嚇して、清国へ返還することを強いたも

ので、日本国民を憤慨させた。その後、ロシアが清国から遼東半島を租借して軍事基地とした。

終戦後に、占領下で天皇の退位問題が取り沙汰されたときにも、明治天皇を引き合いに出されていた。

天皇は昭和四十年代はじめに当時のご心境を振り返られて、稲田周一侍従長にこう語られた。

「明治天皇は、大臣が辞職するのと違って、天皇は記紀に書かれている神勅を履行しなければならないから退位できないと仰せられたそうである。明治天皇の思召しは、もっともであろうと思う。

私の任務は祖先から受け継いだこの国を、子孫に伝えることである。私は明治天皇の思召しに鑑み、苦難に堪えて日本再建に尽くす決意であった」

記紀は、奈良時代に編纂された日本最古の歴史書である『古事記』と『日本書紀』を指している。記紀には日本神話が収められている。

昭和五十二（一九七七）年に宮内庁記者団と会見されたときに、昭和二十一年の『人間宣言』の冒頭にある明治天皇の『五箇条の御誓文』は、陛下のご希望で入れたと聞いておりますが、という質問がでた。

天皇は「(それが)あのときの詔勅の一番の目的で、神格とかそういうことは二の問題だった。(日本が)民主主義を採用したのは、明治大帝の思召しでした。しかも、神に誓われた。こうして『五箇条の御誓文』を発して、それがもととなって明治憲法ができた。民主主義はけっして輸入したものではない、ということを示す必要がありました」と述べられた。

乃木院長から学んだもの

天皇は終生にわたって乃木大将を慕われた。

天皇は、学習院初等科に通われたときに乃木院長から受けた訓育によってご自分がつくられたと、しばしば語られた。

宮内庁記者団とのご会見の席上でも、乃木院長について何回も触れている。

天皇は昭和五十年の訪米前に、アメリカの有力ニュース週刊誌『タイム』記者と会見されて、つぎのように語られた。

「私は多くの人々、とりわけ乃木将軍に深い影響を受けました。将軍は私が学習院に初めて進学したときの院長でした」と前置きされて、雨の日に登校するときには馬車によらず、コートを着て歩くように教えられたエピソードを披露された。

「このように将軍は非常に質素で、不屈の自律的生活を唱道されました。これは、私に深い

影響を与えました」

乃木大将は謹厳実直の人だった。

乃木大将が明治天皇のあとを追って自決したのは、大正元（一九一二）年九月のことだった。乃木はそれに先立ち迪宮を訪れた。

明治天皇が崩御されたのを受けて、大正天皇が皇位につかれ、迪宮は皇太子となられていた。

乃木大将は「きょうは、まず迪宮殿下に申し上げます。いまさら申し上げるまでもないことでありますが、皇太子となられました以上は、いっそうのご勉強をお願いいたします」と話しはじめて、殿下に諄々（じゅんじゅん）と注意すべき事項を申し上げた。

そのうえで、『中朝事実（ちゅうちょうじじつ）』に朱をいれたものを差し上げて「私がふだん愛読しております書物を殿下に差し上げたいと思いまして、ここに持って参りました。いまに御成長になったら、これをよくお読みになって頂きたい」とお願いした。

江戸時代初期の儒学者の山鹿素行（やまがそこう）（一六二二～八五年）による『中朝事実』は、皇室を中心とした日本の政治的伝統を説き明かしたものである。

乃木の態度がいつもと違っているのに気がつかれて、迪宮は「院長閣下はどっかへ行かれるのか」とお聞きになった。

すると、乃木が「いやぁ、私はただ今、おじじさまの御大葬について、英国のコンノート殿下の接伴（せっぱん）を仰せつかっております。それがために殿下に拝謁ができないと思いますから、きょう伺って申し上げました」と答えた。

この『中朝事実』は、乃木が写本したものだった。

昭和五十七年に宮内庁記者団と会見されたときにも、乃木大将に触れられた。

天皇は乃木院長から『中朝事実』を贈られたことを振り返られて、「乃木院長がしばらくして（明治天皇に）殉死したことを考えると、その気持ちがあったから、私にそういう本をくれたのではないかと思う」と述べられた。

十二円五十銭の国産品だけども

——昭和二年　名古屋地方御幸

昭和天皇は質素を旨とされた。

天皇は私生活における贅沢を好まれなかった。もっともお生まれから、見栄を張られる必要がなかったこともあろう。というよりも、これは歴代の天皇についていえることである。家系から発する生き方だった。

天皇は酒を飲まれなかったし、美食を好まれることもなかった。

天皇の料理番であった宮内庁大膳課の谷部金次郎氏によれば、「三食を規則正しく召し上がるだけ」で、「つねに腹八分を心がけていらっしゃり、暴飲暴食などという言葉はまったく無縁」でいらした。おやつをとられることもなかった。

衣類についても、飾ろうとされることがなかった。いつも背広を召されていたが、側近にすすめられて、公務の場で着られる洋服を新調されたものの、新調した服が傷まないように、

奥に入られると几帳面にすぐに古い背広に着替えられた。

入江相政侍従長によると、「これは国民の肩身を狭くしないためにつくった服だから、そういうときのために綺麗にとっておかなくては」というお考えだった。

メモを書かれるのも、真っ新な紙をお使いになられずに、使い古しの紙の裏を半分ぐらい切ってそこに書かれた。明治のご教育を受けられたから、すべてのものを大切にされた。

昭和のはじめ、陸軍大演習のため名古屋地方へ御幸された際、演習終了後に名古屋市内にある愛知時計電機の工場を視察された。その夜、三十名ばかりの地方の民間功労者を晩餐に招かれた。

時計が話題となった。すると陪食を賜った一人が、チョッキから金鎖を手繰り金時計を取りだし、得意げに「陛下、これは外国製で御座居ますが、実によく合います。国産のものはどうしても不正確で、まだまだとうてい外国製に及びません」と申し上げた。

天皇はそれを聞かれると、ご自分のズボンの右のポケットから懐中時計を取りだされた。

「わたしのこの時計は十二円五十銭の国産品だけどもよく合うよ」

と、みなに嬉しそうに示された。

この時計はお伴をしていた木下道雄侍従が、天皇にいわれて東京・銀座のシチズン時計店

から買ってきたものだったが、そのときに値段をご報告したのだった。

高価な外国製時計よりもはるかに安価だったが、天皇はお使いになって外国製に負けないことを喜ばれていた。

そのころはまだ、外国製は「上等舶来」といって、何であれ珍重されていた。

当時の内閣統計局の調査では、給料生活者と労働者の一世帯の月平均収入は百三十一円、借家住まいの家賃は給料取りが二十二円、労働者が十七円だった。サントリー・ウイスキーが一本四円五十銭だった。

天皇は国民生活に関心をいだかれていたから、その時々の物価にも通じていられた。

昭和五（一九三〇）年、静岡県へ御幸されたときに浜名湖に寄られた。「すっぽん、うなぎは何日でかえるか。うなぎ一貫目はいくばくか」と、白根竹介知事にたずねられた。

知事が「すっぽんは六十日でかえります。うなぎ一貫目はただ今の相場で四十二円であります」と奉答すると、頷かれて「四十二円では儲からぬだろう。このころは、上海からうなぎの子を取り寄せて養殖しているというが、どうか」と質問された。

針一本たりといえども無駄にしてはならない

天皇は政府や軍の予算についても、浪費を戒められた。

昭和九年、陸軍予算が議会を通過し、参謀総長と陸軍大臣が参内して天皇に報告した。天皇は参謀総長と陸相が上奏を終えると、まず、「これによって在満軍事力を強化することとなろうが、隣国に対して積極的な行動に出ることがなかろうか」と懸念を示された。そのうえで、「予算が通過したといっても、みな国民の負担である。針一本たりといえども、無駄にしてはならない」といわれた。

天皇は高価な献上品が届けられるのを、嫌われた。

入江相政侍従長の『入江日記』の昭和四十九（一九七四）年一月二十四日付に、「十時半というのが少し遅れて佐藤（榮作）前総理夫妻参内。金婚式のおよろこびはよかったが、あれだけことわっておいたのに、黒松の立派な盆栽を持ってきてしまった。お召しで来られた長官（宇佐美毅宮内庁長官）とも協議して、返すことにする」と記している。

佐藤首相は首相時代にも、皇后陛下に高価な反物を献上しようとして、やはり宇佐美長官によって断られたことがあった。宇佐美は申し出を拒むと、佐藤首相が「皇后様はもっとよいものをお召しになるべきだ」といったと回想している。

天皇は、もし高価な献上品を受け取れば際限がなくなるし、皇室経済法による規制を承知されていた。

占領下でアメリカが強制した日本国憲法のなかに、皇室の力を弱めようとして「第八条＝皇室に財産を譲り渡し、又は皇室が、財産を譲り受け、若しくは賜与することは、国会の議決に基かなければならない」という規定がある。やはり占領軍の指令によって皇室経済法が制定され、「譲受」（献上）の価格について、今日でも年間数百万円という制限が設けられている。もっとも、このなかに外国の元首などからの贈物は含まれていない。

歴代の天皇のなかで、昭和天皇だけが質素でいらっしゃったわけではない。

歴代の天皇のなかでは、十六代の仁徳天皇がよく知られている。『日本書紀』によれば、即位されると都を今日の大阪市中央区の難波高津宮（なにわたかつのみや）に移したが、皇居は屋根葺（ぶ）きの茅も切り揃えることがない簡素なものだった。

天皇が高殿（たかどの）に昇って眺められると、人家の竈から煙があがっていなかった。そのために三年間にわたって課税を止められたのは有名な話である。皇居の雨漏りを修理することもされず、宮中で衣類や履物を新調することを禁じて粗食に甘んじられた。

これは歴代の中国の皇帝や、朝鮮の国王が民衆の窮状に顧慮することをせずに、かならず贅に耽ったのと対照的である。

日本では天皇に限らず、江戸時代の支配階級となった武士をとっても、町人と違って質素

であることを重んじた。このようなことは世界の他の国では、まったくみられないことだった。

このように上層階級が節制したのは、日本の民俗信仰である神道が清浄さを崇高なものとみなして、尊んできたことから発していよう。衣食住の贅沢は清浄さに反する。

日本の美の基調として清浄さがある。天皇家は日本が発祥して以来、神道の宗家であってきた。

誰もいないよ！　誰もいないよ！

——入江侍従長の失敗をお喜びになる

あらゆる文明は、抑圧であるといわれている。

私たちは誰でも、日常決められたことによって縛られて、かなり窮屈な生活をしている。

そこで、私たちの周囲で思いがけずに規範から外れたことが起こると、笑うことによって癒される。

天皇はその地位から、日本でもっとも自由が束縛されておいでになる。

昭和天皇もそのようなことが起こると、しばしば闊達（かったつ）に笑われた。

戦後の地方御巡幸として、昭和二十五（一九五〇）年三月に愛媛県に入られた。その際、宇和島で老舗（しにせ）のつたや温泉旅館に宿泊された。

天皇は到着されると、晩食をとられた。天皇はお風呂をもともと、お好みにならない。

この日は、ご自分がお風呂にお入りにならないから、侍医と侍従に入るようにいわれた。

このようなことは、宮中では「おすべり」といって、天皇から側近者へ下賜される、身につけられた衣類や食物をこう呼ぶが、地方に出るとお風呂もそれに当たった。

侍医の小島憲と侍医長の西野重孝が、喜んで浴場へ急いだ。ところが、二人が裸になって、浴槽に身を沈めたとたんに湯が抜けはじめ、みるみるうちに空になってしまった。

二人はあっけにとられたが、わけもわからず仕方なく浴場を出た。

あとでわかったが、県や町の有力者が、陛下が入浴されたあとで交替してそのお湯に入ることを決めて、全員がすぐ近くの部屋でモーニングに身を正して順番を待っていたのだった。

ところが、見知らぬ随行者たちが風呂に入ったので、腹を立てて湯を抜いてしまったのだ。浴槽は浴室の外から栓を抜くことができる構造になっていた。

天皇のお泊まりが確定したときから、有力者たちは残り湯を頂戴することを話し合い、万一、陛下が栓をお抜きになられないように、外からしか抜けないようにつくってあった。

天皇はその直後に二人から話を聞かれて、二人の姿を想像されて、大喜びされ笑われた。

そして、このときのことを、かなり長いあいだにわたって思い出されて笑われた。

私は高松宮宣仁親王殿下から、戦後、殿下が地方へお出かけになると、「民衆のあいだから、現金を紙で包んだお捻(ひね)りが、よく飛んできたものだったね」と伺ったことがある。

当時は、皇族がたが高僧と同じ扱いを受けていたのだった。

日本には戦後になってもかなりの期間にわたって、貴人や高僧が入った風呂につかると福運がつくという、「残り湯信仰」があった。

次も、入江侍従長から聞いた話である。

あるとき、陛下が新宮殿で拝謁を賜ることになっていた。ところが、大広間に時間を誤ってご案内してしまった。

陛下を先導してなかに入ると、時間を誤っていたため、広間には誰一人おらず、がらんとしていた。

陛下は大喜びされて、「誰もいないよ！　誰もいないよ！」と大声で仰言って、楽しそうにお笑いになった。

ユーモアを愛された天皇

昭和五十七（一九八二）年五月の赤坂御苑での園遊会で、天皇は柔道の山下泰裕（やすひろ）選手にお声をかけられた。

山下選手は前年の世界選手権で二階級優勝と、全日本選手権で未曾有の九連覇を果してい

た。

天皇は「ずいぶん一所懸命やっているようだが、ホネがおれることだろうね」とおたずねになった。

山下がとっさに骨折について聞かれたと勘違いして、「二年前に骨折しました」と答えたので、周囲からどっと笑い声が起こった。天皇も会話が擦れ違ったことにすぐに気づかれてお笑いになった。

山下が急いで「現在は体調がよく、頑張っています」とつけ加えると、天皇は満足されて大きく頷かれた。

日本は天災が多い国である。天皇はそのたびに災害地の人々について心配された。奄美大島を大型台風が通過したときにも、天皇は朝から刻々と入る情報を聞かれた。

そして、侍従に独り言のように「島の小学校はどうだろうか？　子どもたちに怪我がなければいいが」と真剣なお声でいわれた。

侍従はいい加減な返事をすることもできず、一瞬、戸惑ったところ、天皇が突然、明るい表情を浮かべられて、突拍子もない大声で叫ばれた。

「そうだ！　今日は日曜日だ！　それに今は夏休みなのだ。学校は休みなのだ」

そして、照れたように含み笑いをされた。

王者は東西を問わず、しばしば笑いの対象となる。一挙一動が堅苦しい儀礼によって律されているから、意外なことが起こると人々の笑いを誘う。

私はある講演のあとの懇親会で、東海汽船の社長と話したことがあった。

天皇が東海汽船の客船で、伊豆大島へ行幸されたということだった。

社長がモーニングに威儀を正してお迎えし、船が外洋に出た後に、畏(かしこ)まって操舵(そうだ)室にご案内した。船長以下白手袋をして、緊張してお待ちしていた。

社長が大島航路についてご説明をはじめた。そして「このあたりの海域には、イルカがときどきでることがございます」と申し上げた。

すると、陛下はお首を伸ばされて、海面をご覧になった。

そして、一言(ひとこと)鋭く「いるか！」と仰言った。

もし、陛下がユーモアとして仰せられたのならば、笑わなければ礼を失することになる。しかし、たんに「いるのか」という意味でいわれたのだったとしたら、笑ってはならない。

社長も船長以下操舵室にいた者も、笑うべきなのか、笑ってはならないのか、全員が四苦八苦したとのことだった。

これは病気であるか？

——昭和二十年　はじめて泥酔者をご覧になって

昭和天皇は下戸であられた。

外国から国賓を迎えた宮中晩餐会で乾杯されるときには、口をおつけになるだけで、ほとんどお飲みにならなかった。

というよりも、お飲みになれなかった、というほうが正しい。アルコールを受けつけないご体質だった。

もっとも、明治天皇は大酒飲みでいらした。侍臣と夜遅くまで高い声で談じられ、大いにお酒を楽しまれた。

お后の昭憲皇太后（皇后）が「花の春紅葉の秋の盃も　ほどほどにこそ汲ままほしけれ」と詠まれて、お諫めしたほどだった。昭憲皇太后も慎み深く、蔭の内助に専心された。

大正天皇は酒を適度に嗜まれた。皇太子時代に自転車に乗られて、東京の街を自由に走り

まわられた。ワインを一本提げて朝香宮のところに、ひょいと遊びに行かれたというエピソードがあるほどだ。明治はそのような時代だった。

庶民も酒瓶一本提げて、友人を訪ねたものだった。皇族のありかたも、その時代時代の社会のありかたによって変わってゆくものである。

昭和天皇は昭和二十二（一九四七）年に兵庫県を巡幸されたとき、〈灘の生一本〉で知られる嘉納酒造会社（白鶴酒造）を視察された。

天皇はご案内役の嘉納治郎右衛門から、利酒のコップを手渡されると、「自分はダメだ」と仰言った。

手にされたコップを、お供していた松平慶民宮内府長官に、すぐに差しだされた。

「自分はにおいをかいだだけでもダメだ。君はいけるのだろう、飲んでごらん」

そして照れて恐縮する松平長官をご覧になり、愉快そうに笑われた。

昭和天皇と酒談義

昭和五十一（一九七六）年に那須御用邸で宮内庁記者団と会見されたときに、珍しいことだったが酒談義が交わされた。

記者が「陛下、今はお酒をぜんぜんお召しあがりにならないという話なんですけれど、何かお聞きした話では、正月にお屠蘇を飲み過ぎて、二日酔いになったとかですね。あるいは雛祭りの白酒を、女官さんから勧められて飲み過ぎて、三日酔いになったとかということを伺っているわけですが、真相はいかがでしょうか」とおたずねした。

天皇は「その女官のことは間違い。うそです」といって笑われた。

「その正月のね、酒に酔って困って寝正月をしたというのはむしろ、ええ、小児科の医者から勧められたんです。どうもあのころは、少し乱暴と言っちゃなんだけど、あの酒好きな人が多かった」と答えられ、また愉快そうに笑われた。

さらに「陛下、何歳ごろのことでしたか」と問われて、「ええ、それは五つかそこらに」とまた笑われた。

天皇から酒の話を記者団がうかがうのは、それまでなかったことだったので、「国賓を迎える晩餐会なんかでも、ちょっとお口をおつけになるだけでございますか」という質問が続いた。

天皇が「ええ、ちょっとひと口くらいはね。そういう時は飲むけど、やむを得ないから」と答えられた。

記者が「陛下、ちょっとお飲みになられるわけですね」と、合いの手を入れた。

そして天皇が「ええ、そう。だって、それからまた儀式の時にね」といわれ、「あの、新嘗祭なんか」と記者がおたずねした。「ええ、そういう時は、ちょっと口をつける」と答えられた。

記者が「そういう時は、二日酔いはされないんですか」といい、天皇が「ええ、ちょっとなら」と頷かれるやりとりが続いた。

宮中三殿で行われる大祭である新嘗祭と、天皇の即位に当たって催される大嘗祭では、神前に古代のままの酒である白酒（しらき）と黒酒（くろき）が供される。白い濁酒と、あまざけにクサギの灰を加えた黒い酒である。食器には葉と、箸の原型であるピンセット状の竹が用いられる。宮中三殿で行われる神事には古代の日本が息づいている。

アメリカのレーガン大統領が国賓として来日して、宮中晩餐会が終わったあとで、陛下、大統領、ナンシー夫人、皇太子殿下、妃殿下だけで懇談したときに酒談義が行われた。

天皇が晩餐会でシャンペン・グラスに口をつけられただけだったので、レーガン大統領から「陛下はお酒をまったく召しあがらないのですか」とたずねられた。

「ええ。しかし、私の祖父（明治天皇）はたいへんな大酒飲みでした」と答えられた。

「そうでしたか。第十八代のグラント大統領が酒で失敗したので有名です。ヘビードリンカ

ーでしたが、バーボンを飲みすぎたあげく、みんなが心配して、大統領を辞めてもらいました。グラント大統領は日本にも来ていますが、どうだったのでしょうか」

天皇が「祖父とずいぶん飲まれたようでした」と答えられた。

グラント大統領は南北戦争の名将だったが、明治十二（一八七九）年に前大統領として日本を訪れて明治天皇から歓待された。

レーガン大統領の父親は貧しく、靴の訪問セールスによって家族を養っていたが、大酒飲みだった。しばしば酔い潰れて玄関前の雪のなかに倒れているのを、少年時代のレーガンが家のなかに引きずり込んだと、自伝のなかで回想している。

昭和天皇は先の大戦中に防空舎だった手狭な御文庫でお暮しになるまで、泥酔した人間をご覧になったことがなかった。

天皇は御文庫では一日の政務のあとで、侍従や侍従武官などの控え室である常侍官候所にしばしば立ち寄られて、雑談するのを楽しまれた。

あるとき、侍医の一人が泥酔して長椅子に横たわって、大鼾（いびき）をかいて寝ているところをご覧になられた。

そして、お顔を曇らせて「これは病気であるか?」とおたずねになった。

侍医は天覧――陛下がご覧になっている――とは、夢にも想わず、高鼾をかいて眼をさまさなかった。

当直の侍従が「いえ、ただ酔っ払っているだけでありますから、さめれば平常に戻ります」とご説明した。

天皇は「そうか。それならよいが、酒に酔うと、こんなになってしまうのか」と仰言って、珍しいものを見たように感心された。

もし平和が続いたとしたら、一度も酔っ払いをご覧になることがなかったかもしれない。

いうまでもないではないか。国会議事堂だよ

——昭和天皇の機知とユーモア

昭和天皇は生真面目でいらっしゃったが、機知とユーモアも豊かに備えられていた。また、宮中の窮屈な環境のなかでお育ちになったのにもかかわらず、自由闊達な精神をお持ちだった。さらに、歴代の天皇が無私を旨とされていたことから、陛下もものごとの本質を見抜く力を備えられていたのだろう。

だから、英米をはじめとする立憲君主国を好まれて、全体主義国が性に合われなかったのも、全体主義国が過激なだけではなく生真面目一点張りで、社会がユーモアを欠いてゆとりがまったくなかったからだったろうと思う。

昭和天皇が野鳥や草木や自然を愛されていたという逸話は、じつに多くを数える。天皇はことさらに植物や動物を好まれた。明治憲法のもとで国政と軍事の総攬者として、

日頃から臣下の狡さや弱さを見抜いておられたからだったろう。

天皇は田村元運輸相が参内したときに、「（天皇がかつて）雑草という草はないといわれたのに感動いたしました」と申し上げたところ、こういわれた。

「そんなに感動されても恥ずかしいが、ただ、雑草というのは人間のエゴからつけている呼び名である。かわいそうだよね。猛獣という言葉もあるけど、ライオンやトラから見たら、一番の猛獣は人間かもしれないね」

天皇はご散歩中にしばしば皇居のお濠の土手にあがられて、お濠の外をご覧になった。

昭和五十五（一九八〇）年に、衆参両院議長、副議長など、議会の幹部をお茶の会に招かれた。

そのときに、秋山長造参院副議長が「陛下は宮城のなかを散歩されるそうですが、お濠の上におあがりになりますか」とご質問した。秋山副議長は社会党だった。

「しょっちゅう、あがってるよ」

「都内をご覧になられるのですか」

「都内をよく見ているよ」

「どういうことに、もっともご関心がおありですか」

「いうまでもないではないか。国会議事堂だよ」

といわれて、愉快そうに高笑いされた。

今も当時も変わらないが、国会が不毛な政争に明け暮れしているのを、おからかいになったのだった。

天皇は常識家で生物学者でいらしたから、過激なことを嫌われた。

昭和二十二（一九四七）年に、占領下で片山哲内閣が成立すると、天皇は木下道雄侍従次長を召されて、片山首相へ「わたしの信条」として、つぎのようなお考えを伝えるように指示された。

「物事を改革するには、おのずから緩急の順序がある。かの振り子が滑らかに動くのは、これを静かに動かす結果である。急激にこれを動かせばかならず狂ってしまおう。

この振り子の原理は、わたしが深くつねに留意しているところである。改革しても反動が起こるようでは困る」

記憶力とウィット

天皇皇后両陛下が昭和四十六年のヨーロッパご訪問の際、パリのフォンテーヌブローの森

にお出かけになった。ところが、池の鯉がなかなか姿をみせなかった。

すると天皇は、「きょうは日曜日なので、鯉がでてこないんだな」と仰言った。

また、両陛下が昭和五十年にアメリカをご訪問されたとき、カリフォルニア州のディズニーランドを御幸啓された。居合わせたアメリカの子どもたちとも交歓されて、大いに楽しまれた。

天皇はこのときにミッキーマウスがあしらわれた腕時計を贈られたが、帰国後にこの土産（みやげ）の時計を腕にはめられた。当時のニューヨーク・タイムズのヘンリー・スコット・ストークス東京支局長は、天皇がミッキー時計を愛用されているという記事を、ニューヨークの本社に送った。ところが本社の編集部は、天皇がまさかマンガの時計をはめられるような、威厳を傷つけることをされるはずがないと思って、ボツにしてしまった。

昭和天皇はこのような茶目っ気を、お持ちになられていた。

御訪米されたときにお迎えしたのが、ジェラルド・フォード大統領だった。

両陛下は、ワシントンのホワイトハウスと向き合った、迎賓館のブレアハウスに泊まられた。フォード大統領が両陛下をブレアハウスに訪ねて、予定時間よりも長く歓談された。

両陛下は翌日にアメリカの国民的スポーツであるアメリカン・フットボールをご覧になることになっていた。そこで、フットボール談義となった。

フォード大統領が「スポーツのゲームを（大統領として）観覧しますときには、どちらのチームを応援することもできないので困ります」と申し上げた。

すると、天皇があいづちを打たれて、「とくに明日、あなたが出場されていたら、困りますね」とすかさず答えられた。

天皇はフォード大統領が大学生時代にアメリカン・フットボールの名選手として鳴らしていたことを、知っておられたのだった。

私はフォード大統領と個人的に親しかったが、この話はフォード大統領から直接に聞いたものである。

フォード大統領は昭和四十九年に国賓として訪日したときにはじめて天皇と会ったが、天皇の真摯なお人柄にすっかり惚れ込んでしまっていた。

このときに大統領が、学生時代にアメリカン・フットボールの選手をしていたと申し上げたのを憶えておられたのだった。

昭和天皇のお人柄によって、深く魅せられた外国の元首や政治家は多かった。ガンジー翁、シュバイツァー博士やマザー・テレサと並ぶような、品格を備えておられたのだった。

昭和天皇は日本が原初時代から長い歴史を通じて創りあげた、傑作であったといえよう。

ゴルフというものは、落着きをつくるにはまことによい

——昭和天皇のスポーツ観

昭和天皇は相撲、水泳、馬術、スキー、ゴルフ、テニス、卓球、キャッチボール、ビリヤード、バドミントンというように、スポーツはほとんどのことをなさった。「スケート以外は、たいていのものをやった。しかし、浅く広くだったから、みなものにならなかった」と苦笑いされたことがあった。

天皇はご生涯を通じて、相撲好きであられた。

ご幼少のころから、皇孫御所の二部屋をあてた幼稚園や学習院初等科で、御学友たちとよく相撲をとられた。押し相撲一本だった。

青年時代に皇太子としてヨーロッパへお渡りになられたときに、お召し艦『香取』の酷熱の甲板で、毎日のように相撲をとられた。

お相手をする者が遠慮して、力を加減したためにいつも殿下が勝った。

すると、若い硬骨漢だった西園寺八郎式部官がそれをみて、殿下のためにならないと考えてお相手をした。西園寺は手加減をせずに、殿下をこっぴどくマットの外に投げ飛ばした。それでも殿下は挑んでゆかれ、そのたびになぎ倒された。

戦前は、お誕生日には御所、五月二十七日の海軍記念日には芝の水交社（海軍将校クラブ）に力士をよんで、相撲をご観覧された。大正十四（一九二五）年のお誕生日に、摂政として相撲協会に賜金を贈り、協会が優勝賜杯をつくった。

戦後の昭和三十（一九五五）年に、蔵前国技館においてはじめて大相撲を観戦された。このときに「久しくも見ざりし相撲ひとびとと　手をたたきつつ見るがたのしさ」と御製を詠まれた。

崩御されるまで四十回、国技館に行幸された。そして、貴賓席から身を乗り出されるようにして観戦された。先の御製は両国国技館の敷地に、歌碑となって立っている。

馬術は軍の最高指揮官となられるために、軍務として身におつけにならねばならなかった。そのために、小学生のころから馴染まれた。馬術は騎兵将校に負けず、障碍越しも颯爽とされた。当時の日本陸軍は、馬か徒歩によって移動した。

ゴルフも、御即位後吹上御苑に、九ホールのコースがつくられた。新宿御苑の西洋庭園にも九ホールのコースがあって楽しまれた。新宿御苑は昭和二十四年に下賜されて国民公園となった。

天皇のハンディは二〇だった。だが日中戦争が勃発すると、ゴルフを時勢にそぐわないものとして、昭和十二年におやめになられた。〈西洋かぶれ〉のスポーツに興じておられると、軍が批判するのを懸念されたのだった。このために、吹上御苑にあったコースは自然のままに草木が茂るようになった。

水泳は、日本古式泳法だった。立泳ぎもお得意で、扇や板を左手に持たれて、筆でお名前を書くことがおできになった。葉山御用邸においでになられると海に入って泳がれた。

テニスも好まれた。皇太子時代にはじめられたが、ご結婚後は良子（ながこ）妃殿下とご一緒に日課のように興じられた。

スキーは、当時の東京は今よりも雪が多かったから、吹上御苑のスロープを利用して、皇族や侍従たちと滑られた。

昭和天皇の侍従採用条件とは？

天皇はスポーツには効用があるとお考えになられた。大正時代に宮内大臣、昭和元（一九

二六）年から昭和十年にかけて内大臣をつとめた長老の牧野伸顕に、ゴルフとテニスについてこう語られている。

「どうもゴルフというものは、落着きをつくるにはまことによい。あのクラブで球を打つときには、どうしても無心にならなければうまくいかない。

テニスはまた敏捷になるためにたいへんよい。頭を敏捷に働かせ、身体を敏活に動かさなければよい成績をえられない」

天皇は壮健なお体をお持ちだった。風邪を召されることがあっても、晩年まで大病を患われることがなかった。

昭和天皇の侍従を採用するのにあたっては、とくに試験はなかった。だが、「船酔いをしないか」「山歩きに自信があるか」という二つの条件があった。

というのは、船酔いについては、天皇が葉山御用邸に滞在されるときに、海洋生物のご研究のために相模湾へ繰り出されたが、小型の船がよく揺れたからである。

また、天皇は山歩きを好まれた。那須御用邸でお過ごしになるときには、自然をこよなく愛されたから、侍従を連れて朝日岳とか沼原とか八溝山地で植物を観察されながら、長時間をかけて山道を歩かれるのを楽しまれた。しばしば皇后もお伴された。

天皇は健脚でお足が速かった。山歩きをされるあいだ、あるいはその後に、「疲れた」と

いうお言葉を、側近者のなかで聞いた者はいない。日常のご生活について不平不満を口にされることはけっしてなかったが、疲れたご様子もおみせになったことがなかった。

天皇は忍耐強くあられた。学習院院長だった乃木希典大将をご生涯にわたって尊敬された天皇は、乃木院長から「上に立つ者は、下の者に対して感情を露わにしたり、表情を変えてはならない」と教えられたからだった。

天皇は昭和四十七（一九七二）年に生物学御研究所が編纂して、『那須の植物誌』というご著書を刊行された。

天皇はその序文に、つぎのようにお書きになっている。

「那須の生きた自然に親しみながら、今年の夏もまた、私は植物の観察を続け、いくつかの新しい事実を本書に書き加えることができた。動物や植物が、いつまでも静穏な環境の中で、その生を営むことができるように祈ってやまない」

動植物がいつまでも静穏な環境のなかで、その生を営むようにといわれたのは、平和を念願されたお人柄がよく表れている。

このあたりにも、日本とヨーロッパの皇室の違いがある。

ヨーロッパの王侯が、馬や犬をことさら好むのは、狩猟のためである。イギリスでは猟は

「ブラッド・スポーツ」（血のスポーツ）と呼ばれるが、イギリスの王族は成年に達するときには、自分の手で牡鹿を仕留めなければならない。

エリザベス女王は十八歳になられたときに、ご自分で牡鹿を射とめられたが、いまでもそのときの歓びを語られている。そして射とめたあとに、牡鹿の血に両手を浸して、その血を顔に塗られる「ブラッディング」という所作を行われている。

チャールズ皇太子の長男のウイリアム王子も、牡鹿を仕留められたあとで、誇らしげにブラッディングを行われたことが慶事として、イギリスのマスコミによって報じられた。

キリスト教の狩猟民族の国々は、剣をもって世界にわたって有色人種を支配した。

日本の皇室とヨーロッパの王室は、そのなりたちが異なっているのだ。

日本と西洋における王のありかたは、それぞれの文化における神のありかたに似ている。ユダヤ・キリスト教の神は能動的で人々に干渉する。日本の神々は自然のなかに鎮まっている。天皇も鎮まっておられるから、国民としてご心配をおかけしないように正しく生きることが求められる。

日本の皇室はつねに平和を願って神事につとめ、自然を愛でて詩歌をつくり、覇権を求めることがなかった。

可哀想な事をした

——昭和九年　献上された丹頂鶴をご覧になって

天皇は生物学のご研究に没頭されているときに、心をお癒しになられた。

天皇はことさら植物や生物の話を好まれた。国内の行幸や海外でのご案内役をつとめた知事や大使から、陛下のお目にとまった植物の名について御下問があって、お答えできなかったために戸惑ったという話を、私は数多く聞いた。

私が司会役をつとめた座談会で、高松宮宣仁親王殿下に「陛下（昭和天皇）とお会いになって、昔の思い出話をなさるようなことはございますか」と、おたずねしたことがあった。

このときは、秩父宮勢津子妃殿下と、三笠宮家の寛仁親王殿下もご参加くださった。

その座談会からそのまま転載したい。

高松宮「ないわねえ」

――ではどういうようなお話を……

高松宮「もうこの頃、政治の問題がないからね。陛下のもっていらっしゃる話ったら、生物学の話だから、そうなるとこっちは全然知識皆無だからね。

私たちが花の話したって、私たちのいう花の名前と、陛下のおっしゃる学問的な名前じゃ、同じ花についてだって違うんだからね、話にならんよ」

秩父宮妃「私なんかもご注意いただいたことがございます。御殿場の時代、陛下のところへたまにご機嫌うかがいにみんなでうかがうとき、御殿場にはいろんな野草があるでしょう、それで陛下が、『いま何が咲いている』っておっしゃるので、『いまはもうさびしくなりまして、残っているのは野菊ぐらいなものでございますね』と申し上げるでしょう。

そうすると、『野菊といったっていろいろある。ただ野菊だけじゃわからない』って、おっしゃるの（笑）。それから発奮して、おかげさまでだいぶ種類の名前を覚えましたけれど。

それから春は、かわいらしい花がたくさん咲きますから、いろいろ申し上げると、陛下はたいへんお喜び遊ばして、まぁお話がはずむわけよ。そうするとこっちから（高松宮を指して）私をおつつきになるばかりにして、もういいかげんにそのへんでやめないとボロが出るよ（笑）、全くそれはおっしゃる通りの結果になるわけね」

高松宮「結局、陛下のお話は花なら花の種があって、属があって、科があってというふう

にいろいろ分類があるでしょう、そこのおしまいまでいかなきゃ、話が尽きないわけよね」

寛仁親王「伯父様、ハイドロゾアのヒトデがどうのこうのって、この間おっしゃってたじゃない」

秩父宮妃「そうそう、宮様も案外ご存じなのね」

高松宮「イソギンチャクっていう代名詞でヒドロゾアを、僕は表現するわけよ。ところがイソギンチャクじゃ、陛下のほうはお話にならんわけよ。もっとこまかい分類があるわけね。その分類までも、ぼくらがタッチしていったらきりがない」

「父（鷹司信輔）と一緒に参内した時などは、生物にお精しい陛下のこととて、父とは鳥のお話ばかり。『このごろは何か飼っているか?』とか、『御所のおしどりの子がかえった』とか『近頃は皇居内のきじが、大そう肥えた』とか、そう云う話題の時の陛下は、実にお楽しそうである」

昭和天皇についてこのように記した鷹司平通氏は、昭和天皇第三皇女である孝宮和子内親王の夫君であり、父親の鷹司信輔元貴族院議員は、秩父宮、高松宮の皇子傅育官であり、著名な鳥類学者であった。記述はさらに続く。

「生物では、動物園を経営しておられる池田さん（隆政氏。昭和天皇の第四皇女の順宮厚子内

親王の夫君）は勿論のこと、東久邇（信彦氏、昭和天皇の第一皇女の照宮成子内親王と東久邇宮盛厚親王の子）の兄上も、犬や熱帯魚などお好きで飼っておられるので、そう云った話題には豊富で、陛下とのお話もはずむ。

そこへ行くと、私は全然駄目。二、三年前（略）（アメリカから）帰国して御挨拶に上った折に、『（略）翌日着いたハワイは、正に常夏の国で、美しい花が沢山咲いておりました』と申し上げると、『たとえば何と云う花ですか?』との御質問に『名前を知りませんので、やがて撮って参りましたカラースライドが出来ましたら、それでお目にかけます』としか、お答えできなかった有様である。

いつだったか、初夏の頃、お夕食後、御文庫の近くのお庭を、あちこち案内して下さった折にも、道ばたの草を指さして、あれは何、これは何、と教えて下さったけれども、植物には一向に暗い私には、覚えようとしても悲しいかな、左の耳から右へ通り抜けてしまう式で、何とも致し方なかった。

植物に限らず、動物のことでも、東久邇の姉上が質問をなさると、図鑑を取り出して、くわしく説明して下さる陛下である」

また、幼年時代にご養育に当たった足立たか女官は、つぎのように回想している。

「生物学の御研究のことについて申しますと、学習院の先生でたいへん理科をお勧めになっ

た方がございまして、一番私どもがよく覚えていますのは、伊香保（いかほ）の御用邸の時分からいろいろ何かを集めて御採集になりました。

御自分で網を持たれましてね。それに、沼津においでになり、葉山においでになりますから、自然に貝を御採集遊ばされまして、これに名前を付けるということでいろいろ遊ばしておいでになったんですが、あのころからやっぱりそういうことがお好きだったんでございましょう」

こよなく生物を愛された天皇

天皇は昭和二十二（一九四七）年に宮内府記者団から、「どのような書籍をお読みですか」と質問されて、「やっぱり生物学の本、つづいて歴史の本を読んでいる」と答えられた。

秩父宮が昭和十二年に、イギリスのジョージ六世戴冠式に参列されるために渡欧されたときに、天皇に「何か御註文の品はございますか」とうかがったところ、「生物学御研究に関する文献の名を御列挙」になった。「僕には何だか一向見当のつかぬ」専門書ばかりで、「あちらの学者にきく外になかった」ので苦労したと語っておられる。

昭和天皇は生物学に趣味として打ち込まれたというよりも、一人の生物学者として大きな

実績をのこされた。

採集をつづけておられるうちに、ご自分で発見した新属、新種、新亜種は、分生菌、変形菌、藻類、ヒドロゾア、クダクラゲ類、真正クラゲ類、サンゴ虫類、クシクラゲ類、紐形動物、線虫類、橈脚類、蔓脚類、タイナス類、十脚類、クモ類、ウミグモ類、昆虫類、原軟体類、斧足類、腹足類、後鰓類、ヒトデ類、原索動物、魚類にわたって二百種以上にのぼっている。

昭和天皇が生物を愛されたという逸話は多くて、枚挙にいとまがない。

昭和九年に、当時日本の統治下にあった朝鮮に在住していた予備役将官から、皇太子殿下のお誕生祝いとして、猟でとれた雌雄一対の丹頂鶴が献上された。

天皇はお顔を曇らせて「可哀想な事をした。なぜ、かかる保護鳥を射殺せしか。自分は食せぬから、しかるべく処分せよ」といわれた。

天皇は昭和三十六年に、「有明海の干拓を憂へて」という詞書をつけられて、「めづらしき海蝸牛も海茸も　ほろびゆく日のなかれといのる」と詠まれた。

良宮にはどうする？

——昭和六十二年　手術ご裁可の後

昭和天皇は良子（ながこ）皇后とご夫婦仲が睦まじかった。

日本で模範的な夫婦でいらした。天皇はいつも皇后を、やさしく「良宮（ながみや）」と呼ばれた。

昭和四十八（一九七三）年は、ご結婚五十年の前の年に当たった。

宮内庁記者団と会見されたときに、「御夫婦円満の秘訣がございましたら、お話しいただけませんか」という質問が出た。

天皇は「どういうことを秘訣というのかわかりませんが、古来からの道徳を守って終始協調の精神を守ったのが、円満の秘訣といえば秘訣です」と答えられた。

天皇は偉大な常識家でいらっしゃった。

また、「来年一月二十六日は金婚式を迎えられますが、御感想を」と求められた。

天皇は「いつの間にかそんな時期になって、恥かしい気がする。ふたりとも健康にその日

が迎えられ感慨深いです」といわれた。

昭和天皇がはじめて良子皇后に会われたのは、皇孫殿下であられたときだった。

良子皇后は久邇宮邦彦王の第一女子として、明治三十六（一九〇三）年にお生まれになった。昭和天皇よりも二歳年下だった。

昭和天皇の皇孫時代に皇孫御殿の御用掛としてお仕えした足立たか女官は、お二人がはじめて出会った経緯をつぎのように回想している。

「ちょうどそのころ、華族女学校の幼稚園がございまして、あそこに野口幽香子さんという先生がおいでになりました。この方が幼稚園のほうの主任でございまして、（迪宮が）よく幼稚園へお遊びにおいでになったんでございます。

その幼稚園に今の皇后さまと皇后さまのお妹御さまがおいでになりまして、お昼食を頂く時は、こちら側には迪宮さまと、淳宮さま、あちら側には今の皇后さまとお妹御さま、というように並んでお弁当を召し上がる。

お上のほうはニコニコ笑ってごらんになりますが、淳宮さまのほうはちょっと行っておいたをされる。お二方（迪宮と良子女王）はニコリニコリ遊ばしておいでになりましたが、その時分、幽香さんが『このお二方は、将来、御縁組でも出来そうに思える』ということを言

っておいでになりました。

まだ、幼稚園にいらした時ですから、われわれはそんなことがあるかしらんと思いましたが、のちになると皇后さまにおなりになりまして、お幽香さんあたりには、一種の霊感があったんでございましょう」

昭和天皇は晩年、「たかはお母さまのように、わたしたちの面倒をみてくれました」といわれている。

天皇は皇太子でありながら、二十歳で摂政となられた。その二年後に良子女王と結婚されることが決まっていたが、関東大震災が起こったために、翌年に延期された。

大正十三（一九二四）年一月に結婚の儀が皇居の賢所であげられ、赤坂離宮（現在の赤坂迎賓館）がご新居となった。新婚旅行的なものとして、その年の夏に福島県猪苗代町の高松宮翁島別邸にご滞在になった。

昭和五十一年に那須御用邸で、天皇、皇后がお揃いで宮内庁記者団と会見されたときに、記者が「陛下、今日お召しになっている背広、たいへん、センスがよろしいですね。皇后さまがお見立てになるのですか」とおたずねした。

すると、天皇が「ええ、まあ……」とはにかまれ、皇后がそれを受けて「いいや……」と

仰言って、お二人で愉快そうに珍しく大声をあげて笑われた。

記者がさらに、「ヨーロッパへいらっしゃってから、陛下のネクタイが赤くなったり、グレーの明るい上着を召されたりと、非常になんか、おしゃれになっていらっしゃるんですね。その原因はどこにあるんだろうと思いましてね。どの辺でしょう。陛下のご趣味ですか」とつづけた。

天皇は「いいえ、私よりも主として、まあ、良宮が決めるんですけど。ええ」と答えられた。

記者が皇后に「こう、若返っていただこうというわけなんですか」とうかがった。

皇后に「別に意味はないんですけど」とはぐらかされておしゃれ談義が終わった。

お互いを思い遣られた理想のご夫婦

皇后は天皇のよき伴侶でいられた。笑みを絶やすことなく、つねに控え目に振る舞われて、夫をお立てになった。お二人が訪米された前年の記者会見では、「(天皇と)御一緒に(アメリカに)お邪魔して」「いつもお供して」などといわれた。

天皇は皇居の庭や、御用邸へお出かけになると、丘陵を散策されるのを楽しまれた。そういうときには、皇后とご一緒だった。御用邸のご散策のときには、お弁当を持たれて五時間

もお歩きになられることもあった。

戦時下で戦況が不利になると、天皇が懊悩（おうのう）されるようになったが、皇后は夜、天皇を誘われて、侍従や侍従武官を集めて、賑やかにかるた会を催すなどして天皇を慰められた。

天皇が植物や鳥類を好まれたことはよく知られているが、皇后も植物図鑑や鳥類図鑑をしばしばご一緒にご覧になった。

あるときの昼さがりに、天皇は入江相政侍従に「ヤツガシラが来ている。見にこないか」と電話で誘われた。入江侍従はヤツガシラというと芋のことかと訝ったものの、鳥が飛び去ってはならないので、いつもの時間帯なら御食堂にまだおいでだと思って駆けつけた。

すると陛下はもうおいでにならず、皇后が開かれた鳥類図鑑のページをさして、「いままでそこにいました。この鳥よ」といわれて、その鳥の絵をお指しになった。

冠のような羽が頭に何本も生えていて、たくさんという意味で「八つ頭（がしら）」と呼ばれ、中国から朝鮮半島を経て皇居に迷い込んだものだった。

皇后は天皇が公式の席にお臨みになられる直前に、しばしば襟元のネクタイを直された。昭和四十五年の大阪万博にお揃いでお出かけになられたときには、天皇が「香水の噴水」で皇后を手招きされて、ご一緒に香りを確かめられたり、お二人で「世界のネコメ石」にふれ

て願いをかけられた。

天皇はその後の記者会見で、そのときに何を願われたのか質問されて、「夢という言葉があてはまるかどうかわからないが、世界の平和と人類の幸福を願っています」と答えられた。

昭和六十二（一九八七）年七月ごろから天皇は体調を崩された。そのために、宮内庁病院で検査を受けられたところ、十二指腸から小腸にかけて通過障害が発見された。

高木顕侍医長を中心にして、手術をすべきか検討したところ、九月に手術を受けていただくことになった。

手術について天皇のご裁可をいただくために、高木侍医長と徳川義寛（よしひろ）侍従長が御前に出た。天皇は「そうか」とひと言だけいわれて頷かれたが、すぐに「良宮にはどうする？」とおたずねになった。

手術と聞いて皇后がショックを受けられることを、気遣われたのだった。侍医長と侍従長が、皇后にお話する大役を引き受けた。

昭和六十四（一九八九）年一月七日に、昭和天皇が崩御された。そして、六十五年にわたるご結婚生活を閉じられた。

あとがきに代えて

やはり日本の皇室の最大の特徴は、世界の王室のなかでもっとも古いことである。太古の昔の神話のなかから発祥して、世界のなかで今日まで連綿として続いている唯一つの王家である。

神話を科学的な根拠がないといって、斥けてはなるまい。それぞれの人に精神史が欠かせないように、国も精神史を尊ばねばならない。神話は日本民族の精神史である。

もし、日本の皇室の生い立ちが、ヨーロッパや、他の国々の王室と変わらなかったとすれば、そのありかたも、さらには日本の国柄も、大きく異なったものになっていたはずである。

天皇は日本の祭主として、宮中祭祀に熱心に取り組まれてきたことと、御歌を詠まれてきたことによって、この国の徳の源泉となられてきた。

日本には古代から『言霊』信仰があって、言葉に不思議な霊力が宿っており、言葉を発すればその力が働いて、言葉通りの事象がもたらされると信じられていた。

よい言葉を発すれば、よい現実をもたらすことができるというものだが、西洋でも中世まで同じような言霊信仰があった。キリスト教会はラテン語を典礼に用いたが、「ベネディクション」（よき言葉）がよい現実をもたらし、「マルディクション」（悪しき言葉）が悪い状況をつくるという考えかたである。

和歌には、言霊が籠っている。和歌は日本でもっとも古くからつくられている詩歌であるが、倭歌、大和歌とも呼ばれる。歌会始では、朗々と、野山を祝福しながら渡ってゆくように、和歌が吟じられる。皇室の本質に歴代の天皇の御製を通じて、触れることができる。

昭和天皇について驚くべきことは、多くの御製をのこされたのにもかかわらず、日華事変から日本が国家として生き死にを賭けて戦った大戦中でさえ、戦果を喜ばれたり、敵を撃つことを願われたり、戦勝を祈られるものが、一つとしてないことである。

これらの御製は将兵たちが詠んだ歌と、まったく異なっている。平和を希求される心は、神話に根ざしている皇室の伝統がもたらしたものなのだった。

開戦後のはじめての新年の昭和十七（一九四二）年歌会始の御題は「連峯雲」だった。

天皇は「峯つづきおほふむら雲ふく風の　はやくはらへとただいのるなり」と、詠まれている。平和が一日も早く甦ることを願われた。

毎年の歌会始の御題は天皇が選ばれる。翌年の御題は「農村新年」だった。天皇は「ゆた

かなるみのりつづけと田人らも　かみにいのらむ年をむかへて」と歌われている。

昭和十九年の御題は、「海上日出」であるが、「つはものは舟にとりでにをろがまむ　大海のはらに日はのぼるなり」と詠まれた。御製に珍しく兵（つわもの）、舟、砦（とりで）という戦いにかかわる言葉が登場するが、好戦的であるとはいえまい。

前年に、マキン、タラワ両島守備隊が玉砕したが、多くの太平洋の島々に孤立無援となった兵たちに、思いを馳せられたものだった。

ところがこの他に、戦（いくさ）や兵たちを歌われた御製はない。

戦争最後の年の昭和二十年の御題は、「社頭寒梅」だった。「風さむきしもよの月に世を祈る　ひろまへ清く梅かをるなり」と詠まれている。

このような皇室のありかたは、緑豊かな自然に恵まれた国土と、自然を尊んで生きようと努める民族信仰である神道と一体になったものであろう。

昭和天皇は、遥かな古えの日本の祭儀と心を受け継いで、お苦しみになりながらも、この国の祖形を見事に守られたのである。

◎参考文献

『入江相政日記〈全十二巻〉』入江相政著　朝日新聞社編
朝日新聞社出版局
『思い出の昭和天皇』秩父宮勢津子・高松宮喜久子・寛仁親王・
池田厚子・東久邇信彦・壬生基博著　光文社
『木戸幸一日記〈上・下〉』木戸幸一著　東京大学出版会
『宮中侍従物語』入江相政編　TBSブリタニカ
『御製に仰ぐ昭和天皇』副島廣之著　善本社
『皇室の伝統精神と即位礼・大嘗祭』所功・高森明勅・加瀬英明著
広池学園出版部
「座談会　皇族団欒」秩父宮勢津子妃殿下・高松宮宣仁親王殿下・
喜久子同妃殿下・寛仁親王殿下　司会・加瀬英明
〈文藝春秋・昭和五十一年二月号〉
『侍従長の回想』藤田尚徳著　中央公論社
『昭和天皇　全記録』山本七平・星野甲子久・保阪正康・加瀬英明
（他）著　講談社
『昭和天皇と鰻茶漬』谷部金次郎著　文藝春秋
『昭和天皇発言記録集成〈下巻〉』防衛庁防衛研究所戦史部監修
中尾祐次・加瀬英明（他）編　芙蓉書房出版
『神秘なる天皇』加瀬英明著　日本教文社
『背広の天皇』甘露寺受長著　東西文明社
『側近日誌』木下道雄著　文藝春秋
『大日本帝国最後の四ヵ月』迫水久常著　オリエント書房
「天皇・運命の誕生」鈴木孝著〈特集文藝春秋『天皇白書』〉
『天皇家の戦い』加瀬英明著　新潮社
『天皇さまの還暦』入江相政著　朝日新聞社出版局
『天皇と昭和史』ねずまさし著　三一書房
『日本報道三十年』ヘッセル・ティルトマン著　加瀬英明訳
新潮社
『マッカーサー回想記』ダグラス・マッカーサー著　津島一夫訳
朝日新聞社
（書名五十音順）

著 者

加瀬英明（かせ・ひであき）

1936年東京生まれ。慶應義塾大学・エール大学・コロンビア大学で学ぶ。『ブリタニカ国際大百科事典』初代編集長。外交評論家として国内外に豊富な人脈を築き、77年より数回にわたり首相特別顧問として対米折衝に貢献。皇室についての著書も多い。伊能忠敬の玄孫でもある。主な著書：『個性の時代』、『イギリス　衰亡しない伝統国家』（以上講談社）、『天皇家を語る　上・下』（たちばな出版）、共著として『イスラムの読み方』（山本七平、祥伝社）、訳書として『ユダヤ5000年の教え』、『ユダヤ5000年の知恵』、『決定版　ユダヤ・ジョーク集』（以上ラビ・マービン・トケイヤー著　小社刊）ほか多数。

*本書は書き下ろしオリジナルです。

JIPPI Compact

じっぴコンパクト

昭和天皇　三十二の佳話

2008年 9月27日　初版第一刷発行

著　者……加瀬英明
発行者……増田義和
発行所……実業之日本社
〒104-8233　東京都中央区銀座1-3-9
電話（編集）03-3562-4041
（販売）03-3535-4441
http://www.j-n.co.jp/
印刷所……大日本印刷
製本所……ブックアート

©Hideaki Kase 2008 Printed in Japan
ISBN978-4-408-42008-0（書籍管理）
落丁・乱丁の場合は小社でお取り替えいたします。
実業之日本社のプライバシー・ポリシー（個人情報の取扱い）は、上記サイトをご覧ください。

9784408420080

ISBN978-4-408-42008-0

C0221 ¥762E

1920221007628

実業之日本社
定価（本体762円＋税）

不器用ながらも誠実なお人柄で、深く愛した国民とともに、激動の「昭和」を築かれた裕仁天皇。伊藤博文を歓喜させたご幼少時の逸話、64年間の在位に大きな影響を与えた乃木大将の教えと皇太子時代のご訪欧、そして戦中戦後の感動の秘話など——皇族、歴代侍従長、侍従武官、侍医から各国要人まで、数多くのインタビューを行った著者が活写する！